
夢の跡

らんちゅ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の跡

【Nコード】

N4177U

【作者名】

らんちゅ

【あらすじ】

ある秘境にて生まれた京理^{きょうり}、現代において不必要な武の才能と特殊な境遇のせいで周りから蔑まれてきた彼が真・恋姫夢想の世界に。京理はこの世界に何を見出し、どのような人生を送るのか…

※原作キャラが死にますのでご覧になる際はお気を付けください。

※なかなか鬱物語です

神童と霸王

???

side

「暑い………」

目が覚めるとそこは、見たことの無い草原のような場所が地平線の限り続いていた。

他に見えるとすれば木がちらほらと軍のような武装した集団くらい。

…軍隊？

馬に跨がり猛スピードでこちらに向かってきている

「一体何がどうなってる？今日は大学は無い…ということはまさかあれは本当だったのか？軍はまだ米粒のようにしか見えないがそれほどしないうちに来るな。」

境遇が少し特殊なだけで、ごく普通の大学生として学園生活を謳歌していた時とはあまりにもかけ離れた現状に多少驚いたもののすぐに思考に耽った。

突然路頭に迷うような状況下でありながらこの冷静さを保てるのは前述した特殊な境遇が大きな要因となっている。

ある秘境にて生まれた彼は類いまれなる才能もあってか、その地に伝わる剣の頂の一つと言われる理心流を9歳という若さで修め、人々を以てして神童、生まれる時代を間違えた龍等と言わさしめた。

しかし、不完全とはいえ平和であるこの世界では彼の才能は受け入れられるような物では無かった。両親が日頃から『いつかお前の才能を活かせるような場所に』と、時には涙も含みながら語っていたが：

「それが現実となったのかどうかを確認するのはこの方達に聞けばわかる…か」

何時の間にやら周りをとり囲んでいた兵達の主である金髪ドリル美少女とそのすぐ側に侍っている美女二人に視線を向ける。

宮 京理（前書き）

二話目☆

会話よりその間の方が文字数が多い？
良くあることです。

宮 京理

??? side

「華琳様!こやつは…」

「…どうやら違うようね。報告とは違う容姿に服装だわ。」

「どうしましょう。連中の一味の可能性もありますし、引っ立てましょうか?」

「そうね、けれど逃げる様子も無いということは関係無いのかしら?…いいわ、陳留に連れて帰ってから考えましょう」

「…はっ」

「ん?」

この男はさりげなく殺気を放っている春蘭に相對して何ともないような顔をしている、余程馬鹿かもしれない…可能性としてはほぼ無いでしょうけど何かを持っている?

「そうだ。あなた、名前を教えて貰えるかしら?」

「みや きょうり宮 京理」

京理 side

人前で内緒話とはな…

だが、街に連れていってもらえるみたいだ。ここに来たばかりで何の情報も持たない俺にはありがたい話だった。

「そうだ。あなた、名前を教えて貰えるかしら？」

名前を聞くならお前から名乗れ、と言いたかったが情報の為我慢した。

「俺は宮 京理だ。好きに呼んでくれて構わない。」

「私は曹 孟徳、彼女等は夏侯惇、夏侯淵よ。」

…これは驚いた、彼女等がまさか魏の主柱とも言える曹操に夏侯兄弟、いや姉妹なのか。

「どうしたのかしら？」

多少面食らっていた俺にミニ金髪ドリルが疑いの目を向けてくる。しかし、なんだ。これは三国志の外史に飛ばされた、ということか。「いや、まさかこっちに來て初めて会った人が曹操ということに驚いただけだ。」

「どういうこと？」

「まあ、信じなくてもいいが」

と、今までの話で分かった事を話し終えると曹操と夏侯淵は苦虫を噛んだような、夏侯惇は訳の分からなさそうな顔をしている。

「もしか、あなたはあの天の御使いなの？」

「華琳様！騙されてはいけません！こやつは五湖の妖術使いかもしれません！」

「ふう、例えそうであつても無くても使える人材なら曹操は迷わず手に入れようと思うがな。武だけでなく風評も一度に手に入れることが出来るのだからな」

「はっ！華琳様に怪しい人物等近づけてたまるか！」

「いいでしょう、春蘭と手合わせして勝つことが出来たなら考えましょう。例え天の御使いとしての風評があつても無くても武官、文官どちらかに適正を見出だせなければいけないわ。」

「華琳様、あやつを見事叩き伏せてやります！」

「そうね、期待してるわ。勝てたら今夜は閨でたっぷり可愛がってあげるわ」

「華林さまあゝ」

ようするに、この外史の曹操はそっちの気があるのか…

こちらに出会って最初に会ったのが曹操で、どこの馬の骨とも知れない俺にチャンスを与えるような器の持ち主でもあったためにその事実は京理の心を滅多刺しにした…

宮 京理（後書き）

んばばあー！

華琳、京理の一端を知る（前書き）

この小説表す言葉って何かな？ ↓駄文、カス、小説検索の邪魔 e t
c…

容易に想像できそうです！

屑すぎてごめんなさい。だが、後悔はしてな…したくない。

華琳、京理の一端を知る

京理 side

「さ、そろそろ始めましょうか？」

曹操と夏侯惇の百合百合しい雰囲気を見ながらそれを見ていると、少しニヤケながら機嫌の良い声で俺に言ってきた。

「もう百合プレイは終わったのか？」

「プレイ？」

「気にするな」

曹操と話していると夏侯惇が小馬鹿にするような口調で割って入ってきた。

「華琳様、意味の分からない言葉を使う怪しい輩、すぐに粉碎してくれてやります！」

ふう、性別が違う時点で覚悟はしていたがここまで正史とかけ離れた性格だと笑うしかないな。

「御託は良い、さっさとやるぞ、魏の名将夏侯惇よ。」

この世界は重力が小さいのか、不思議と力が漲る。さーて、夏侯惇の力見せてもらおうか。

「「いざ、勝負!!」」

夏侯淵 s i d e

今、私はあり得ないものを2つ、いや1つ見ている。

精強である我が軍が束になっても敵わないあの姉者が女尊男卑のこの世の中で、天の御使いかもしれないというだけの男に為す術もなく押されまくっていてあの男にはまだ余裕があるように見える。

「奴はいったい何者なのだ…?」

そして、あり得ないものの2つ目は…

「…ねえ秋蘭、あなた宮の腕が見える?」

少し怯えたように華琳様が聞いてくる。

そう、あの男の振るっている腕から剣の先までがその速度の為見えないのである。

春蘭 s i d e

「ぐっ、ぬうー!!」

まるで子供をあしらうかのようにこちらが斬る為の動作に入ろうとしたとき、必ずその瞬間に人外ともいえるあり得ない速さで剣の鏑の少し上あたりを斬りつけてくる。それ以外は攻撃してこない。

今まで自分より強い奴と戦ったことが無く、ましてや相手は男である。彼女には相当ショックであった。そして、華琳様の命令に関係なくこの男に勝ってみたいという気持ちができつつあった。

と、その時奴が剣を下した。

「貴様、勝負中に剣を下すとは馬鹿にしているのかぁー！」

無防備状態の彼に剣を振り下ろした…はずだった

「!？」

なんと、振り下ろしたはずの刀剣部分が無くなっていたのである。

華琳 side

刀剣部分を持っていたのは女受けのかなりよさそうな端正で中性的な顔立ち、8尺はありそうな高身長、夏侯惇を子供扱いし圧倒できるほどの武の持ち主、宮 京理であった。

「これで、証明できたかな？」

宮はこちらの視線に気づき、汗を拭きながら少し余裕のある顔で言った。

「あなた、今一体何をしたの？」

「ああ、これ？」

と、言いながら彼はこちらに近づいてきて彼女らに聞こえないよう小声で言ってきた。

「夏侯惇の剣を斬り落としただけだよ。夏侯惇には悪いけど見た限り猪だから剣を折られても向かってきそうだからなるべく実力差を見せつける戦い方をしただけ。君達はお互いに恋慕に近い情があることも分かってたし、それに綺麗な女の子だ、傷つけたくは無い。」

言っている内容と関係なく話し方だけで口説かれてるのでは？と勘違いさせられるほど京理の顔も声も綺麗であった。

「決めたわ、あなたを採用する。私の側近として、これからは天の御使いと名乗りなさい」

「へ？やだ」

まさかの即答拒絶

「なぜかしら？」

「まず、その夏侯姉妹に側近云々は反対されるのは目に見えてる。それに、漢王朝の衰退、黄巾党の動きもあるから俺の天の御使いとしての風評が大事というのも分かるがこれから乱世だ、当然かなり多くの戦いがあるだろう？普通の武将として警戒されるならまだしも天の知識を初めから警戒された状態で戦うのはあまり得策じゃないと考える。それに曹操は「華琳よ」…へ？」

「私の真名よ、あなたに預けるわ。」

「真名って大事なんだろう？いいのか？」

「私が良いって言ってるの、それとも不服かしら？」

「いえいえ、じゃあ俺も改めて名乗ろう。俺の名は宮 京理。字も真名もないから京理と呼んでくれ。」

「とりあえず仕官云々は置いて、他にも聞きたいことがあるから陳留に戻りましょうか」

「」「はっ！（ああ）」「」

華琳、京理の一端を知る（後書き）

ん、主人公強すぎな気配が

だが、後悔はしてない！というか考えるのをやめた！

約束（前書き）

まだ始まったばかりですが高評価を付けてくれている方もいるように、嬉しい限りです。

3話分書き終えていたのにPCの充電器が壊れて電池切れになりメモ帳のデータも消えたためまさかの携帯投稿です（ノ△T）

約束

i n 陳留

「これは…良い町だな。」

素直に驚いてしまった。先程から数里程度しか離れていないというのに賊が現れそうな気配すらしない。流石とも言うべきか。

「華琳様が治めておられるのだ！当たり前だ！」

「華琳好きも大概だな」

「ふふ、可愛いでしょう？」

「ああ、違くないね。」

若干皮肉も込めて返答すると

「そうだろう？お前も姉者のかわいさを分かってくれるか、嬉しいぞ。」

百合目線で見える主君、自分の事かのように喜ぶ妹馬鹿

「??:」

極めつけは意味が分からないのか頭の上に？マークが出てしまっている、先の二人曰く馬鹿は可愛いのが当事者。

「これを俗にカオスと言う」

「かおす？誰に言ってるの？」

「気にするな」

「？まあ、いいわ。それで、あなたのこれからの事だけど天の御使
いとしてではなく普通の武将として仕官する、ということで良いの
かしら？」

「ああ、いずれはな」

「どういうことだ？」

妹馬鹿モードから切り替わった秋蘭が聞いてきた。

「黄巾党の動きが本格的になる前に各諸侯を見ておこうと思ってな」

「…良いでしょう、必ず私の元に戻ってくると約束出来るなら許可
するわ」

「ああ、約束する。」

優しい笑顔をしながら答えると

「「っ！！」」

「ん？どした？」

三人の顔がゆでダコも真っ青、いや真っ赤かなほど赤くなっていた。
華琳主義でかなりの鈍感でもある春蘭までもがこうなっているのだ

からその凄さは知れよう。

「そ、それで誰の所へ？」

「ん、袁紹、袁術、公孫賛、劉備、孫策、董卓、馬騰辺りだな」

「劉備：確か公孫賛の客将をしてると聞いたがそこまで気になる人物なのか？」

まだほとんど名は知られていないのだろう、秋蘭がそんな反応をする。

「お前らが言う天の国では、徳のある人物として英雄扱いになっている。」

「ふふ、劉備ね、楽しみだわ。我が覇道の邪魔になるようなら正々堂々と叩き潰してやるわ。」

典型的な悪人面をしながら言っているのを余所に

「まあ、とりあえず最初は『伝令！』！？」

「何事か！？」

「黄巾党の賊が山越えの村を襲撃している模様、至急援軍を願いたいとの事！」

「秋蘭は偵察部隊を出して状況の確認を、春蘭はそれに応じて軍備を整えよ！京理は糧食の準備を、監督官がいるから協力して行いなさい」

「「御意！（ああ）」」

…どうやら旅は少し先になりそうだな

約束（後書き）

ちよいと話急ぎすぎですかね？

無意識に早く反董卓連合を書きたいせいなのかも…

王佐の才？（前書き）

PC復帰記念の一応連投です。

消えた分を覚えてる限り複製して投稿してます、可笑しい部分もあるかもしれないですがそこは処女作、三国志無知識というバリアがあるので（あ

王佐の才？

??? side

「それはそこに置いといて。」

「しかし、これで大丈夫でしょうか？曹操様にこのまま伝えてよろしいので？」

ネコ耳の少女に1人の兵士が訪ねた。

「ええ、それで問題ないのよ。さっさと行ってきてちょうだい。」

「はっ！」

ふう、これで上手く行けば私はあのお方の横に立つことができる。

.....

まだここに来て間もないが曹操様は予想を遥かに超えたお方だった。凛とした顔、単なる刺史とは思えないほどの覇気、仕事への取り組みの一つ一つが目を見張るものがあった。

今まで仕えてきた袁紹様には厄介者扱いされ、疎まれてきた。だが曹操様は実力主義者、利用価値のあるものはどんなものであろうと使うことに対して躊躇うことがない。今までの人生でこれほど稀有で大きな器量の持ち主に出会ったことがあるだろうか？否、断じて否である。

曹操様が同性愛者らしいというのは耳に入っている。軍師としてだけでなく、閨でもお供することができれば…ああ、考えているだけで抑えきれなくなってしまう。

「…いい、大丈夫か？」

ああ、待ち遠しい。

「大丈夫？」

！？

「何よ、男のくせに話しかけないでくれる！？」

人がせっかく良い気分だったというのに…だから男って嫌い、汚らしいし。

「ふう、とんだごあいさつだな。俺は宮京理、さっきの兵士から糧食についての資料ができてるということで華琳に渡す前に一つ聞きたいんだが…」

！？

「！？貴方何曹操様の真名を勝手に呼んでるのよ！？曹操様の耳に入ったら殺されるわよ！？馬鹿なの？」

こいつ、あろうことか曹操様の真名を呼ぶとは。許せない。

「落ち着け。俺は華琳に真名を預けられている、春蘭と秋蘭にもだ。」

「嘘よ！」

まさか古参である夏侯姉妹の真名まで口にすると、極刑でも物足りないものだ！

「もう、この際真名はどうでもいい。」

「良くないわよ！」

「用件はこれ。糧食を華琳が提示した量の半分にした理由。俺の勘違いじゃなけりゃ、君は華琳にお目通りにかないたいんだろう？」

「なっ!？」

「でも、行軍速度と兵の練度を考えると可能といえば可能だけどどんな不意な出来事があるかも分からない、考えたらキリが無いがもう少し余裕があってもいいんじゃないか？確かに与える印象は大きい、華琳もすぐに理解すると思う。だけど、失敗したら元も子もないよ？」

吃驚しすぎて、開いた口が塞がらない。女尊男卑であるこの世界において、別の場所で軍師もやっていた私の考えのほとんどを見抜き助言までしてくるような輩がいるとは。男のくせにこれほどの智を備えているとは…ましてや、見てくれで大体分かるがこの男は武官なのだろう。武はどれほどのものか知らないが昨日、武においては並ぶ者はほとんどいないとされるこの軍最強である夏侯惇を子供をあしらうかの如く一蹴してしまったという男がいたと噂で聞いている。もしや、この男がそうなのか？

「ん？」

改めて見ると、かなり均整のとれた顔立ちだった。おそらく、100の女性が100かっこいい、奇麗等の言葉を口にするだろう。

「大丈夫？」

「っ!？」

癖である『観察』をしていると、少し笑った顔がいつの間にか目の前まで来ていた。やはり……かっこいい。

男嫌いな誰にも負けないと自負していたはずだったが、この顔を前にして脆くも崩れ去った。

この男になら。いや、この方なら…

「荀?…」

「へ?」

この方も曹操様と同じ、私を理解してくれるお方!

「私は性を荀、名を?、字を文若。真名を桂花と言います。宮様、我が真名預かりください。」

京理 side

：もう何がなんだか訳が分からない。会っていきなり罵倒されたかと思えば、急にぶつぶつ呟き、それが終わるといきなり真名を預けてきた。

「あ、えーと。こちらとしては凄く嬉しいけど、真名って大事だろう？ いいのか？」

「はい、宮様が望むのなら真名だけでなく体も預けるつもりです！」

：悪い子ではないんだろう。ただ、少々行きすぎている。いろいろと

「ちょっと、今昼だからね？ とりあえず、俺の考えは間違ってたみたいだから華琳のところへ行こうか。」

「はい、宮様！」

華琳の元へ向かう道中

俺は旅の出来の時期を考えながら歩いていた。やっぱり、ある程度落ち着いてからにするか…。

斜め後ろを歩いている桂花といえば、恍惚とした表情を浮かべながら「曹操様と京理様と私で云々…」

うん、これはいろいろと危ない。Y A B A I。

屈託のない笑顔、凄く可愛いと思うがなんだか少し怖いとも思ってしまった。

「ああ、桂花。とりあえず、俺は字も真名も無いから京理って呼んでくれ。」

「いいんですか!？」

これまた満面の笑みで聞き返してくる。

「ああ、むしろこちらからお願いするよ。」

「分かりました。ですが、恐れ多いので京理様、でよろしいでしょうか?」

狙っているのだろうか、このネコっぽいしぐさを見て何も感じないやつ等いない。

「あ、ああ。慣れたら呼び捨てで呼んでくれ。」

「はい、是非!」

ふう、また一波乱ありそうだな…。

王佐の才？（後書き）

やらかした感が半端無いです。他のSSにあまり？無い話にしよう
と考えた結果こうなってしまった。

7／18 22..06 若干訂正いたしました

出立前

華琳 side

………遅い。どれくらい時間が経ったかは分からないが、京理に頼んだのは監督官と共に糧食の準備をしてその最終確認の書類を持ってきてもらうこと。これだけだというのに、いくらなんでも遅すぎる。現に秋蘭からは賊の数は200程で今はその村から数理離れた場所にいるとの報告が入っており、春蘭ももう準備ができていてる。

「すまん、遅くなった。」

そんなことを考えているうちに当の本人はあまり悪びれた様子もなくやってきた。

「遅い！」

「あー、えーと。ごめん…とりあえず、これ最終確認の書類だから書類を受け取り、内容を確認すると糧食が半分しか用意されていなかった。」

「…これはどういうことかしら、京理？あなた監督官と一緒にやったんじゃないのかしら？」

秋蘭も横から見るとかなり驚いていた

「いや、正確には俺が行ったときにはその書類はもうできてたよ。」

俺は中身を確認してそれをここに持ってきただけ。」

「あなた、まさか目でもおかしくなったのかしら？元々悪いの？…それとも、馬鹿にしてるのかしら？」

「いや、そんな訳ないだろ。華琳でなかったら俺はこんな事しないよ。」

く、その笑顔はずるいわよ…。

「ふう、ようするにその監督官からすべてを聞けば良いわけね。」

さすが華琳と言うと斜め後ろにいた女の子が前に出てきた。

「私は性を苟、名を？、字を文若と申します。」

「あなたが監督官ね」

私と背格好は同じくらいだろうか、目立った特徴といえばネコ耳くらいだが…

「で、今の話を聞いていたから分かると思うけどなぜ糧食が指定されていた半分しか用意されてないのかしら？危うく糧食不足で行き倒れになるところだったわ。」

「いえ、絶対にそうはなりません。」

「…何？」

「理由があります、聞いていただけますか？」

「いいでしょう、納得のいかない答えだった場合はどうなるか分かっているんでしょうね？」

「はい、主の満足のいく答えを出せぬ者の献策など誰が聞き入れるでしょうか。もとより覚悟の上です。」

強い意志、覚悟、そういうものが今の彼女からは伺える。身は体を表す、我ながら言い得て妙である。造語とはいえこの言葉を作った人物を褒めてやりたい。

「…二言はないぞ？」

「はっ！では説明させていただきますが…まず一つ目曹操様は慎重なお方故、強行軍をなさろうとはしませんが、賊程度が相手ならば今の曹操軍の精鋭たちなら当初の予定の7割でも十分勝利を収めることが可能です。二つ目に行軍速度、持っていくものが少なければ当然速くなり、そこに必要だった人員も少なくなります。三つ目、私の考えた策を用いてくだされば戦闘時間も飛躍的に短くなります。」

この子は…なんという良い拾い物だったのだろうか。

「四つ目、これが最後の理由となりますが、これが1番大きい理由…かもしれません。それは、我が軍に京理様が居られることです。」

なぜ荀？が京理の名前を…

まあいいわ、それは追々聞くことにしましょう。
それよりも

「それはどういふことかしら？」

「京理様は武の方は噂でしか聞いておりませんが軍最強の夏侯惇を圧倒し、知においては先程私が説明した理由、その悉くを書類を見ただけで見抜かれました。そして、半分という思い切った数字から、私が曹操様とお会いして今のような状況になることを望んでいたことすらも。」

「「なっ!？」」

秋蘭も驚いたのか、そのまま呆けた顔をしている。私もそう、こんな人間が本当に存在するのだろうか。だが、こうして今ここにいます。

「「こらこら、言い過ぎだって。それに華琳ならこれ位は遅かれ早かれ気づくだろう?」」

「「さあ、正直なところ分からないわね。…京理、あなたいったい何者なの?」」

「俺?…いずれ君に仕える将の一人さ。」

「あなた、野心は無いの? 望めばい「華琳、俺はいずれ君に仕える。言ったはずだ。」」

「!？」」

京理 side

「これは変わらない。」

「そ、そう。ならいいわ。」

そう言うのと華琳は顔が真っ赤になっていた。持病かな？

「華琳様、積もる話もあると思いますがそろそろ出来した方がよろしいのではないのでしょうか？」

珍しい、あの春蘭が的確な発言をするとは。…いや違う。ただ暴れたいだけか、顔に出てしまっている。

「いけない、私としたことが。苟？、あなたの真名は？」

「っ！桂花でございます。」

別のことを考えていたのだろうか、慌てて答える桂花。

「桂花、あなたの才、我が覇道を突き進むため、天下を取るために存分に使わせてもらうことにするわ。」

「はっ！」

「ならまずは、此度の戦いで見事我が軍を勝利に導き、その智謀私に証明して見せなさい！もちろん半分の糧食でね。」

「御意！」

これが王佐の才…か。外史とはいえその忠義、変わらないものであって嬉しい限りだ。

「さて、桂花に期待されていることだし賊共には悪いが少し本気を

出させてもらうかな。」

「…京理、貴様あの時どれくらい手を抜いていたのだ？」

笑っていると、今まで難しい話についていけて無かったと見られる春蘭がそう訊ねてきた。

「本気には半分行かないくらいかな？」

「「「「なっ！！」」」」

「それであの強さとは…」

「京理様あゝ」

「あなたの武に際限は無いのかしら？」

「くそゝ、貴様の理心流とやらを私にも教えろ！」

それぞれ発言しているが、桂花の発言は意味が分からない。突っ込むのはやめておこう。

「それより、今は賊共を叩くのが先だろう。一応俺の初陣なんだ、完璧にしたい」

「この苟？めにお任せを！必ずや京理様と曹操様を勝利に導いてみせます！」

桂花、それは嬉しいがその後に小声で「勝ったらご褒美に京理様とゝ」ってなんだ？

…聞こえてしまった身にもなっ
てくれ…

出立前（後書き）

華琳がなぜ造語を知ってるかって？それはこの物語は想いが物語を作るうんたらかんたら…だった気がするからということで許してください。別名、ご都合主義ともいう。

三羽烏と（前書き）

昨日はちよいと用事があつて投稿できませんでした、ごめんなさい。

一応自分の頭という名のデータベースで確認していますが辞書とかで確認してないので間違つた使い方とかあつたら報告してもらえると助かります。些細なところも直しますので。

三羽鳥と

京理 side

村が襲われているという報告があった時間からおよそ半刻が過ぎようとしていた。

一行は既に準備を終え村に向かうべく歩を進めていた。さすが華琳である。

「で、今はどういう状況なんだ？」

「斥候からの報告によれば他の場所から流れてきた敗残兵等と合流していつてるみたいね。2000位に数を増やしていて今にも襲いかかりそうな状況よ。その村には義勇兵がいるみたいだけど数は200人しかない。ようするにかなりまずい状況ね。」

「私が先遣部隊として行くことも考えられたがこちらは1200人、途中賊に襲われることも考慮すると本隊に戦力を残す以上400人程度が限界だ。」

「ふん、そんな奴ら、私が一人で叩き切ってやるわ！」

秋蘭の言葉にそんな事を言っている春蘭に呆れているのだろう、華琳は

「はいはい、春蘭はとりあえず本隊よ。」

「華琳様あゝ」

「賊討伐と村の防衛程度の目的で我が軍最強の将を出す必要は無いわ。そうね、京理行ってくれるかしら？」

にやけた顔をこちらに向けて言ってくる。
俺の将としての統率力を見たいのだろう。
だが、

「残念ながら、今回はまだ俺の出番では無いな。」

「なっ！貴様華琳様の命を拒むつもりか！」

華琳もあまり良い気分はしていないのだろう。若干青筋が出てきてしまっている。

「どういうことかしら？」

まあ、いいか。様子を見た限りでは桂花以外気づいてないみたいだしな。

「今から行くこと、それはまず第一に村の防衛。そして先遣隊は本隊が来るまでの、間違いないね？」

「はっ!？」

今の一言で気づいたのだろう、驚いた顔をしている。かわいいな。
…違う違う！

「確かに…そうなるのであれば秋蘭が適切ね。」

「それが的確だと思われます（そうだろうな。）」

「「??:?」」

「秋蘭、行ってくれるかしら？副官として京理を付けるわ。」

さすが、華琳…。行きたく無かったわけではないがやってくれる。

「は、はっ！」

「どういうことなのだ？」

春蘭はもちろん、秋蘭も分かっているようだから説明するか。

「今回は村の防衛で、少数にせよ組織されている義勇兵もいる。それで名も知らぬ俺と華琳の腹心として知られる秋蘭、村の人達はどっちが嬉しいと感じる？もちろん、秋蘭だろう。それに隣とはいえ比較的近い村だ、顔も知っている人もいるはずだ。本隊が来ると分かっている時、大事なものは気持ち。俺より秋蘭の方が村が一丸となって戦って本隊が来るまで守り切る！って気持ちになれるだろう。それがこの村の為にもなる。今後また襲われるとも限らないからな、そういう時にそういう心構えは大切だ。」

「…京理、お前軍師になれるんじゃないか？」

「「?:?」」

「はは、無理だよ。それに桂花は気づいてたみたいだったけど？」

「夏侯淵が良いと仰られた理由はある程度気づいてはいましたが村

のその後の事までは考えが及びませんでした。さすが京理様です。」

「あなた、今から文武官になったから。」

満面の笑みでそんな事を言ってくる華琳、断れないのが悲しいです。

「文官としての仕事なんてやったこと無いし字も書けないよ?」

「字は私が教えよう、それに今は一応客将という身だろう? 仕事は簡単なものしか寄こさんさ。」

秋蘭が言っているが、絶対にそんな事はないと思ってしまふのはなぜだろう?

「さて。」

切り替えたのか華琳が覇気のある声で言う。

「秋蘭、京理両名は先遣隊400を率い村の義勇兵と協力して本隊が来るまで賊の攻撃を防げ!。」

「「御意!」」

「京理、これがあなたの初陣、奮励努力せよ。」

「ああ、死なないように頑張るよ。桂花、一応作戦はさっき言ったとおりだから、よろしく。」

「はい!」

「作戦？」

「ああ、後は桂花に聞いてくれ。俺たちはもう行くから。」

村 side

「こりゃあかんでえ、風！。さっきの数で手いっぱいだったちゅうのに数増やしてこっちに向かって来とるみたいや。」

「いくら賊でも厳しいの！。こっちは守りながらで」

関西弁で胸がとにかく目立つ女の子とそばかすと眼鏡がチャームポイント？の二人がもうダメと音をあげている。

「真桜、沙和！お前らがそんなんでどうする！？刺史様は逃げてしまわれたが、伝令に人を行かせたし隣の刺史様が必ず増援に来てくださる！」

その二人に風と呼ばれている全身傷だらけの銀髪の女の子が叱咤する

「せやけど、なあ？」

「なの！。」

二人で目を合わせてまだウジウジしている。

「だからお前たち！ん？あれは…夏侯の旗！みんな、曹操様から援軍が来たぞ！」

至る所で喜びの声、だが多少明るくなったものの相も変わらず元気は無い二人。

「でもお、見る限りあの人数じゃ2000なんて数とても抑えられないのー。」

「それでも、来てくださった事に意味がある。皆の士気が上がっているんだ。お前たちがそれでどうする。」

「その通り。」

「「へ？」」「」

「君たちが義勇兵の長で良いのかな？」

「あ、ああ」

「俺は隣町から来た曹操軍の宮 京理、よろしくね。」

宮京理と名乗った人物は、女とも思えた顔つきだったがその体格は若干細いながらも確実に男のそれであった。

「こ、これは失礼しました。私は楽進文謙、この義勇兵の長をしております。と言ってもこの村の自警団のようなものですが。」

「あの防柵って誰が作ったのかな？」

傍らに置いてあった木で作られた柵を見ながら言った。

「ああ、それはウチです。」

「そうか、君には門の補強をお願いをしたいんだけどいいかな？ あ、それと北以外の東、西、南だけで良いから。」

「へ？ はあ、かまいまへんけど。」

「眼鏡の君には村の人々を1か所に集めてもらいたい。」

「ま、任せてなのー。」

「最後に楽進、君には後から来る先遣隊と協力してある物を作ってもらいたいんだ。」

「あるもの？」

三羽烏と（後書き）

なかなか、戦闘シーンに入れない…
別に嫌じゃないんですよ？嫌いなだけで（あ

後お気に入り登録してくれた方々、なぜか高評価をくれた方々本当にありがとうございます。

追記…修正しました

策もよし、咲かぬもよし（前書き）

今回は今のところ（というかおそらく今後含めて）最高の仕上がりです、主にサブタイが。

策もよし、咲かぬもよし

京理 side

「一応最終確認ですが、皆さんそれでも大丈夫ですか？」

眼鏡の子、于禁に頼んで集めてもらった村の人々に、確認を入れる

「ええ、よろしく願います。これで少しでも賊にやられる被害が少なくなるなら！」

「…承知いたしました。次善の策も用意してあります。それに相手は賊です、まさか数が逆に仇になると考えられる程の頭の持ち主はいないでしょう。」

最初提案した時はあまりの大胆さに皆戸惑っていたが、これからも華琳に守り続けてもらえるという事で村長や全ての村人からあることをする了承をしてもらえた。

「宮殿、例のものの準備完了致しました。」

「こっちも完成したでー。」

楽進と関西弁を喋る李典から報告を受ける

「ふう、これで完成か。じゃあ、村の皆さん方は先遣隊200を護衛として共に本隊と合流し保護されてください。」

「分かりました、宮殿もお気をつけて。」

「ああ」

笑って返すとすぐに先遣隊の半分と村の人々は宮と少し遅れてきた秋蘭、楽進、李典、于禁、先遣隊の残り200名強を残しすぐさま本隊へと向かった。

「しかし、まさかあんな策を実行すると聞いて驚いたぞ？」

「そうですよ、兄さん。」

「正直、私は最初とても賛同する気になれませんでした。ですが、宮殿のあの言葉を聞いたら凄く納得できました。大陸を統べる人が現れたとしたら、宮殿のような人であって欲しいものです。」

京理から言葉を受けて心酔してしまったのか少し夢を見始めている。

「楽進、それは買いかぶり過ぎだって。それにこの策は桂花と一緒に考えたんだぞ？俺一人じゃ無理だった。それに村の人の意見が大事だしね。」

「しかし、先に行くと言い出したのはその策の準備のためだったんだな。」

「ああ、ここでまさかあの楽進、李典、于禁と出会えるとは思わなかったしね。」

「へ？私達の事知ってるのー？」

「ああ、風の噂でね。」

ニコリと笑いかけると3人は顔を真っ赤にしていまい、俯いてしまった。

「どうした？」

「い、いえ！なんでもありません！」

李典と于禁もコクコクと同意している。

「まだ、色々話したいことがあるけどそれはこれが終わってからにしよう。」

「京理、放っていた斥候が帰ってきたのだが、どうやら京理の予想通り夜に襲撃する可能性が高そうだ。」

「じゃあ、作戦通り行こうか。華琳と桂花は状況判断に優れているから内に対応して事に及んでくれるだろう。それまでは一刻交代で見張りながら休憩しよう。」

「ああ」

「はっ！」

「了解やー」

「わかったのー」

華琳 side

京理が先遣隊として出た後、桂花から策の内容を聞くとそれは信じられないものであった。

「何を考えているの、あなたは！？ 覚悟は出来ているのか聞いたわよね？ 馬鹿にしているのかしら？」

「いえ、これは京理様も考えられた策にございます。」

「京理が！？ どうやら私は京理の事を見誤ったようね、策にそんな事を用いようとするなんて。」

「国は何故国であるか…」

突然、桂花が語り始めた

「国は人が集まり、初めて国となる。人がいなければ始まらない。では村は何故村であるか…」

「その言葉は…」

「京理様がこれだけ言えば分ってくれるはずと。」

「…桂花、戻ってくる先遣隊に状況の確認をとり、村の者達をすぐ受け入れられるよう準備をなさい。そしてこの策、成功させるわよ！」

「御意！」

一つのわだかまりが取れたような清々しい気分になっていくようだ。

京理には出会ってからずっと驚かされているばかりだ。桂花も今までの行軍中無駄な動きがあるどころか、いろんなことに目を配らせてどんな状況にも対応できるようにしている。

「私は仲間に恵まれているのでしょね…」

一人感慨にふけている間に陽は沈んでいくのだった。

策もよし、咲かぬもよし（後書き）

次でいよいよ皆さんお待ちかね、初戦闘に（え

京理、華琳（前書き）

戦闘シーン？ ナニソレ？

携帯投稿だと文がおかしいかどうか分からりづらい…

京理、華琳

京理 side

「京理様、賊が来ました!」

村にあった宿の一室で寝ていた俺は既に周りが騒がしく、起きていた。

「ああ、今行く。」

扉越しの兵士にそう言うと、はっ!っと言って足音が遠ざかった。

「さて、楽しみだ」

不謹慎と分かりながらも笑ってしまっている自分を止められない。

時間は遡って、京理達が村の人達が集まった時間

「わしがここの村長をしております。それで、どのような事を考えておられるのかお聞かせ願えますかな?」

村長が聞いてくる。それも当たり前だろう、村の人達には何も言わずに楽進達に指示していたのだから。

「単刀直入に言います。ここを捨てます。」

先の行動のせいで余程期待していたのか、落胆する者や物を投げってくる者もいる。

「それはどういう事ですか？」

村長も怒りを露にしている。

「国は何故国か…。」

「何を「国は人が集まり、初めて国になる。人がいなければ始まらない。では村は何故村であるか。」

村長の言葉を遮るように言う。

「この場所に住んでいた者達がここに思いやりがあるのはもちろんだと思う。だが、この『土地』が村なのか…否、国だろうと村だろうと人がいて初めてそれは成り立つ。これは変わらない…だが、申し訳無い！」

京理の話に耳を傾けようとしていた所に急に謝られた村の人達は困惑した。

「どうなされたのですかな？」

違う、そうじゃなかった。喋っていて俺は気付いた、大きな矛盾に、そして自分勝手な己に。

「今回我が軍は討伐の名目も含めて行軍した。そして今から説明する策はそれに重点を置いている。村の人達の気持ちも考えずにそれ

が村にも、俺達にも最良と考えたからだ。先程話した事は所詮言い訳にしかない：そして、その策とは」

華琳 side

「まさか、賊の一番の目的である村を囲にするどころか：」

桂花によると策の全容はこうだ。

まず、村の者達を先に行かせた先遣隊の半数を護衛として本隊に保護させる。その間に残った者達で北を除いた門の『内側』の補強、油を染み込ませた藁の用意を行う。後は賊をわざと緩めた北門に誘い込み、予め村中に用意していた油入り藁に向かって火矢を放ち火計によって壊滅させる。その後、まだ村の中に入っておらず、目の前の光景に混乱している賊の残りを後からやって来た私達本隊との挟撃によって賊は為す術もなく壊滅する。だが、この策は村の者と私の許可があって初めて為しえる物だった。

先程の国の話を聞いて私は納得していたため、後は村の者達に確認をとるだけだった。確認せずに無理矢理実行することも可能だったが京理がそれを止めたようだった。

「曹操様、先遣隊半数と村の者達が到着いたしました。」

「ええ、今行くわ。」

念のため護衛として連れた春蘭と策の立案者である桂花を連れ天幕に行くと村長とおぼしき老人が居た。

「あなたが村長かしら？」

「はい、あなたが曹操様ですね。この度は我々を保護してくださり本当にありがとうございます。そして、老い先短いわしなんぞが死ぬ前に宮様のようなお方にお会いできて本当に良かったです。」

「そう、それで策の事だけだ…」

言い終える前に村長が、

「曹操様、わしらがいる限り村は無くなりませぬ。それをあの方が教えてくれたのです。村の者を代表して、よろしくお願い致します。」

そう言って頭を下げる。

そんな一人の老人を見ながら華琳は思った。

京理、あなたには王の資質がある。

秋蘭 side

「ぎゃあー」

「ぐああ」

「た、たすけ…」

村が燃えている。賊1500以上という数を巻き込みながら…

予想通り、いやそれ以上の成果をあげることが出来た。華琳様の旗も見えている。

「しかし京理の策、なかなか肝を冷やしたぞ。だがこれで賊を一網打尽に出来た。お前の手柄だぞ」
そう言う

「俺じゃなく俺と桂花の策だよ。それに俺は、俺の考えを村の人や華琳に押し付けたただだよ。勝手にな。」

「そう自分を攻めるな。結果はちゃんと上手くいったらろう？ 賊も討伐出来て村の者も全員無事だ」

「だが…「京理!!!」」

未だこの状態の京理の後ろにはいつの間にか華琳様が居た。

「華琳…」

「京理、その民と同じ目線で考えようとするのはあなたのとても良いところよ。村の者も私も素直に感謝している。今回の被害は所詮物だけよ、命は貴いもの、それを不必要に散らさずに済ませたあなたを讃える者がいても避難する者はいないわ。だから、元気にないなさい。」

そうやって京理に微笑みかける。

流石は華琳様だ、村の者達から聞いてこうなるかもしれないと思ったのかもしれない。挟撃は春蘭達に任せて一目散に来たのだろう。まだ息も整っていない。

「ふう、秋蘭。義勇兵の者達が活躍したと聞いたのだけけれど？」

「はっ、その者達により円滑に作戦を進めることが出来ました。」

「そう、ではその者達も呼んで今日は宴よ!!!」

華琳様の話を聞いた後、京理の顔色も幾ばくか良くなっていたように見えた。

京理、華琳（後書き）

今回は京理の優しさを遠回しに説明するというお話でした。

この話に関しては大幅修正も有り得ます。その時は小説紹介ページに書きますのでご確認下さい。

追記..最後の部分少し訂正しました。

再戦（前書き）

10話記念と言う事でちょっぴり長めに

区切りが良いんで次から旅になります。オリキャラも出てくるかも？

最初の部分修正しました。1度投稿確認画面で戻って消えた時に間違えて余計なところまでコピペしてました

再戦

京理 side

陳留に戻り事後処理も無事終え、3か月程俺は今東屋でまったりしている。

楽進、李典、于禁の3名はそのまま華琳に仕える事になりそれぞれ真名を交換した。桂花も功績が認められ正式に曹操軍の軍師となった。焼けた村の復興も、陳留で溢れていた武官文官として適性を見出せなかった者達を使っているおかげで職業難になる者も少なくなっていた。

真名は楽進が凧、李典が真桜、于禁が沙和である。

「しかし、五將軍の二人に李典とはな。」

臣下の礼をとっていた3人を思い出して軽く笑いながらそんなことを呟くと

「五將軍？」

どうやら聞こえていたらしい、秋蘭が多少汗を拭きながら寄ってきた。

「ああ、こっちの話だ。気にしなくて良いよ。秋蘭は修練か？」

「ふふ、姉者が貴様に完敗してからというものの良く相手になっているのだ。」

若干申し訳ない気分になったが、秋蘭が妹馬鹿ということをお願い出し何も考えないことにした。

「しかし京理、貴様は凄いな。」

「ん？何が？」

「全てだ。今回の考えた策、それを行う度胸、姉者を圧倒する武、物より者を大切に思えるその心、それに…いや、こう話していると京理が完璧超人に聞こえてくるな…」

「買い被りすぎだって、俺はそんな人物じゃない。」

「そんなに否定ばかりするな。行き過ぎた謙遜は相手にとって侮辱にしかないぞ。」

「…そうだな。とりあえず自分には未熟な部分がまだまだある事が分かったし諸侯巡りは良い機会になるかもしれない。」

「ふ、旅の事等てっきり忘れていたかと思ったが…誰に会いに行くんだ？」

「流石に右も左も分からずに出る訳にはいかないからな。正直、有力な諸侯とはいずれここにいると会えるんだが、やはり先に自分の目で見ておきたいさっきの理由もある。一応、考えているのはとりあえず董卓の所だな。」

「董卓？」

「俺の世界の歴史では暴虐の限りを尽くした魔王とされている。黄

巾党の反乱を治めた後、群雄割拠の時代が来る。その時どう行動するにせよ知っておいて損は無いだろう。それにうろ覚えだが確かあそこには俺が最も会いたい人物がいるはずだ。」

「飛將軍、呂布かしら？」

華琳がいつの間にか俺の背後に立っていた。

「華琳…。まあ、それも気になるがな、俺が会いたいのは張遼と高順だよ。」

「張遼、彼女だったら確か何進のところにいる気がするけど。確かにあれはいずれ欲しいわね。」

何進：ああ、そういえばあったね。そんな肉屋さんの名前。まだ黄巾党討伐は始まっていないからまだ大將軍ではないのか。高順はまだあまり知られていないのか話に出てこない。

「それで、京理。期間はどれくらいなのだ？」

秋蘭が思い出したかのように聞いてきた。

「んー、数年の内に戻るさ。」

諸侯巡りと言ったがそちらに目が行き過ぎて目先の事について情報不足過ぎるのも怖い、ここは外史だ。正史のようになるとも限らない。現に性別が変わっている人物ばかりだしね。その為にも情報収集を怠らないようにしないといけないな。

「な、なんだとおー！！」

色々考えていると突然怒号が響き渡り、見るとそこには桂花と春蘭の姿が。

「姉者、一体どうしたのだ？それに桂花も」

「ふん、この猪が京理様に勝つなんていう世迷言を言い出すから天地がひっくり返ろうと無理って教えてあげただけよ！」

「まだ言うかあゝ！」

火に油を注ぐような桂花の発言に、怒る春蘭。これから一緒に戦っていくんだ、仲良くしてもらいたいもんだね。

「おい、おm「そこまでよ！」」

華琳が割って入り、めんどくさいことを言い出す。

「あれから春蘭も随分と修練に励んでいたようだし、実際にやってみたらどうかしら？」

「華琳様、無理に決まっています！」

すかさず反論する桂花だったが聞き入れられず、更に俺の意志も無視して後日（というか明日）仕合が行われる事になった。

「ふはは、華琳様の為にも今度こそ貴様をメッタ切りにしてやるわ！」

「いや、しちゃダメだろ。」

そんな事を言っていた次の日、俺は中庭に来ていた。

「ふう、たかが仕合になんでこんなに人が集まってるのかな？あま
り目立ちたくないのに…」

そう、昨日の夜決まった事だったが見物しようと城中の人間およそ
600人程が来ていたのである。

「当たり前です。」

「桂花？」

「なにせ、これまで我が軍最強だったあの猪を瞬殺しこの間の智勇
を見せつけられたら武官文官関係無く気にもなるというものです。」

まるで自分の事かのように悦に浸る桂花であったが、言っているこ
とは正しいのだろうか。周りの者の口々から自分の名前が聞こえて
くる。

ただし桂花。殺してはいないぞ、殺しては。

と、そこへ三羽鳥とも言える3人がやってきた

「おはようございます。あの時は戦う様子は無かったようですので
今日はしっかり京理様の武、見させていただきます。」

「期待に応えられるよう頑張るよ。」

返事をしながらやはり凧は真面目な子だなあと感じた。他二人に爪の垢でも煎じて飲ませてあげたい。

その二人はと言うと

「凧、からくり京理君はよ買いに行かせて。新発売なのにもう生産中止ってなんやねん。」

「沙和、今月の阿蘇阿蘇まだ買ってないから早く行きたいのー。」

色々突っ込みたいが、一つだけに我慢しよう。

「からくり京理君って何？」

「兄さん、そんなん聞くのは野暮やで。」

ニヤリとしながら意味の分からない事を言ってくる。

「凧、色々大変だね。」

「はい…。」

3人と別れ、作られた会場の中心に行くとそこには仕合の相手である春蘭が立っていた。

「ふん、臆せず来たか。貴様の息の根今こそ止めて華琳様に褒めてもらうのだ！」

「動機が不純すぎるから…。」

「ふふ、京理を倒せばいっぱい可愛がってあげるといふ約束をしたからでしょうね。」

ニヤリと黒い笑みを浮かべている華琳。

「あのなあ…じゃあ、俺が勝ったら何の褒美が？」

「あら？私が可愛がってあげましょうか？」

これまた満面の笑みを浮かべている。

「遠慮しとこう」

「！？貴様、華琳様の命令を拒否するとは！羨ま…斬ってくれる！」

「そこまで言ったら手遅れだろ、口から欲望が漏れてるぞ。それに羨むも何も春蘭も同じ条件だろう…。」

「そ、そんな事はどうでもいい！早く始めるぞ！」

そう言っていきなり斬りかかってきた。

ガキッ！

その瞬間、空気が変わり騒いでいた観客も皆言葉も発さない。心臓の鼓動さえうるさく感じ止まって欲しいと思えた。

「勝敗の条件は何だったかな？」

ゆっくりと京理が暗い声で静かに聞くと若干恐怖していたのだろう

か、華琳は口を開けないでいる。

「え？ ああ、剣を突き付けるか相手の武器を手放させた方が勝ちよ。
…殺しは絶対にダメよ。」

明らかに俺に対してしか言っていない。まあ、しょうがないか。ここで中止にするわけにもいかないしな。

「じゃあ始めるか。華琳、合図を。」

「ええ。それでは、始め！」

春蘭は合図と同時に近づく剣を振り下ろしそのまま袈裟切りをしたきた。

うん、良い太刀筋だ。軽く受け止めながら春蘭の顔を見ると様子が変わり少し笑顔になっていた。華琳云々関係無くこいつを倒したい！ そんな感情だろう、顔からも見て取れた。

「はあ！！！！どうした、攻めてこねば勝てぬぞ！」

防御一辺倒になっていた俺を見て、更に剣激を重ねてくる。

「なあ、キンシャサの奇跡って知ってるか？」

「知らん、試合中に話しかけて隙を突く作戦か？ そんなものに引かかるか！」

そうだった、俺の時代じゃ昔の話でもここじゃ大分後の話だったな。そんなことを考えていると

キン！！！

俺の剣が折れた。ただの練習用の模擬剣だったせいもあるが攻めずに春蘭の剣を受け続けられそうなるか…

「もらったぁー！！！！」

華琳 side

春蘭は好機と見たのか思い切り剣を振り下ろして、決めようとした。誰もが決まった、そう思ったはずだ。

が、その直後見えたのは剣が折れ片膝を付きながら、京理に折れた剣を突き付けられている春蘭の姿だった。

「なっ！？」

皆も何がどうなっているのか分からないでいる。

「ふう、俺の勝ちね。」

皆が啞然としていたが、そのまま私の前に立ち

「褒美、良い馬が欲しいんだけど無理かな？さすがに徒歩じゃ旅はきつい。」

「ええ、ってちょっと待ちなさい！褒美の件は良いとして今あなた何をしたの！？」

春蘭も何が起きたのか分からないでいるようだが、それよりも勝て

なかった事を悔しがつている。

「ああ、それはね」「京理様！」

「桂花に風か。どうした？」

く、良いところで…

「あんな猪に京理様が負けるはず無いと信じておりました！」

「ありがとう。でも、ちゃんと真名交換したんだから猪でなく春蘭と呼んであげようか。」

「京理様の武は初めてみましたが最後、一体何をなされたんですか？」

そうよ、それを聞きたかったのよ。

「あれは、剣の横っ腹を掌打して剣を折ってその反動で春蘭の後ろに移動して剣を突き付けただけ」

「だって…」

振り下りてくる剣に掌打を当てようと考え、それを実行しなおかつ成功させる人物がいるなんて…

ましてや剣を振り下ろしたのはあの春蘭である、考えられなかった。そもそも京理は考え事をしながら片手で春蘭の一撃一撃を受けていた。その時点で春蘭に勝ち目は無かったのだろう。いや、それよりも仕合前に見せたあれは一体…

「全く大したものね。とりあえず、主である私と京理の話に割って入るような桂花はお仕置きね。そうね、男の武官文官をいっぱい呼んでおきましょうか。」

「か、華琳様！それだけはお許しを！」

我ながら良い性格をしている。

他所の間諜も紛れ込んでいたせいか、いつしか宮京理という名は本人の意思とは反対に広まってしまっているのであった。

再戦（後書き）

伏線は回収しないもの！

京理の良い呼び名？が浮かばない…誰か考えてくれー

※またも最後の所修正しました。

別れ時々出会い系？（前書き）

どうも、内容よりサブタイを考えるのが楽しいらんちゅです。
週間アクセスが100未満から全然変わらないー。あーうー

とりあえず、総合評価250pt到達記念！ということで連投。お
気に入り100いった時も連投する予定ですので皆さん御贔屓にー。

別れ時々出会い系？

京理 side

「もう、行くのね。」

陳留の門前。華琳が淋しそうな顔をしながらそう言ってくる姿はなかなかにかわいかったが、そろそろ行かないと色々間に合わなくなってくる可能性がある。

「ああ、行ってくる。」

華琳からもらった青鹿毛の馬、しんとう春灯に跨りながら答える。

※青鹿毛とは全身真っ黒の馬の事です。

「宮京理！」

「ん？」

「あなたは私の物よ。」

「ふふ、そうだな。」

これだけ言うと華琳は城へ戻って行った。

「さて、行くか。」

春蘭達とは既に別れの挨拶をしていたため早速目的地に向かう事にした。

.....

のだが、どうやって客将として仕官するか考えながら歩を進めている間にいつの間にかグルリと黄色い布を身に付けた賊に囲まれていた。総勢150人と言ったところか。
さて、どうするか。

「で、この女の子どーするんだな？」

デブがこちらを見ながらヒゲに聞いている。どうやら俺を女と勘違いしているようだ。

「デブ、そりゃ良い女は食っちゃまうに限るだろ。それで使えなくなったら売っちゃまえばいい。」

「流石兄貴、なら早速身ぐるみ剥いじまうぞ！」

「「おう！！！」」

「ふう、待て。」

「なんだ、命乞いか？」

ニヤニヤしながら聞いてくる。

「いや、俺は男だぞ。」

「・・・・・・・・・・。」

「男？」

「男。」

「んなはずあるかぁー！」

そういつて、斬りかかってきた賊の一人を迎撃しようとした時

「待てい！」

「だ、誰だ！？」

「たった一人相手に多人数で襲いかかる貴様らに名乗る名前など無い！」

そういつて、周りを蹴散らしながら一直線で俺の目の前までやってきた

「大丈夫か？」

そういつて、秋蘭と似た髪の色をした色白の女の子がこちらを見ながら言ってくる

「ああ、君は？って聞きたいところだけどひとまずこれを片づけないな。」

「おや？貴殿は武をたしなんでおられるのかな？」

「ああ、少しだけね。」

そういつて周りを見渡すと、まだ130人ほどがこちらを取り囲んでいた。

しかし、さっき見た動きを考えるとこの子かなり出来るな。春蘭くらいだろうか？この多人数じゃ俺には荷が重いと感じているのだろう、俺の方をカバーしながら戦っている。

「俺の事守りながら戦わなくても良いよ？今終わらせちゃうから。」

そう言って、可能な限り速く敵を斬っていく。一人一人相手にするより流れるように敵を再起不能にさせていった方が早いからな。

???

side

何だ、あの動きは。賊の間をゆったりと通り過ぎていくだけに見えるが超高速で斬りつけている。その姿は、まさしく剣舞であった。だが、剣舞は本来見世物であってこんな事が出来るはずもない。自分が30人を倒し終えた頃には100人を片づけてしまっていた。賊共の中心に返り血も浴びずに佇んでいるその姿が凄く美しく見えた。

「貴様、一体何者だ？」

無意識にそんな事を聞いてしまっていた自分がいた。

「俺？仕官希望の旅人だよ。」

「お主なら、どこへ行っても仕官先が見つかると思うが…誰か目当

ての諸侯でもいるのか？」

「そうだね、とりあえず董卓のところかな。」

董卓、確か善政を敷いていて民に好かれているという。そういえば、そこには華雄と官軍の呂布、張遼もいたな。

「星ちゃん、大丈夫でしたか？」

「星、大丈夫でしたか？」

「ん？風と稟か、私は無事だ。」

「このお方は？」

「ああ、今ここに転がっている賊に襲われていたのでな、助けに入ったつもりだったんだが必要無かったみたいだ。」

「?..?」

経緯を説明すると

「この人数を…しかも男。」

稟も驚いている。それはそうだ、女尊男卑であるこの世の中において男がこれほどの力を有していることなどほとんどあり得ないからだ。

「お兄さん、もしかして天の御使いなんですかね？」

天の御使い、占い師管輅が予言したという大陸に平和をもたらす天よりの使者。この世界の人間ではないと考えればあの強さも納得がいくがこの話もそもそも眉唾ものである。しからば、

「貴殿、名はなんというのだ？」

「人に名前を聞くときはまず自分から名乗るのが礼儀では？」

「失礼、私は趙雲だ。」

京理 side

趙雲子龍か、華琳達で慣れたはずだがやはり女だったか。ということとはこそ話している後ろの二人も…。

「俺は宮 京理。後ろの二人は？」

「私は程立と呼んでくださいー。」

頭の上に太陽の塔のようなものを載せているほんわかとした小さな女の子がこちらを『観察』しながら言う。

「今は戯志才と名乗っております。」

今は、ねえ。

しかし、程立に戯志才か。

「君達とはまた後で会えるかもね。」

「「?」?」」

さすがに意味が分からなかっただろうな。
そんな事を考えていると、

「宮殿」

趙雲が真剣な面持ちで声を掛けてきた

「私と…」

嫌な予感がする。

「一勝負致しませぬか?」

「断る。」

想像通りだったので却下する。この流れ、有名な武将とかと会った
びにこの流れになるんじゃないだろうか…

別れ時々出会い系？（後書き）

黒い馬に明るい名前を付けた理由？ギャップなんちゃらです。

宮殿って書くときゅうでんに見える事に今頃気づいた…

気力が残ってれば深夜にまた投稿するかも

旅は道連れ世は云々（前書き）

ども。この小説、内容はともかく読みづらくない？と思うようになり始めたらんちゅうです。

読む人が限られそうなものになっていってますね…。

旅は道連れ世は云々

京理 side

「ねえ、なんで今こんな状況になってるのかな？」

俺は今、趙雲と対峙している。

「俺断ったよね確か？」

「お主はあれだけの武を見せておいてこの星めをじらそうというのはですか？」

「何を言ってるの？」

意味が分かりません…

「問答無用！」

趙雲は確か涯角槍だったわけ？を高速で突いてきた。速さで言ったら春蘭より上だ。全てあえて紙一重に避ける。

「ふう、危ないね。」

「ほう、やりますな。」

まだ本気じゃなかったのだろう、自分の体の前で腕を交差させ

「では、行きますぞ。」

空気が変わった。今度こそ…来る。

キン！！！

そう思った時には既にこちらに槍の先端が来ていたため剣先で弾く。
趙雲が腕が上がったままの状態になっている所を攻める。

「くっ！」

腕を戻しかけていた趙雲の槍にめがけて踵落としをする。

ドン！！

「ふうこれでおしまいかな？」

趙雲 side

「な……。」「

目の前を見るとそこにはぽっかりと愛槍の形をした穴が出来てしまっていた。

「俺の勝ちだね。」

槍を掘り起こし、私に手渡しながらニツコリと笑いかけてくる。

「っ／＼／」

狙っているのだろうか。そんな顔を見せられればたいいの女は落ちてしまうだろう。

「まさか、星が負けるなんて。」

稟は吃驚している。常山の昇り竜として名の知れている私が男に負けたのだから。

「お兄さん、私達も旅をしているんですが良かったら一緒に行きませんか？」

風が突然そんな事を言い出す。

「風！まだ会ったばかりの人物に付いていく等！」

「ふむ、確かにそれも良さそうだ。」

「ちょっと星まで！」

「稟よ、この御仁の事が気にならぬのか？」

「それは、気になりますが…。それとこれとは話が違います！」

「見聞を広める良い機会ではないか。それに、この者と居るとおそらく諸侯の面々とも直に会えるぞ。」

「！？それはどういう…。」

改めて見ると彼が斬った賊は再起不能ではあるが皆生きている。そしてこの強さ、宮京理という名前。

「そうであろう？半国の器、宮 京理殿？」

京理 side

「な！この御仁が…だと？」

戲志才も驚いているが半国の器って何？

「何だい、それは？」

「あなたはこの近辺ではかなり有名ですからな。最初は偽物かと思いましたがどうやら本物でしたな。まさかこんな所で会えるとは。」

「有名？勘弁してくれ。」

「お兄さんは野心とかそういうものはないんですか？」

「無いし、目立ちたくないも無いよ。確かに戦ってみたい人物はいるけど権力が欲しいとかは無いね。」

「それだけの力を有していながら、随分謙虚ですな。」

「それで、半国の器って何なんだ？」

「簡単に言うと、あなたを手に入れるのは漢の半分を得る事と同意という事ですな。」

…なんだそれは

「そこまでの価値は俺には無いよ。というか、そんな功績を残した記憶も無い。」

「人民に国の在り方を説いて賊から村を救った英雄と聞いておりますが？」

もしや…華琳か？嵌められた。

「その程度で半国はおかしいだろ…」

「ふむ。まあ、それを見極める為に私達も是非御同行願いたいですな。それに董卓の所にはあの飛將軍呂布や神速の張遼もいると聞いている。気にならないはずがない。」

「どうやら、偶然にも我々と向かうところが一緒ですねー。」

「はあ、風や星がそういうのならしょうがないですね。」

何がしょうがないの？俺の意見は？…はい、聞く耳持たないみたいだね。

「おっと、これから旅を共にするのだ。改めて名を。私は趙雲、字は子龍。真名は星だ。」

「私は程立、字は仲徳です。風と呼んでくださいー。」

「私は…「偽名だろ？」！？」

そういうと、驚きっぱなしであった女の子は何度目か分からないが、
またも驚いていた。

「申し訳ございません、女3人での旅は危険を伴うので偽名で名乗らせていただきました。私は郭嘉、字を奉孝。真名を稟と申します。」

郭嘉：だと？まさかホウ統と並んで俺が会いたかった軍師ランキング1位であるあの郭嘉？こと軍略に関しては諸葛孔明や周公瑾すら上回るという？それに趙雲と程？、今は程立か、にまで会えるとは随分運がいいというかなんというか…

「俺は宮 京理。字も真名も無いから好きに呼んでくれて構わないよ。」

こうして、半強制的に4人旅になるのだった。

「どうでもいいけど、春灯に4人乗るとか無茶だからやめてね…。」

不安だ…

旅は道連れ世は云々（後書き）

半国の器…15分考え込んだ末出てきたのでまともなのがこれだけでした。モチーフにしたのは、分かる人には分かるかな？

作者は曹操、郭嘉、張遼、ホウ統、高順、ホウ徳、トウ艾、孫策辺りが大好きです。鼯鼠はしない…はず？

道草は食うもの（前書き）

お気に入り100件キター！総合評価300キター！

サブタイトルでなんとか皆さんを繋がせている現状を打破したい。
そして、何故か100を超えない週間アクセスさん。

道草は食うもの

京理 side

旅を始めて10日程、宿はいつものように2部屋とる。幸いにも華琳からは春灯以外に、しばらく余裕を持って旅できる分の金ももらっていたのでその点に関しては問題は無かった。そう、その点には…問題は、

「もう慣れたけどさ、あえてもう一度だけ言わせて。・・・なんで俺の布団の中にいるの？星と風は。」

朝になって起きると一人で寝ていたはずの俺の部屋の布団の中に何故か毎回いる星と風。鍵施錠したはずだったんだけどな…。

「おお、お兄さん。また風と星ちゃんを連れ込んだ」今、朝だからね。」

言わせないよ？

「ふぁ、主。昨晚もはげし」星は知らないけど俺は熟睡してたから。」

「というか、いつから俺は星の主に？」

「勝負に負けた女は勝った相手の奴隷とな」「らないから安心して。」

つと、そんないつもの穏やかな朝を過ごしていると

「こら！星と風はまた…！」

これも、毎度の事だが急に入ってきた稟に引きずられながら部屋を後にする3人。ちなみに最初は俺が本当に連れ込んだと勘違いされて説得するのに大変だった。

「じゃあ一つ。賊退治と行くか、星。」

「ふふ、主に鍛えられておりますからな。腕が鳴るというもの。」

星達は元々それほど多くの金を持っていなかった。その為、村を襲ってくる賊を退治する代わりに路銀をもらったり宿に泊めてもらうという事を繰り返しながら董卓のいる長安へ向かっていた。星と毎日手合わせしていたため、腕が鈍る事も無かった。

「ぎゃああああ…！！！」

「ひゃあ…！！！」

「助けてくれー！！！」

俺と趙雲の二人に襲われ蜘蛛の子を散らすように逃げだす賊。

「しかし、主。最近の賊は張り合いがありませんな。」

「元はただの農民だからな。そもそも星と互角に戦えるのなんてこの国で両の手で数える程度にしかないだろう。」

「主に褒められるのは悪い気がしませぬな。」

少し頬を緩ませている星の顔はとてもかわいかった。

「むー。お兄さん、毒牙にかけるならまずは風からにしてほしいのですよー。」

意味不明な理由で若干怒り気味の風。

「ふがふがが。」

ぼそぼそと、京理殿が星の肢体云々と呟きながら何故か普通の人間の致死量以上の鼻血を出している稟。最初は吃驚したがもはや慣れた。

早く、まともな人物に会いたいです……。心の底から切に願った。

・
・
・
・
・
・
・

「ここが、長安か。」

「良い街ですな。」

「民も良い顔をしています。」

「やはり、董卓さんが善政を敷いているというのは本当みたいです

ねー。」

長安に着くと早速聞き込み、どうやらこの外史の董卓は暴君どころか聖人君子のような存在のようだ。

となると、反董卓連合は起きないのか？
とりあえず、本人に会ってみるべきか。

「稟、風。早速董卓達に会ってみたいんだがどうすべきだと思う？」

「そうですねー、お兄さんと言えば直接会ってくれそうな気がしますけど仕官したいという話もするなら武官採用の試験があるみたいなのでそちらに行ってみてはー？」

「私も風に同意です。そちらで試験管の目に着いて客将になればおそらく董卓殿に会えるかと。もし、無理だった場合でも軍の中枢の人物には間違いなく会えるはずですよ。」

うん、流石だ。俺の仕官という話も考慮してるし、董卓『達』という言葉から俺が董卓自身に用があるだけでなく董卓の周りが気になってるのを分かっているのだろう。やはり、正史と違い女であっても変わらない特筆すべき智謀である。

「ふむ、では私も受けてみるか。」

「そうですか、なら私達は旅を続けるにあたって必要なものを揃えてきますので。」

「お金は俺はあんまり使わないから渡しておくよ。」

華琳からもらった袋からある程度のお金を手に取り、後は全て稟に手渡す。

「京理殿、さすがにこれほどの大金頂くというわけにもいかないのですが。」

「いつか借りは返してくれればいいさ。」

「そうですか、ではとりあえずまた後でその話は致しましょう。試験の時間は少し過ぎています。急いでください。」

そう言って、稟が急かす。

「ああ、じゃあ行くか。」

「御意。」

「頑張ってくださいねー。」

風の妙に気の抜けるような応援を背に受けながら試験会場へと走って行った。

しかし星、段々俺の配下みたいな振る舞いをするようになってきているのは何故ですか…？

???

side

あー、やっぱり黄巾党もいよいよ動きが活発になってきとるし、もう優秀なやつは大抵他所に仕官しとるんちゃうか？今回600人ほどが試験を受けに来ているがどれもダメやし。恋にも来てもらっとる

けどもう寝とる…。

ピクッ!?

急に恋の触角のような毛が動くと、

「・・・来る。」

それだけ言って側に置いてあった方天画戟を手取る。

「何が来るん？」

「・・・。」

何も言わんし。

タッタッタッタッタ

「すみません、まだ試験間に合いますか？」

遅れてきたのか、線の細い二人が入ってきた。

恋の顔を見ると先程以上に真剣な顔をしている。

「ああ、ええで。うちが直々にやったるわ。」

「ふう、間に合ったみたいだな。」

「主が稟と長話しているからこんなにギリギリに。」

水色の髪をした綺麗な女が若干不機嫌な顔をしながら男に言ってい

る。

「でも、試験管直々に戦ってくれるみたいだから目的の事考えたら得だろ。」

「理由が後付け過ぎますぞ。」

「じゃあまあ、いっちょやるかな。」

「もう、ええか？」

この男、

「ああ、すまない。始めよう。」

あの恋とうちの殺気をまともに受けても何も感じ取らんのか？

ただのアホか、それともうちや恋が相手にならない程の：

見る限りじゃ前者やろうけどそれでもうちは実際に自分で確かめんとあかん性格や！恋の様子も気になるしな。

道草は食うもの（後書き）

京理の部下になる気満々になってしまった星と風。どうしてくれようか…。

神速は真速を知る（前書き）

お気に入り100件記念という事で

神速は真速を知る

京理 side

「じゃあ、早速始めよか。恋、審判頼むで。」

「…待つて。」

先程から殺気を撒き散らしてる寡黙な女の子が胸にさらしを巻いて、袴を着た女の子を制止する。

「ん？恋やりたいんか？」

肯定という意味なのかコクコクしている。・・・ものすごく可愛い。違う！あ、いや違うないけど違う。

「しゃーない、あの恋がまさか自分からやりたい言うなんてな。変わったるわ。」

「…ありがとう、霞。」

この子の真名なのだろうか。名前を聞いてなかったな。

「失礼、お名前を聞かせてもらいたいんだけど。」

「ん？うちは張遼や。」

「恋は呂布。」

・・・まさか試験官に張遼と呂布を使うって、どんだけ人材不足なんだここは？しかし、やはり女か。只者では無いと思っていたが武に関しては、トップクラスの中でも上位に位置する二人だったとはな。

「俺は宮 京理だ、よろしく。」

しかし、ここで天下無双と言われる呂布と戦える事になるとはな・
・多少予想していた事だが、楽しみでしようがない。

張遼 side

まさか、こいつがああ宮 京理なんか？半国の器と言われその者を手に入れるのは漢の国半分を手に入れるのと同等の価値があると言われるほどの武と知、そして心を持つといわれている男。ただ、今までの功績の中に目立った物はあまり無い。

まあ、半国の器が本当にいるとしてこいつが本物かどうかは恋との戦いを見れば分かるか。

「じゃあ、始めるで。…始め！」

ガキィ！！！！

言うと同時に恋が宮に斬りかかっていた。おそろく全力で行ったのだろう、ほとんど見えなかった。

「ん、やっぱりなかなか早いな。」

そう言いながら、その恋の一撃を、片手で持った剣で受けながら左

手で恋の方天画戟の横っ面に掌打をする。

「くっ！」

武器を飛ばされたものの、何とか手放さずにいた恋だったが再度攻撃せずに宮と間をあける。

態勢を立て直し宮の元いた位置を見るとそこには奴の姿は無かった。

「な！？」

と、急に恋が振り向きざまに遠心力を利用した回転切りを放った。

ギイン！！

「参ったな…これ止められちゃうか。」

消えたとみられたその人物はいつの間にか恋の真後ろに移動していたのだ。

「お前、やっぱり恋より強い。…本気で来て。」

宮に対して本気でやれと促している。

「あれでも手を抜いてるんか…？」

「当たり前だ。呂布はどう考えても勝てないぞ。」

「！？」

趙雲、この女も常山の昇り竜としてかなり有名だ。そんな奴がここ

まで言うのだ。

「張遼。お前も私も武器が槍で分かりづらいかも知れんが、立ち会いの最中に相手の剣を剣で切り落とす事は可能か？少し態勢を崩されたくらいの際に相手の槍がめり込むほどの踵落としをすることは可能か？」

ほぼ諭すような言い方で質問してくる。

「嘘やろ…？あはは、そりゃ化け物やな。」

前者の方はともかく、槍が剣より有利なのは疑いようもない事実、踵落としの話はおそらく趙雲自身の経験なんだろう。しかも、それを為したのが男と言うのだから有名になるのは当然なのかもしれない。現に、恋に本気で、と言われて今まさに本気で戦っている『あれ』はさながら鬼神のようであった。

「ちなみに、剣の相手と言うのはあの夏侯惇だ。」

「嘘やろ…。」

京理 side

あつちで二人は話しているようだが良く聞こえない。正直、一瞬でも気を緩めれば首が飛ぶ。最初も本気で無かったとはいえ気を抜いているわけでは無かった。

しかし、呂布がここまで守りに長けているとは思わなかった。こちらが圧倒しているのだがチェックメイトまでいけない。戦等であればあれば周りの環境もありフェイクやフェイントがかなり有効に働くため簡単なのだが立ち会いとそうもいかない。だが、

「粘るね、でもそろそろ終わりだ。」

しょうがないから手っ取り早く終わらせよう。

張遼 side

「今度は何をする気やねん…」

戦いを見ていると、宮が急に剣を納刀した。

何しとるんやあのアホは？勝敗は審判であるうちが決める、そのうちがまだ何もいとらんのやから立ち会いはまだ継ぞ…ん？あの顔…かっこいい、違う！あの顔、なんや笑っとる。

「なあ、趙雲。」

「なんだ？」

「あいつ、何するつもりなん？」

「知らん。京理様の事だ、凄い事するのは間違い無いだろう。これしか言えん。」

二人に目を戻すと、恋も危険を察知したのかかなり距離をとっている。

すると宮が、

「いざ、参る。」

そう言った一瞬後には方天画戟を真つ二つにされた恋と首に剣を突き付けている宮の姿があった。

恋ですら齒が立たんなんて…。じゃあうちがやったら、等と考えていると

ぐきゅるゝ

「「「・・・。」」」

ぐきゅるゝ

「「「・・・。」」」

ぐky「分かった!分かったから。じゃあ、丁度お昼だし4人で行きましょうか。」

「せやな、こっちは聞きたいこといっぱいあんな。」

宮京理、これから面白くなりそうやな。

神速は真速を知る（後書き）

嘘やろの連発、強調の為に使ってみたんですが分かりづらいですね。自分が思ってる事を読み手にも思わせるほどの文才をいつか身につけたいです。

董卓、賈詡時々京理（前書き）

本日分です。週間アクセス増えてたー。やた！

董卓、賈詡時々京理

京理 side

昼を街のお店で済まし、採用の話でどうやら董卓に会えるようだ。一応、筋書き通りだな。

玉座の間ではなく、少し狭めの部屋に案内されたのが少々気になるけど。

「で、最後あの時何したん？あれなんて技なんや？それも理心流ってやつなんか？」

張遼がしつこく、そして事細かにさっきの戦いについて、素性、色々聞いてくる。

しかし、こいつが後に遼来々と言われ後に恐れられるあの張遼なんだよな。

もきゅもきゅ

…とりあえず、俺の膝の上に乗っているこれを何とかしてほしい。可愛い過ぎてどこかにどかせない。

てか、隣の席空いてるのに何故部屋着いた途端一目散に俺の膝の上に乗るという行動に出たのは何故なんだろう。というか、まだ食うのか…。

「恋、出来れば膝の上から降り…ないでください。」

途中まで言った途端目をうるうるさせてきた。だからそれはずるいって…。ちなみに勝負の後、負けたからということで真名を受け取

った。

しかし、こっちを見ている星の視線が痛い。超不機嫌な顔をしながら私の特等席だか何だかブツブツ言っている。

「あの・・・」

まあ、恋のもきゅもきゅを見て言うに言えない状況。傍から見たら・・・はい、いつも通りカオスでした。

「あの、すみません」

そういえば稟達とどこで合流するか決めて無かったな。

「星、稟達とどこで待ち合わせるか言っていなかったよな。」

「ええ、そうでしたな。何ならこのまま一夜を過ごしても私は構いませんが?」

ニヤリと笑いながら笑えない事を言ってくる。

「詠ちゃん。」

「ちょっと、月の話を無視するなんていい度胸してるじゃない!」

「へ?」

いつの間にいたんだ、この子たち?

「あの、君達誰かな?」

「私は董卓と申します。」

「僕は賈馱よ。」

・・・ふう、これはもう一致してるのが名前だけというレベルだな。って、冷静に考えている場合じゃなかった。

「失礼しました、私は宮京理と申します。お会いできて光栄です、董卓様。」

星と張遼はこの言葉遣いに少なからず驚いていた。

まあ、俺がこういう言葉を選ぶのはこっちでは初めてだからな。

「宮さん、月で良いですよ。」

「月！？こんな奴に真名を預けちゃだめよ！ううん、そもそも近づくのも危ないわよ！」

賈馱、酷い言い様だな。最初に会った時の桂花みたいだ。

「まだ会ったばかり…ですが？」

「恋さんから真名を受け取ってるみたいですし、それに悪い人には見えませんから。」

「そうですか。では、こちらの事も京理とお呼びください。」

なるほど、これなら反董卓連合は起こらないな。ということは、群雄割拠の時代は来ないという事か？

「うゝ、月が預けるなら私も預けるわ。私は詠よ、でもだからと言って信用したわけじゃないんだからね!」

「もう、詠ちゃんったら。」

だが、起きるとしたら・・・。何進、十常侍、袁紹、洛陽、長安・・ダメだ、まだ情報が足りない。この董卓軍が黄巾の乱においてどういう活躍をするかにもよってくる。ただ、会ったばかりだが分かる。この子は絶対に死なせてはいけない。たとえば董卓連合が起ころうとも。

詠 side

これが半国の器。何かを考えているようだが意識せずともなのか覇気のようなものがひしひしと感じる。

だが、同時に優しい温もりのようなものも感じる。不思議な男だ。武においては噂以上のものだった。あの恋と戦い、勝ってしまうのだから。

黄巾党の動きが活発になっている今、これだけの将がうちに入る事はありがたい。

「で、採用の話なんだけどいいかしら?」

「ん? ああ」

「貴方には、兵5000を預けるわ。黄巾党7000が暴れているみたいだから行ってもらえる?」

「断る。」

「・・・へ？」

な、なんで…

「俺は5000なんて大軍指揮した事が無い、それになんて5000なんだろうね？そして、先程俺の事を信用していないと言っておきながらなんだがその意図は？まあ、大方分かってはいるんだが。」

暗に本当の事を言えと言っている。なんて男だ。試したというわけではないが、予想以上の人物。

「…一つ聞いわ？あなたは月にとってずっと味方でいると約束できる？」

出会ったばかりのはずのこの男を、信じてみよう、そう思った自分がある事に戸惑いながらも話していく。

董卓、賈詡時々京理（後書き）

さて、後少しで黄巾党の乱も始まり面白くなっていくはずですのでこれからも見ていただけると幸いです。

現状と君子將軍（前書き）

本日分ー。急にサブタイが手抜きに…

現状と君子將軍

京理 side

今俺は詠と二人で個室にいる。

予想は大方当たっていた。詠から話を聞くと、

靈帝が崩御しその頃から権勢を振るっていた宦官集団十常侍と何皇后の異母兄、何進が、劉弁と劉協の二人をそれぞれ擁立し、争っていた。首都である洛陽は暗殺などが日常茶飯事のように行われているようだ。

この話自体には歴史的には何ら問題は無い。

だが、

予想していたとはいえ起きた時期が早すぎる。これでは黄巾の乱から反董卓連合結成という流れが無くなる。

タイミングから考えると黄巾の乱と反董卓連合結成は同時期になるという事か？

俺は詠がこれからそうなることを予見しているかと思っていた。違うのなら、これはどういうことだ？

：ダメだ、無理に三国志の知識を無理に当てはめるべきではないな。固定観念に囚われてそれが身を滅ぼすことになるかもしれない。

俺の様子がよほどおかしかったのか、心配した顔でこちらを見ている。

「詠、靈帝は天寿を全うされたのか？」

「え？いいえ、殺されたわ。」

「ころ、された？」

「誰かは分かって無い、暗殺よ。」

正史では靈帝は天寿を全うし、その後何進が対立していた十常侍を殺すために袁紹らと画策、だが逆に何進は殺され激怒した袁紹は洛陽内にいる宦官らを悉く殺した。

これを予測し二人の皇子と共に逃げ出していた十常侍筆頭の張讓らも結局は自殺している。

この外史では、その後二人の皇子は洛陽に呼ばれていた董卓、月にすぐに発見され保護。今もここ、長安に匿っているらしい。

どうやら二人とは以前からも面識があり、この外史での人の良さもあつてかなり懷かれているようだ。

保護については詠も後顧の憂いが出来ると月に言ったが、荒れに荒れた洛陽にこんな幼子を戻す等出来ないとこれを月は却下。

だが、こういう経緯なのは分からないがそれを袁紹が知り、既に動き始めているとのことだった。

だから、それを考え詠はあえて5000で7000の兵を賤討伐を俺に命令し、俺の半国の器としての名声と力を利用しようとした。諸侯の目を月ではなく俺に向けさせようとしたのだ。

諸侯の目が俺に向いたらすぐに難癖を付け、俺を捨てる算段だったらしい、仮に負けたとしても変わらず俺を捨てる、そうするとやはり仕官先の無くなった俺を目当てに諸侯たちは皆挙って月ではなく俺に目を向ける。

董卓を攻めるべきと考える勘の良い人物でも半国の器と月とを天秤に量るとしたら俺の方が、ということらしい。分かっているも今は月に手を出せなくなる。もちろんこれは詠だけの考えである。

「しかし、俺と会うまでの短期間によく考えたな。さすがだ。」

気を取り直して正史と変わらず稀有な頭脳を持っていた事を素直に褒めると、詠はバツの悪そうな顔をして

「でも、あんたを騙したのよ？ だけど、まさかそのほとんどを看破するなんて思わなかったけど。それに恋にも勝ってしまうしあなた、本当に何者？」

「仕官先を求めるただの旅人だよ。」

詠はふう、と一息つく

「僕がこんな事言える義理じゃないけど、月の為に力を貸して欲しい。」

その眼に嘘は無い。ああ、心底月を大事にしてるんだな。

「ああ、分かった。これからよろしくな、詠。」

手を差し出された詠の顔は真っ赤になっていた。

と、その時バンッ！という音と同時に銀髪の女と、その後ろからゆっくりと、少し目つきが鋭い薄紫の髪色をしている女が入ってきた。

「貴様が宮京理か！ 私と勝負しろ！」

銀髪の女が言ってきた。正直、私は猪ですと自己紹介の副音声聞こえるレベル。

「ごめん、詠。何度も止めたんですけどね…。」

「華雄に、莉羅^{りら}。はあ、やっぱり霞の方が華雄の抑え役にはよさそうね。」

誰だ？名前から察するに華雄は江東の虎、孫堅にやられる奴だったな。莉羅ってやつは一体…

「そちらの方達は？」

「ああ、そういえば来たばかりの京理は初めてだったわね。」

「私は華雄だ。さあ、とっと勝負するぞ！呂布に勝った貴様を倒せば私は最強になれるのだ！」

「私は羊コ、字を叔子。以後お見知りおきを。」

な…なんだと？

現状と君子將軍（後書き）

オリキャラはまさかの羊コさんでしたー。トウ艾を出そうとしたら某大人気SSにて艾という名前で出るので君子將軍が代わりに出陣しました。まあ、どっちも同じ位好きです。羊コがいるという事は、もしかしたら呉のあの方とか破竹の方とかも出すかも？

莉羅の思惑（前書き）

お気に入り150突破しました。ありがとうございます。

莉羅の思惑

京理 side

羊コ、曹操死後に活躍する徳高き将。例を挙げると正直キリがない。敵に塩を送るような行為、ただの兵士一人一人に対する労い等を常日頃から行うような人物。

一言で表すなら聖人君子。事、徳に関しては俺は劉備をすら上回ると考えている。

方向性が違うかもしれないが、民を考えるとという事に関しては同じだ。

そんな人物が何故今ここに既に生を授かっているんだ？

やはりここが外史の世界という事に関係してるんだろうか。

「俺は宮 京理。華雄殿、勝負は構わないが少しお待ちいただきましたい。」

「臆したか！」

「いえいえ、ちょっとそちらの方に聞きたい事があってね。」

と言って、羊コの方を向く。

「京理、あんた莉羅の事知ってるの？」

「いや、ちょっとね。それでいきなりだけど少し良いかな？」

「どうぞ。」

「じゃあ、一つ。君はどういった経緯でここへ？生まれはここじゃないでしょう？」

「あなたと同じ、ですよ。」

「同じ…ね。」

こちらを試している。この言葉を深く読み取るべきか、素直に仕官先を探しに来ていてここにいると考えて良いべきか。いや、これは・・・。

「羊コ殿は俺の事を知ってるのかな？」

「羊コで良いですよ。質問の答えは『はい』ですね。」

「というと？」

「この国で半国の器、宮 京理を知らない者はいませんよ。異民族の者ですら支持しようとしてるのですから。」

知らなかった。俺の知らないところでそんなに有名になってたのか？そこまでの大事をやっていないような気もするが。

俺の行動が異民族に支持された・・・か。

「そして、私がここに来ているのは月様に仕える為ではない。」

「・・・。」

「へ！？」

「なっ!？」

華雄と詠はかなり驚いている。

「私がここに來た理由、貴方はもう分かっているのでしょうか？」

「俺・・・だろう？」

随分と持ち上げるし視線はずっと俺を捉えていた。

「はい、私は貴方様を見極め、仕えるに足る人物であればそうなる
うと半国の器の噂を聞いてからずっと思っていました。

そして、先程の恋を圧倒していた武、詠殿を看破した智謀を見せられ、仕えたいと思っていた人物が噂以上であったのに誰が仕えぬでしょうか？」

ようするに

「俺がここに向かってしていると聞いて、ただここにも顔が分からないから会えるとも限らない。

だから、董卓軍に将として入るのが自分にそれだけの力があるという事を俺に見せつけて尚且つ会える方法だったってわけか。

さっきのあなたと同じ、という返事も俺が月に仕えること自体が目的ではないと分かっていたんだろう？」

「流石は京理様、そのとおりでございます。」

「...何か話の流れが良く分からないけど、あんた達似てるわね。」

詠がそう言う

「え、そんなお似合いの夫婦だなんて。分かってますよ／＼」

超ニヤケ面で言っている。とりあえず、そんな事一言も言っていない。すぐに真剣な顔に戻ると

「改めて、私は羊コ、字を叔子、真名を莉羅と言います。京理様、嫌と言おうがどこまでも付いていきます。そして、京理様に近寄るごみクス野郎共は我が武、智を以って滅して見せます。」

「!? お、おい？」

「というわけで、これからよろしくお願いしますね。」

満面の笑み。黒いけどかわい・・・だから、違う！

「・・・・。」

何も言えないでいる二人。

とりあえず、この外史の羊コは聖人君子であるが、俺に関係してくる事象は人が変わり狂信の域に達する事が分かった。

「と、とりあえず華雄。勝負するか？」

空気を変えようと話しかけると

「あ、いや。うん、今回はやめておこう。」

ハハッと少し引き気味に笑いながら部屋を出ていき、詠もこれに続いた。

ようするに、残るのは

「京理様、お慕いしております。」

頬を染めながらいきなりカミングアウト。

・・・勘弁してくれ。星達になんて言われるか。

「主？これはどういう事ですか？」

青筋が出ちゃってる星がものすごい笑みを見せながら真後ろの扉に立っていた。

終わった・・・

莉羅の思惑（後書き）

今回は今までで1番やらかした感MAXでした。

月の決意と（前書き）

初感想に有頂天になりこんな時間に投稿。
かなり人を選びそうな小説になり始めていますがよろしく願います。

月の決意と

京理 side

「朝か。」

昨晚は地獄だった。女とはこうも恐ろしいものなのか。
とりあえず起き、れない？

はい、もうどうせ星と莉羅だろ？と下を向くと

「なんでこうなってる？」

星と莉羅はもちろんいたのだが、風と稟と月が、俺が与えられたこの8畳程の広さの部屋にいた。

「狭いって……。」

風と稟はいつの間に？てか月よ、主だろ。ここにいていいのか？
と、思ったと同時にバンツとドアが開くと

「月、大丈夫！あんた月に何したのよ！」

「ふう、何もしてないよ。」

半ば呆れ顔で答えるとそんなことを聞きもせず一目散に月の元へ

「あ、詠ちゃん。おはよう。」

「おはよう、って違うわよ！なんで月がここにいるのよ！」

「へう／＼／」

可愛い、可愛すぎる。だが今そんな反応されると

「やっぱり月に何かしたんでしょ!？」

激昂する詠、そして皆起きる図式。

「折角の主との淡い一時を邪魔するとは。」

「闇に葬りますよ?」

「お兄さん、大胆ですね。」

「は、はれ? 確か風を止めようとしたはずが・・・?」

どれがどの発言かは言わずもがな。

「んで? 何で俺の部屋に集合してるの?」

みんなで朝食を食べ、一息ついたところで切り出す。

「伴侶が寝食を共にするのは当然かと。」

マジ顔で言ってくるこいつを誰か黙らせてください。

「私は主の護衛です?」

疑問形、なんとなく分かってはいたけどね。

風と稟は昨晚星と合流した後、月に部屋をあてがってもらったらしいのだが部屋を『たまたま』間違えてしまったらしい。

：絶対嘘だろ、風が行くのを止める稟の構図がすぐに浮かぶ。

「忘れてた！みんなちょっと急いで来て頂戴！」

詠が思い出したかのように言い出す。

「で、何があったんだ？」

玉座の間に移動した後、霞や恋達も集めた後真剣な顔の詠に聞くと

「黄巾党の本隊らしき集団が見つかったのよ。」

「討伐は行うのか？」

正史では、董卓は黄巾党討伐を失敗して、免職となる。だが霊帝が死に新たな皇帝もない今、これから何が起きるか分からない。

であれば先に反董卓連合の対策をすべきだ。だが今、月に言ってもシヨックを受けるだけだ、言うのは早い方がいいかもしれないが時期でない。

「それはこれからの事を考えると僕の意見だけじゃ決められない。」

そう言いながら、月に視線を向ける。

「・・・皆さん、私にはありません。自分の手で民を守る事が

出来ない、それがどれだけでもどかしいと感じたか。

ですが民が苦しんでいる、この事実を知っていて見過ごす事等私にはできそうにありません。皆さんの力を貸してください。」

天に、憂うような視線を向け一息ついた後こちらに視線を戻し

「黄巾党討伐の遠征を、行います。」

決意の目を向け皆に言った。

この時、俺はまだ反董卓連合の事について考えていた。

月の事だ、自分がどうなろうと民を優先するに決まっている。絶対に殺させない、義はこちらにある。敵に誰がいようと月を守る。誰がいようと・・・。

月の決意と（後書き）

京理 sideが多い事に今気づいた！

遠征の先（前書き）

少し遅れましたが投稿です

遠征の先

莉羅 side

今、私達は黄巾党本隊がいるという場所へ向かっています。

来ている者は私、華雄、京理様、それに京理様の直接の配下という形で星、風、稟。

彼女らとは出来前に真名を交換しました。

「京理様、霞や恋も行きたがっていましたがよろしかったのですか？」

そう、戦闘力の高さでは董卓軍のトップである二人を月の護衛という事で置いてきているのだ。

「ああ、良いんだよ。月は民を苦しめている賊を討伐する事を望んでいるだけで、黄巾党討伐を足台にして天下を望んでいるわけじゃない。だろう？」

「ふむ、甘いとも考えられますがそこが月様の良い所でしょう。」

月様は底抜けの優しさがある。乱世に移り変わろうとしている今の世では大事な、想いを持っている方。

京理様に会う事がなかったらもしやすると・・・いや、考えるのはやめときましょう。

「おそらく馬鹿な諸侯はこちらに来ていないはずだからな。」

「国を脅かす黄巾党の討伐、これと天秤に掛け得るものが何か御有

りなのでしょうか？」

それ以降は何を聞いても適当にはぐらかされる。京理様の内に何か考えがあるのでしようか。

「お、見えてきたよ。もう諸侯は集まっているようだね。さて、誰がいるのかねえ。」

笑っている。最初に会った時、内容までは聞けなかったが詠との密談もあり、少々疑問が感じるところではあります。が、私は京理様一の家臣（自称）、京理様の命令に従うのみです。

京理 side

「見えるのは華琳、馬騰、孫策、公孫サン、にくつついてるのは劉備か。」

英傑揃いだな。ここに来る事が出来た諸侯を見極める、それが反董卓連合の対策において最も重要な事だ。

ここに来る事が出来なかった諸侯は頭が回らないか情報不足、もしくはこれを好機と見れていない程度の器しかない者。その程度が来ても問題は無い。

「1番の問題は、やはり華琳か。」

「問題とは？それにその名前真名…ですよね？どなたでしょうか？」
呟いてしまったのが聞こえていたのか稟が聞いてくる。

「ああ、曹操だよ。」

「「!?!」」

「あれ?言ってなかったっけ?俺は星達と会う前は華琳、曹操の所にいたんだよ。」

「聞いておりませぬぞ、主?」

笑顔が怖いです、はい。

「お兄さん、風達に手を出す前からそんな大物にも手を出していませんねー。」

「出してないし、風達にも手を出してないだろう・・・。」

「おうおう兄さん。手が早いねえ、そっちで天下統一するつもりか?」

「黙れ宝?!」

あくまで風の頭の上の太陽の塔みたいな人形に対して言った。

「それよりもこれからどうすべきかを考えましょう。」

莉羅が気を利かせてくれたようで助かった。

「そうだな、とりあえず華琳の元へ行って来るか。」

「お一人で行くわけにはいかないでしょう？ 誰か護衛をお付けください。」

「そうだな。華雄と風、お願いできるかな？」

「私か!？」

風を除く者が皆驚いている。正直この選択は決まっていたも同然。いざという時に臨機応変に対応できる知と武を持ち合わせる莉羅と星は軍に置き、黄巾党を遠くに見て興奮状態の華雄を押さえつけさせるのは簡単ではないから護衛も兼ねて俺が連れていく事に。

稟と風で迷ったが、今回は諸侯を見極める事に重点を置いている。正史において軍略では比肩する人物などほとんど存在しないとされていた郭嘉だが、人物を見る力は程立の方があるように思っていた。外史の郭嘉と程立も同じ、とは言えないが柔軟な発想においては風の方が上だろう。

これ話をすると、華雄はともかく皆納得した。

「じゃあ、行くか。」

「くそ！月様の命でなければ・・・。」

「華雄、後で一勝負してあげるから我慢してくれ。」

「お兄さん。」

「ん？何？」

「どうやら諸侯達は一つの天幕に集まっているようです。皆、周り

を出し抜き風評を得ようとしているみたいですねー。」

やはり風で正解だった。結託して集まっているように見えるがその実、周りから情報を得て周りを出し抜きこうとしていると考えてよさそうだ。

後の英傑と会えると思うと嬉しさと期待で震えが止まらない。楽しみだ。

華琳 side

袁術の客将、孫策にその軍師周瑜。涼州の馬騰、馬超。公孫サン。客将として参加している劉備、その将である関羽、張飛、軍師諸葛亮、ホウ統そして私が知る二人目の天の御使い、北郷一刀。

やはりここに来ている諸侯、その部下達は皆我が覇道の邪魔に成り得る。

ふふ、だが必ずここにいる者たちも正々堂々と打ち倒し天下を統一して見せる！

その時、

「軍議中失礼いたします。董卓軍の代表がいらしているのですが・・。」

「通しなさい。」

そこには、

「皆さま、今日はいい天気ですね。それで、腹の探り合いの成果は出ましたか？」

私の覇道に最も必要な存在がいた。

遠征の先（後書き）

次の話はまだ全然考えていないという・・・。

天の御使い（前書き）

投稿しても小説が上がらなかったのはなぜなんだろうか

天の御使い

京理 side

軽い挑発を試みたが、どんな反応を示すやら。

華琳と桂花、春蘭がこちらを見ている。そして怒っている。だが俺が何がしたいのかはともかく見届けるつもりなんだろう、1度目戦を合わせて黒い笑みを浮かべるとそれ以降は何の反応も示さない。

「なんですって？」

ピンク色の髪に小麦色の体をした女性が殺気を撒き散らしながら聞いてくる。

いくら期待していた反応とはいえ少しくらい抑えて欲しい、軍議にならなくなるぞ…。

「君は？」

「孫策よ。それで？さっきの発言は何かしら？」

「どうやったら1番乗り出来るか、大将の御印を上げられるか、そんな事ばかり考えているから進まない、って言ったんだよ。」

「誰がそんなこと！」

「じゃあ、何を考えている？」

「何って、これはたかが賊退治。いかに兵の犠牲を少なくして戦果を上げるか、でしょ？」

「そのたかが賊退治にかなり長い事軍議の時間を費やしているようだが？それにいかに『自分の』兵の犠牲を、の間違いだろう？」

さて、入りはこんなものでいいだろうか。

「一体お兄さんは何を考えているんですか？」

風があくまで気の抜けた声でぼそぼそと聞いてくる。

「ふふ、ここにいる奴らを見極めたいだけだよ。」

ここにいる者たちが正史同様、英雄に値する存在かどうかをね。

孫策 side

こいつ！！！！

「待て！奴は半国の器として民、異民族からも支持される程の人間。そんな奴を殺せば我々の悲願である呉の再興は果たせなくなるぞ！」

頭に血が上り我を忘れかけて剣を抜きかけていた所を親友で私の軍師でもある周瑜、冥琳に止められる。

・・・怒りで忘れていたが奴は『半国の器』。

噂では曹操の横にいる猛将夏侯惇をいとも簡単に倒し、智謀も最たるものあり、徳もあるという破格の人物。だが、所詮は噂か。話した限りでは人の揚げ足取りのような事しか言わない。

「風評、ね。いくら呉の再興のためとはいえあれだけ言われて黙っていないといけないなんて癪ね。」

あいつは何かを持っている。私の勘が言っている。

それが正しいかどうか、見てあげようじゃない。

「ま、いいわ。軍議は進まないのも困るしね。で？宮はこれからどうすべきだと？」

「つと、その前にこっちは自己紹介したんだし皆さんのお名前を聞かせてもらっても？」

京理 side

孫策のあの威圧感。志半ば二十歳で消えるには惜しい命だ。

「あたしは馬騰、董卓ちゃんとは古い付き合いでもあるんだ。よろしく頼むよ。」

これが馬騰、正史とは違ってあまり背は大きくないな。だが、先の孫策以上に威圧感を感じる。

「あたしは公孫サンだ、よろしくな。」

白馬義従の……。確か正史か演義か忘れたけど劉備の学友だったっけか？

「あの、私は劉備です。よろしくね。」

・・・これが劉備か、人の良さそうな顔をしている。ああ、だから公孫サンの所で客将しているのか。だが、それよりも気になるのは

「私は劉備様一の配下、関羽だ。」

「諸葛亮でしゅ！」

「ホ、ホウ統でしゅ！」

色々と突っ込みたいが、あえてはぶ・・・かない！

関羽、女だから美髯公じゃなくて美髪公って事でいいのか？ そうなんだな？

諸葛亮、三顧の礼はまだだろう・・・。諸葛亮もそうだが、会ってみたかったホウ統もなぜこんな幼女なの？ しかも嚙んだよ、この子たち。

「俺は北郷 一刀、一応周りからは天の御使いって言われててこの子達のご主人様ってことになってる。よろしくな！」

！？ こっちへ来て初めて会った主要な男が天の御使い、か。女尊男卑にも程があるだろうが。

って、違う違う。俺以外に天の御使いね、劉備の元にいるという事は・・・

「京理、久しぶりね。まさか董卓軍の将として会うとは思ってなかったけど？」

考えを張り巡らそうと思っていた時に声を掛けられそちらに顔を向

けると華琳がやっぱり怒っていた。桂花も怒っていた。春蘭も怒っていた。

・・・なんで？

天の御使い（後書き）

言い忘れていましたが携帯で見やすいように改行してるのでPCじゃ見にくいかもしれませんがあしからず。携帯でも見にくい可能性があります。

京理の器、桃香の決断（前書き）

ども、らんちゅです。

なかなか戦闘シーンに進まない……。でも今後の話的には重要なのでご勘弁を。

京理の器、桃香の決断

京理 side

華琳のブラックスマイルを乗り切って再び皆の前に立つ。

「今回相手は黄巾党の賊。賊のほとんどは元は農民で戦は素人。さて関羽、これを効率良く無力化させるには何をすればいい？」

自分に聞かれると思ってなかったのだろうか、少しびっくりしている。

「より兵を集めるとか、火計等だろうか？」

「はい、不正解。」

「なに!？」

「第一に、兵はもうこちらの方が少ないってことは分かっている。もし、とかそういう類の話は駄目。」

第二、火計は相手の糧食等も焼いてしまう可能性がある。

風評を得たいならその糧食を民に配るという選択肢があるからな。他に、あまり被害を出すことなく鎮圧出来る方法があるんだが？」

殺すのではなく、生かすやり方をすればより高い風評を得られる。

「張三姉妹の御印、ですね。」

諸葛亮孔明が口を開く。

「そう、ただに必要なのはそいつらのじゃない。」

「へ？」

「そもそも、奴らは宗教集団のようなもの。張三姉妹を狂信している。

大将を殺した事はそのまま奴らの暴走につながる可能性がある。俺が欲しいのは前線を指揮してる者の首だけでいい。

指揮する者がいなければ後は烏合の衆だ、数を頼りにするような集団には負けないだろう？

よって大将張三姉妹は必ず生け捕りにする。そして、まず何が目的なのかを聞かなきゃいけない。これには少々隠密にな。

それによって事後処理が変わる。

ああ、もちろん指揮する者を殺した後は攻め方は各々で構わない。」

実は、黄色い布を付けて内部に入り、張三姉妹を捕えて黄巾党を解散すれば解放してやると言ってるやり方も考えたが張三姉妹の顔が分からないし3人を連れて脱出するのも難しいからやめた。

何にせよ、今回は張三姉妹が重要。

「とりあえず諸葛亮、思っても無い事を言うもんじゃない。早期鎮圧を目指してるんだろ？俺を見極める時間をもっと別の事に活用するんだな。」

ずっとこちらから視線を逸らさない奴らよりは全然ましだけどね。一挙手一投足にまで神経を尖らせている。

「!？」

驚いてしまつてはそれはその事柄に対して肯定しているようなもの。
わざと、ともとれるがそこにメリットは無いだろう。

「で、結局どうするんだ？」

一刀 side

結局、宮 京理いう人物の策が用いられる事となり皆一度自分達の
天幕へ戻った。

一体誰なんだ？ 俺の三国志の知識では聞いたことも無い人物だ。

「はうう・・・。」

後に英雄と呼ばれるであろう人物が集まっている中であれだけ堂々
とした発言が出来て尚且つ、朱里の考えを読むなんて。

「半国の器の名は伊達では無かったという事か。」

愛紗が口にして皆がそう思う。

「あの人ってすごいんだね！客将なのに董卓軍の本隊を率いてるみ
たいだし。それに、かっこいいし。」

そう、男の俺から見ても惚れ惚れするほどかっこいい。俗に言うイ
ケメン。

顔良し、性格良し、それに実力も伴っているとあつては皆がこう思
つてしまうのも仕方ない。

「私、この後あの人に仕えようかと思うんだけど・・・みんなはどう思う？」

「「「「!!!!!!?」」」」

「桃香様？何をおっしゃるのですか！」

愛紗が言う。無理もない、ここにいる誰もが驚いたのだから

「私だってみんなと夢を実現したいよ？けど、あの人ならきつと私以上にたくさんの人を幸せにできる。言葉にしてなくても分かる。それにね、異民族の人達まであの人を支持してるんだよ？」

桃香の話は事実。桃香よりも器が大きいという点に関しても。

現に愛紗に質問した時、兵を『無力化』すると言っていた、極力人を死なせたくないのだろう。

愛紗の返答に彼は若干の怒りを感じていた事からも窺える。最小の犠牲を以って事を終息させようと心がけている。

それに、宮 京理が来る前から軍議は行っていた。客将という立場を考えても徳を第一とする桃香ならばあの時点で言えてなければならぬ。

「私達は桃香様の夢を顕現しようと、桃香様に惹かれて集まったのですよ？それでは私達はどうなるのですか？」

朱里が悲しそうな顔をしている。

「待つて。このままじゃ、話がこじれるだけだよ。桃香、宮 京理に心と知は垣間見ることが出来たけどまだ武は見えてない。もっと見てからでも遅くないだろ？」

「うーん、そうだね。分かった。」

「そうです、桃香様！今すぐ、宮 京理如き叩き伏せて見せます。」

「まっ…」

待って、と言おうとしたときには遅かった。愛紗の姿はもうない。

「私達も向かおう？ご主人様♪」

「ああ、雛里たちも行こうか。」

「は、はい。」

今は曹操陣営にいるという、宮 京理の所へ着くまで10分ほど。着いた時、俺が目にしたのは既に5敗目を喫していた武神と讃えられている女の子、愛紗の姿であった。

京理の器、桃香の決断（後書き）

若干アンチ劉備のはずが、どうしてこうなった・・・。

慢心（前書き）

お気に入り200超え&p.;評価500超え&p.;その他
諸々突破やたー！

慢心

華琳 side

何故だか無性に腹が立つ。その原因はこれ

「なあ、なんで機嫌悪いの？」

くっ、でも困った顔は可愛い！

「あなたは私のものだったはずだけれど？それが何故今董卓軍で将をしてるのかしら？」

「いやー、董卓が予想以上に人の良い子だったんでね。」

「それで食そうと？」

「かなり下品だな華琳……。俺はそもそも女の子に手を出してないから。」

「あら？もう一人の天の御使いは好き放題やってるみたいだけど？」

「マジかよ……。」

「まじ？」

「本気かよって意味。」

「ええ、マジよ。」

京理 side

顔イケメンだったもんなあ。

「少しくらい私達に手を出しても罰はあつ宮 京理ー!」

「へ?」

「華琳今何て言ったんだ?で、関羽殿はどうしましたか?先程の件でしたら謝ります。」

関羽に対してとりあえず、お辞儀。

「何でもないわよ!」

「私と勝負しろ!」

再び激昂する華琳。春蘭並みの猪っぷりを発揮し、意味不明な事を言い出す関羽。

「ほう、貴様もか?」

笑いながらまさかの本家登場。

「あの、よろしければ自分も久しぶりにお会いできたので開いてる時間に御指導いただければと。」

モジモジしながら風もいつの間にか天幕の中に入ってきていた。おいおい、ここ主の天幕じゃなかったのか?

そもそも関羽は陣営ここじゃ無いだろ……。俺と戦うためにおそらく警備を振り切ってここまで来たのだろう。完全にアホだ。いや、アフォだ。

「ふう、いいよ。じゃあ一番最初だったし関羽殿からね。」

「関羽で良い。」

「じゃあ、俺の事も京理で。」

「武器は……。偃月刀ね。お互い真剣で行こうか。」

「む、いいだろう。」

さて、武神と呼ばれるその力見せてもらおうか。

しかし、華琳も良く怒らないよな。見ると、むしろこの状況を楽しんでいるようだった。

華琳、お前やっぱさすがな性格してるな。

関羽 side

お互い真剣で、ということになったが私程度の攻撃なら当たらないということなのだろうか。

どちらにせよ、先の件も相まって余計に腹が立つ。

見た目は私より少し身長が高い、線は若干細め。顔は、とりあえず私が見てきた男の中では群を抜いてかっこいい。申し訳ないですが、

ご主人様よりも・・・。

「始めるぞ、審判は華琳頼む。」

「分かったわ。」

すぐにこちらが構えると、京理はゆっくりとこちらに近づいてきた。

ガッ！！！！

「ぐっ！？」

近づいてきたと思ったらいつの間にか上から振り下ろされていた剣を偃月刀で諸に受け吹っ飛んでしまった。

「人を見た目で判断するな、戦場なら今のでお前は一回は死んでるぞ。」

尻もちを付いた私の目の前に剣先を突き付けながら言うてくる。
なんという速さ、それに女である私を一撃で跪かせるほどの力。
認めたくなかった、自分より強い存在がいるという事を。認めたくなかった、それが男だったという事を。

「ま、まだだ！」

だが、本当に凄い。

「剣の動きだけを見るな、体全体の動きを見て相手の次の動作を予測しろ！」

・・・凄い

「関羽、武器は人を守るためにあるんだ。自分を誇示する道具じゃない。」

凄い！！！完敗だ・・・。

今まで心の片隅では自分は武において負ける事は無いと信じていた。今まではそうであったしこれからもそうであると信じて疑わなかった。

それが今日、この男と出会って戦いそれが慢心であると知った。この男は強い、そして優しい。

こちらの急所は一度も狙って来ていない。一刻前の私なら手加減をされたと怒るところだったが、そう思わないのは私の心の内に何か変化があったということなのだろうか。

「愛紗ちゃん、大丈夫!？」

心配しながら桃香様が駆け寄ってきた。いつの間にか皆の姿があった。

「桃香様、申し訳ありません。負けてしまいました。」

だが、この男と戦えてよかった。自分がまだまだ未熟である事に気づく事が出来たのだから。

「ううん、いいんだよ。愛紗ちゃんが無事だったならそれで。」

「桃香様、宮 京理は真の器を持つ者。半国の器の名に偽り無し。
・・・私はあの人に付いて行きたく思います。」

[illegible]

曹操軍の者たちも桃香様達も皆驚いている。

それはそうだろう、本人である私ですらこんな事を言っている自分に驚いているのだから・・・。

慢心（後書き）

華雄さんが空気？まあ、軍議自体には出て無かったのでしょうがなかったという後付け理由で許してください！

とりあえず、今回のお話は中々な出来でした。ただ、凄い！の所がもすこし上手く書ければよかったなあと後悔。

劉備軍合流（前書き）

本日、この話を8時間かけて作成。

今日は2連投しようと思い、午前中にはこの話出来ていたのですが
いざ投稿しようと思ったらサブタイトル未入力で本文が消えた・・・
しかも2回。

流石にやる気があるー

劉備軍合流

京理 side

風の指導、春蘭との仕合も終えて曹操の陣地を後にした俺達はようやく莉羅達のいる陣地に着いた。

「華雄、すまなかったな。」

「ふん、まあいい。酒の一つでも奢られてやるからな。」

普段お金をあまり使わないし華琳からもらったお金は無くなったが月からお金をもらっていたので多少なら大丈夫だろう。

「ああ、任せとけ。」

「主、それは是非我々も御相伴にあずかりたいのですな。」

声の方に視線を向けると星、莉羅、稟がいた。

星、メンマとお酒をこよなく愛するらしくつまみは基本メンマという。ラーメンに入っている以外食った事無いよ、俺。

「まあ、普段お金を使わないからな。いいよ。ただし、この賊討伐が早めに終わって一息ついたらな。」

「!?!」

まさかOKの返事が来ると思ってなかったのだろうか、ものすごく驚いている。

「主、男に二言は無いですぞ？」

「分かってるよ。」

流石に恋程食うやつはいないだろうしな。恋が食べる量は人外のレベルに余裕で達している。

「で？京理様、これはどういう事でしょうか？」

莉羅が俺の後ろに目を向けながら聞いてくる。

「ああ、今回の作戦で劉備軍がうちに入る事になったから。」

「「「なっ!?!」」」

驚くのも無理は無い。何せその劉備の後ろには1000人以上いてそれがうちに加わるというのだから。

それよりも、

「私達のご主人様になってくd「却下。」」

このやり取りこれで6回目だぞ。勘弁してくれ。

話を聞いてみると、どうやら

器でか！

←

頭イイー！

←
しかもつえー！

←
だから私達の頭になって欲しい！

との事らしい。

天の御使いである北郷一刀がいればおそらくホウ統が死ぬ事は無いだろうが、落鳳坡という地名など絶対に作らせない。

起こるかもしれないという反董卓連合の時、劉備軍がいれば精強な兵がいる董卓軍の唯一の問題点、将と軍師の不足が解消される。

この点『だけ』を考えれば月を絶対に死なせたくない俺は自分の意志とは関係無くこの申し出は受けるべきだ。

だが、劉備達が俺の下に付くという事は俺に天下を見るという事。俺の一番の目的は『華琳の天下の顕現』。劉備が華琳の意見に賛同するはずがないし無理に引きいれた所で正史の徐州での反乱なんて起こったら堪ったものではない。

・・・これを考えると、劉備軍を受け入れる事は出来ない。

「というわけだから、諦めてくれないか？」

流石に他軍なので掻い摘んで、説明した・・・のだが

「うん、大丈夫。きっと何とかなるよ。」

迂闊だった。軍議の時一通り人物は観たつもりだったが俺もまだまだ未熟だったな。これは頭の中で一年中お花畑が咲き乱れているレベルのアフォな子だ。

ちなみに

「どう大丈夫なの？」

と、聞いてみると

「あれだよ、あれ！」

自信満々に『あれ』という2文字で完結させられました。

「はわわ！桃香様のあれというのはですね、実は・・・」

諸葛亮が必死にフォローしようと頑張っているが完全に手遅れ・・・。

というか、関羽とかも騒ぎだしてまたカオスな状況に。

「とりあえずそれは置いて、先にお互い自己紹介しましょうか。これから一緒に戦う事になるわけですから。」

流石莉羅、良いタイミングだ。やっぱり莉羅は安心して任せられる。そういえば俺がご主人様ってやつになった場合、北郷はどうなるんだ？それに公孫サンは・・・さて、考えるのは止めにしようか。

もう自己紹介を終えたのか皆仲良さそうに話している。

だが星、初対面の人間にいきなりメンマを語るんじゃない。

稟、なんで鼻血出してるんだ？今までの流れに妄想するような言葉あった？

・・・とりあえず風、俺は何も言わないからね。

「ああ、忘れてた。この討伐終わった後ホウ統、諸葛亮、北郷の3

人は俺のどこまで来てもらえるかな？」

「はわ？」

「あわ？」

「へ？俺も？」

「ああ、天の御使いってのに興味があつてな。」

これは真実、だが本当の目的はもちろん反董卓連合について。さっきの話では言っていなかったからな。

正直、義に厚い劉備に先に話をした方が楽なのだろうがこの3人に話をしてそこから皆に、という形をとった方が話の時間はかかるかもしれないがわだかまりのようなものは無くなるはずだからな。

とりあえず、はわあわ言っている小動物は何とかならないのだろうか。目の保養も行き過ぎると毒になりそうだ。ただし、中毒だけだね。

劉備軍合流（後書き）

次戦闘シーン！

ほぼ空気だった黄巾の乱も終わりに近づいていますねー

張三姉妹（前書き）

張三姉妹？ごめんなさい、空気です。
まさに外道！

張三姉妹

ホウ統 side

既に討伐軍は作戦開始直前。慌ただしい陣内にいる中で、私は黄巾党の事ではなく京理さんの事を考えていた。

私達3人だけであるという理由が何かあるのだろうか？また、それはその話す内容と関係している？主である劉備を呼ばないわけは？

「うーん、分からないよおー。」

「雛里ちゃん、さっきの京理さんの話の事考えていたの？」

「え？うん。」

すぐ側に朱里ちゃんとご主人様が立っていた。どうやら朱里ちゃん達も同じ事を考えていたようだ。

「朱里、何か分かる？」

「黄巾党の鎮圧が終わった後という事はその事後処理、またはそれによって起こる副産物かもしれない。もしくはもつと先の事を見据えて・・・。一番あり得そうなのは私達を見極める事ですね。」

それは私も考えた。知る限り、全てにおいて卓越した能力を持つあの人のもつとも優れている点、それは人心掌握術。

軍議に後から入ったというにも関わらず、名だたる諸侯を前にしてもあれだけの論を持ち出せるのは本当に凄い。

おそらく入って直後に挑発したのも皆を見極めるためだ。

見極める、即ちその人物をまだ知らないという事。会った事も無い、そんな相手にあの短い時間で一向に話の進まない軍議を終わらせ、隙の無い作戦さえも出す。

極めつけは、話の流れでわざと言った朱里ちゃんの言葉の看破、もはや異常。

あんな重圧の中でも物怖じもせず些細な事にも気づく、これほどの人物が他に存在するのだろうか？

「大丈夫かな？」

ご主人様が不安な声を上げている。

「大丈夫ですよ、それに取って食おうってわけじゃないですし。」

朱里ちゃんもだろう、既に気後れしている。軍師とは言葉を武器にする者。

先程の件で見極めるどころか見極められたという気持ちが強いのだろう。

「ハウ統様、準備が整いました。」

色々と考えていると、兵の一人が報告に来た。

「分かりました。朱里ちゃん、ご主人様、行きましょう。」

京理さんの凄い所をまた一つ見れるかもしれない。

憧れにも近いそんな感情を抱きながら私たちは桃香様達の元へ歩いて行った。

孫策 side

京理が必要としていた隠密として思春と明命を。そして、軍を董卓軍の横に付けることが出来た。

公孫サンの所に劉備がいなかったら董卓軍にくつついていたのには驚いた。

「やっぱり、あの男には何かあるわね。」

「何か、とはなんだ？」

準備を終えたのかすぐ後ろに冥琳が立っていた。

「具体的には分からないけど、あいつは何かがあるわ……。」

思春と明命はおそらくこの大陸でも1、2を争う隠密。京理についての情報も何か得て来てくれるといいけど。

京理 side

さて、ようやく張三姉妹だか三兄弟だかに会える。

「星、関羽、張飛。どうやら俺らが戦う相手は1万ってところだ。中央右翼左翼それぞれ任せろ。本陣は莉羅、風、それに劉備と北郷。稟、諸葛亮、ホウ統は前線の指揮を。俺は今から行くところがある

から全権は莉羅に委ねる。」

「「「「「はっ！って、へ！？」」「」「」」」」

流石に皆驚いている。

莉羅だけが

「御意に。」

ポカンとしている皆を置き去りにして春灯に跨って人を後にする。しかし、五虎将の内の3人が既にここにいるとはな。張飛とはあの後会ったが幼女だった。何故か懷かれ京理お兄ちゃんと呼ばれる事になった。

そういえば、黄忠はともかくまだ馬超に会ってないな。馬騰がいたから来てると思ったんだが。まあ、いずれ会えるか。

各軍から一斉に銅鑼が鳴り、開戦。

「さて行くぞ。甘寧、周泰。」

いつの間にか俺の後ろを走って付いてきている二人の姿。馬に追い付くのだから尋常じゃない足の速さだな。

馬騰と華琳の軍を突っ切って相手が根城にしている古城の真横に付く。ここまで送ってもらおうと春灯には陣へ戻ってもらった。相手が混乱し、討伐軍に目を向けている間に城の真横へ行きそのまま侵入。やはり古城だけあって門はまともでも城壁はもろかったため容易に入れた。

城壁を登り終えたところで見渡すとどうやら討伐軍が圧倒的に押し

ている。指揮する者がやられ奇襲を掛けるだけで混乱する。やはり所詮は賊。

「さて、目的は一つ。おそらく本丸に居るであろう張三姉妹の生け捕りだ。頼むぞ、二人とも。」

「はっ！」

黄巾を身に付け、甘寧としばらく探していると、そこには場違いなアイドルのような恰好をした3人の女の子がいた。見た感じでは少ない護衛だけ付けて逃げ出す算段のようだ。

「あれだろうな（でしょう）。」

俺と甘寧は口を揃える。

「甘寧、周泰作戦変更だ。生け捕りの予定だったが護衛に成り済まして三姉妹と共に脱出するぞ。」

しかし、護衛の話を聞いているとどうやらあの子たちが指示してるというより、支持されているという感じだな。

張三姉妹（後書き）

プロットが完成した！。

そして春灯優秀すぎる・・・

あれ？前回の後書きに今回戦闘シーンって書いたような・・・

黄巾党の最期

???

side

「人和ちゃん、どうすればいいんだろう私達。」

「最初は人が集まってくれて嬉しかったけど周りが勝手に略奪なんかするなんて……。」

何故こんな事になってしまったのか……。私達はただ歌と踊りで大陸一を目指したただけだった。それが今は長姉である張角、天和を頭とした集団『黄巾党』と名付けられ官軍や諸侯に追われている身。

「脱出の準備整ったよ！」

護衛隊の隊長である者が言ってくる。

「ありがとう。」

皆、この子のように純粋な気持ちで見に来てくれるものばかりであったら……。

旅芸人でしか無かった頃、人が少しでも来てくれた時は本当に嬉しかった。客の笑顔を私達が作れるという事も。

周りの者たちがいけなかったのだろうか、それとも私達がどこかで進む道を間違えたのだろうか。
だとすれば、

「太平要術……。」

あのような妖術まがいのような物を取り入れた事だろう。偶々手に入れたあの本のおかげで私達は急激に売れるようになっていった。だがそれは偽り、自分達の歌と踊りで人気を得ようとしていた頃の心があればそもそもそんな物に手を出す事も無かった。

因果応報とはこの事を言うのだろうか。

もう一度、一からやり直そう。姉さん達がいれば本なんか頼らずきつと今以上に多くの客を集めてみせる。

京理 side

太平要術、既に護衛の者を3人捕えて張三姉妹の話を聞いていたが、眼鏡を掛けた女の子は確かにそう言った。

そういうえば華琳が探していた南華老仙の本だったな。この子たちが持っていたのか。

「京理様、我々は黄巾を付けているだけで変装もしていませんが大丈夫なのですか？」

周泰が聞いてくる。ばれるのではないかと考えているのだろうか、隠密はばれたら負けの世界だからな。

だが、

「ばれても問題ないよ。この子たちは最小限だけの護衛を連れている、つまり周りには内緒という事だろう。で、張三姉妹を狂信している者達を置いて自分達だけ逃げようとすれば？それでも死んでも守るという輩もいるだろうけどそんな奴らだけじゃない。信じたのに裏切られた、そう思う人間もいるだろう。そもそも皆が皆そういう人物であれば張三姉妹の意図を無視してこんな勝手な略奪行為な

んかは起きないさ。」

そう、姉妹の話を聞いていて周りが勝手に騒いでいるという事はもう分かっている。

それを先に知ることが出来ただけでも侵入した甲斐があった。他の諸侯に見つかっていたら間違い無く殺されている。

「ほえー。」

吃驚している。桂花とは違ったタイプの猫のようだ。

「それで脱出した後はどうするのだ？」

「安全を保証してあげてまた自由にやらせてあげるさ。」

「なっ！？討伐軍の諸侯達にはどう説明するのだ？」

当初の目的は張三姉妹の生け捕り、そしてその後……

「この一角を燃やして焼身自殺に見せかける。幸い黄巾党の奴らは口が堅かったみたいで顔は割れて無いからね。まあ、勘の良い奴は気付くかもしれないけど。」

おそらく、華琳辺りは気付くだろうな。

だが、言わないだろう。今回張三姉妹という大将首で得る風評も大事かもしれないが、それ以上にこの大勢力を作り上げた彼女達の魅力は諸刃の剣とはいえ多いに役立つはずだ。そして、華琳がその申し出を断るはずがない。

「だから、君達も助けてあげるから警戒しないでいいよ。」

そう言って、俺の真後ろに隠れ武器を構える二人の少女を見つめる。

「「「!?!?!」」」」

甘寧と周泰も気付かなかったのかかなり驚いていた。

「貴様は護衛隊長の少女か？」

甘寧が聞くと

「本当に・・・天和ちゃん達を助けてくれるの？」

ピンクの髪色をした少女が聞いてくる。

「ああ、約束する。というか初めて会ったばかりの人物を信用するのは難しいと思うけどな。ああ、そういえば名前教えてくれないか？俺は宮 京理、好きに呼んでくれて構わないよ。」

「あ、ボクは許チヨだよ。」

「私は典韋と言います。」

良い子たちだと思う。この子たちも華琳の所へ、と考えていたがまさか許チヨと典韋とはな。都合が良すぎてちょっと怖い。

「やっぱり君達も張三姉妹の歌に惹かれて？」

「うん、すごくいいから兄ちゃんも聞いた方がいいよ！」

「はい、季衣の言うとおりです！もう、毎回ほー！ほー！って
！」

ごめん流石にほー！ってちょっと分からない・・・。

「じゃあ、とりあえずこのまま脱出しようか。」

その後、3人に会って説明するとどうせこの道助かる術がこれしかない、それに場所は制限されるがまた自由に歌を歌えるという事で承諾してもらえた。

脱出の道中

「お姉ちゃん、この人気に入っちゃった。私が目を付けたんだからね♪」

「天和姉さんには悪いけどちいの魅力でメロメロにするもんね。」

「・・・。」

「悪い子達ではないんです・・・。」

張梁が1番姉らしかったのは言うまでも無かった。しかし、これで孫策には貸しが出来ちゃったか・・・。後が少し怖いな。

黄巾党の最期（後書き）

ちよつと良い感じのお話を意識して作ってみました。

本当は明命だけ連れて話術で丸めこむってのも考えたんですが不自然ぽかったのでボツに。

月を照らすは太陽（前書き）

20万PVと25000ユニーク到達

嬉しい限りです。これからも定期的に上げていくつもりなのでよろしく願います。

月を照らすは太陽

華琳 side

2刻もせずに討伐は終幕を迎えた。

桂花が考えたよりも予想以上に早い。やはりどの諸侯も油断ならな
いようね。

唯一、劉備達が急に抜けて公孫サンは多少苦勞したようだけど。

京理から報告があり、今黄巾の乱の首謀者とも言える張三姉妹が私
の目の前にいる。

「それで、約束は守っていただけるのでしょうか？」

1番しつかり者である張梁が聞いてくる。

「いいでしょう、約束は守るわ。貴方達もこれから曹魏の者よ、よ
ろしく頼むわね。」

「「「御意。」」」

約束というのは私の領地内であれば自由に公演を行っても良いとい
うもの。

ただし、今回のような事もあるので見張りは付けるし予定も事前報
告事後報告と詳しく行う。

そして、こちらの利点。それは彼女の公演で私達曹魏の宣伝を行う
というもの。

言うなればこの子達が私達の代わりに徴兵活動をしてくれるような
ものだ。

彼女達は自分達のやりたかった公演を沢山行い宣伝すればするほど活動できる範囲は増え、私達はそれに応じて兵が増える。そして、その活動は兵達の慰安にも通ずる。

「それで、早速公演は行うのかしら？」

「はい、初回は再出発するという特別な意味もありますので凄いものにしたと思っていますので。その際は華琳様も是非お越しく下さい。」

この利益は国賊である黄巾党の頭という不安材料を抱えるといった点を考慮しても余りある価値がある。

それに、この程度で臆するようでは私の覇道に先は無いわ。

唯一懸念すべきは、張三姉妹が生きている事を知っている孫策なのだがここも流石京理としか言えない。

孫策 side

「はぁ？張三姉妹を見失ったー？」

思春と明命が申し訳なさそうな顔をしている。

「はい、生きている事は確認できているのですが……。」

どうやら脱出後に気付かないうちに撒かれていたようだ。

三姉妹を連れてうちの思春と明命が気付かないうちについて一体どうやったら可能なのよ……。

いや、もうこうなってしまったものは仕方無い。

「そう、しょうがないわね。下がっていいわよ。」

「「はっ・・・。」」

ふう、どうしたものかしらね。

「冥琳、どう思う？」

「おそらくは曹操の所に居るんだろうな。だが、公に言えるような確たる証拠も無い。脅しや公言、というのは無理があるな。」

「まあ、でも思春には貸し1つって言ってたみたいだから近いうちに払ってもらいましょうか。」

「姉さま、思春から聞きましたよ！」

「あら、蓮華。どうしたの？」

「どうしたの？ じゃありません！ 宮京理とかいう輩、張三姉妹を匿っているらしいではないですか。」

「ええ、そうね。」

「そうねって、孫呉の再興を図るたm 「はいはい、分かったわよ。」
姉様！」

我が妹ながら融通がきかないわね。王はこうでないとならない、といった固定観念が強い。

こういったものは公の場では必要かもしれないがこの子は少々気負

い過ぎている。
何とかならないかしらね！。

京理 side

黄巾の乱は無事収まった。

だが、それよりも問題なのは

「京理さん、わい「却下。」ひどい？まだ何も言っていないよ？」

「どうしても付いてくる？」

「そ、それは……。でも、京理さんならみんなを幸せに出来る！」

強い意志を持って言ってくる。評価してくれるのは嬉しいがな……

「前にも言った通り俺は「京理！」！？」

声がした方を振り向くとそこには詠の姿があった。長安にいたはずだが……。

「詠、なんでお前がここに？」

「……京理。」

恋も？しかし、その横にくっついてる小さい女の子が気になる。
だが、それ以上に気になるのは

「なんで、お前らそんなに傷だらけなんだ？」

「京理・・・」

詠が泣いている・・・。
嫌な予感がある。

「月が・・・」

やめろ、言うな。

「月が・・・！」

やめてくれ・・・

「殺され・・・た。」

『宮さん、月で良いですよ。』

『恋さんから真名を受け取ってるみたいですし、それに悪い人には見えませんから。』

今日もまた夜は来て、月は野を照らす。

月を照らすは太陽（後書き）

ふう、これで300近かったお気に入り件数ともお別れですね。

墮ちる日（前書き）

やらかしてしまった前話、後悔は無いです。

墮ちる日

京理 side

はい？

「詠、いくら冗談でも言って良い事と悪い事があるよ。」

「そんな冗談なんかの為に僕がここに来ると思う？」

泣きながら、そして怒りながらこちらを見てくる。
本当・・・なのか？恋を見ると目を俯けてしまう。

「反董卓連合が結成・・・されたのか？」

「・・・うん。」

泣きじゃくりながら言ってくる。
そういえば、

「張遼は、張遼はどうしたんだ？」

「野戦の時に騎馬同士の戦いで負けて・・・。」

「なっ!？」

一体何が。馬を使えば最強のあの張文遠が騎馬同士の戦いで・・・
負けた。

「長安を攻めてきた者は誰だったんだ・・・？」

「分からない。」

この大陸に騎馬で張遼とやり会えるなんて馬騰、良くて公孫サン位のはず。

だが、俺は軍議の時二人とも居るのを確認している。

それに戦が終わった後もだ、たった2刻の間に長安まで行くことは不可能だ。

「月様が亡くなったのは、本当か？」

華雄が聞く。

「・・・。」

返事が無い、肯定の意味だろう。

「恋達は、貴様らは何をやっていた！京理、お前も反董卓連合が結成される事を知っていたんだろう！？こんな黄巾党討伐なんかより「それが！」！？」

「それが、月の意志だったから。」

華雄は何も言えなくなってしまふ。

「俺だって本当は反董卓連合が起きると分かっていた！分かっていたんだ！でも、こんなに早く襲われるなんて・・・。」

「ちょ、ちょっと待って！」

「なんだ？」

「反董卓連合は結成されたみたいでここにいる諸侯もおそらくそちら側に付くと思う。でも、

私達が襲われたのは連合の奴らじゃない。」

な・・・に？

「詠、何があったか教えてくれ。出来れば長安に急いで戻って自分の目で確認したいがまだ諸侯が沢山いるからな。」

そういつて董卓軍の者だけで一つの天幕に集まる。

話を聞いてしまった以上劉備には嫌でもこちらに付いてもらう。だが、今はそんなことはどうでもいい。

そして、賈クは少しづつ事を話し始めた。

泣き止むのを待ってあげたかったがそこまで冷静になる事なんて出来ない。

くそつたれめが、一体何がどうなっているんだよ。

霊帝の暗殺と関係があるのか？俺がいない隙を突いたのか？ということ俺が知っている者？訳が分からない。頭がおかしくなってしまうそうだ。

そして、そういう風に感情を表に出さずに物事を客観的に見ようとしている自分がひどく醜く見える。

回想 ~ 長安 ~

詠 side

「あゝ、なんや暇やなあ。恨むで京理ゝ。」

霞がふてくされている。京理の進言により黄巾党討伐の際、僕と霞と恋、それにねねは残る事になった。董卓軍の中でも群を抜いて強いこの二人を置いていったのはある事を懸念しての事。

もちろん反董卓連合の事である。

俄かには信じがたい事だが袁紹が洛陽の宦官たちを皆殺しにした後、ここ長安に皇子の身柄を拘束している逆賊董卓を討つという大義名分持って攻め入ろうとしているらしい。

それも連合を組織して。

こちらの義を主張しても月の事を知らない諸侯は皇帝の御子をこちらに有している以上脅して言わせた考える。

そして、例え知っていたとしても大抵の諸侯は黄巾党討伐に続いて風評を上げるにはこれ以上ないの考える。

言わばこれから始まる群雄割拠の時代の贅のようなものである。皇子が居たからという理由だけで選ばれてしまった。

だが月なら知っていても、理解していても同じ事をするだろう。

『困っている人がいたら助ける』それが月という一人の女の子の本質。

彼女がそういう人であったからこそみんなが惹かれていった。

「霞、恋、ねね。」

「「「?」?」」」

「月は優しい良い子だよね。」

「は? 当たり前やん。じゃなかったらずっとここにおったりせんわ。」

「ん、月は良い子。」

「ねねも恋殿と同じですよ。」

「詠、どうかしたんか?」

「へ?」

いつの間にか頬に涙が伝っていた。

「いや、何でも無い。」

ボクったら、まだ起こるとは限らないのに縁起でもない。

そうさせない為にもボク達がいるんだから。それに、黄巾党討伐も終われば京理も帰ってくる。

そう、あの男がいれば例え連合が組されようとも負ける事は無い。不思議とそう思える。

確かに元々能力は高いものがあつたけどそれ以上に安心感を与えてくれる。

だけど、まさかあんなことが起きるなんて・・・。

墮ちる日（後書き）

先に言っとくと真恋姫しかやった事が無いので于吉と左慈は出てきません（今の所は予定なし）。
なので短絡的なオチでは無いのでご安心を。

サムサノナツハオロオロアルキ（前書き）

昨日投稿出来ませんでした、ごめんなさい。

今回は相当難産でした。このサブタイトルはあとがきで説明します。そして今頃気づいたけど名前・・・賈馱と公孫賛だったのね。暇あるときにでも直します。

ついでに理心流が本当に存在した件。

サムサノナツハオロオロアルキ

霞 side

京理が討伐に出て数日後

「東に諸侯が？・・・分かったわ。」

兵からの報告を受けて詠が気落ちしとる。

「何があったんや？」

「愚かにも天を欺き長安に専横、暴政を敷く国賊董卓を討て。」

「は？」

「そんな内容の檄文が諸侯達の間を広まっているみたい。」

「なんやそら？」

月とは無縁の話過ぎて意味が分からへん。

専横どころかその人の良さから長安中の人に好かれとるしうちや恋、ねねもその一人や。

「袁紹が発起人としてここから東、まだ遠いけど集まっているみたい。今集まっている連中だけなら戦うことになっても多少長安の民の事も心配だけど大丈夫だと思う。」

でも、それに黄巾党本隊討伐に出ていた諸侯も加わればきつと勝てない・・・。

兵がいても策を施すとか以前にそれを動かす将が足りないのよ。」

京理はこれを予見してうちと恋を置いてったんか。

「大丈夫や、うちも恋もおるんやで。それに、黄巾党討伐の奴らが加わる頃にはあいつが戻ってくるから心配ない。」

「ええ、そうよね。でも京理は不思議な男よね。まだボク達と会って間も無いのに討伐軍を任せちゃってるし連合のほうもあいつがいれば大丈夫って思えちゃってるんだから。月に何かしそうなのが気に食わないけど。」

「気に食わないのはともかく不思議って点は同意やな。」

詠の言う通りや。最初に会った時恋を倒してしまうほどの武を見たから？ 武人でありながら多才であるから？ いや、うちだけじゃなく詠や恋や月も感じる何かがあるんやろな。

京理の負ける姿見てみたいけど想像できへんし。

「それにしてもどないするん？ 出来れば長安の民の事も考えてこっちから打って出た方がいいと思うんやけど。」

月の事考えるとやっぱ民に迷惑かけたくないって考えるはずやしな。そもそも、人の良い子である月がこの事を知って今まで通り普通でいられるとも思えんし。

「そうね、それも一論だけど既に京理達が黄巾党討伐の遠征に出ている以上ボク達まで遠征すると長安に誰もいなくなっちゃうしそれに行っても勝てるかどうかは分からない。もし勝ったとして黄巾党討伐の諸侯達がそのまま追撃して来たら厳しいわ。」

その諸侯達の中には騎馬の扱いに長けた者もいるはず。そうあってはいくら霞でも連戦は厳しい。

「じゃあ、城から出ての野戦？」

「そうなるわね。」

向こうに沢山の有力な諸侯が付くかも知れないがこちらには京理がいる。あいつさえいれば……。

「伝令！」

「何!？」

先程とは違う兵士が部屋に慌てた様子で入ってきた。

「南西に騎馬を中心としたおよそ2万の軍が接近中、既に防衛の城は突破されもうここまで後十里とのこと！」

「「なっ!？」」

「大規模な2面作戦を打ってきたということ!?でもおかしい、それなら東にいる諸侯ももう同じくらい近づいていなければ意味がな

いもの。さっきの報告ではまだ袁紹達は集まっている途中、一体どういうこと!？」

「賈馱っち、考えとる暇はないんとちゃうんか？」

「ええ、そうね。ボクは月のところに行ってくるから霞は恋とねねと一緒に軍備の方よろしくね！」

「任しとき！」

月 side

黄巾党本隊の討伐に京理さん達が出てからまだ2日、後何日で帰ってくるんだろうか？危険な目に有ってなければいいけど。あの人数で大丈夫かな？

「へう。」

最近京理さんの事ばかり考えている。

私を知る京理さん、詠ちゃんよりも頭良くて恋さんより強い、そんな凄い人。

そっちに目が行きやすいけどもそれよりも・・・。

普段から優しさがあってちゃんと思ったことも言える、私が理想とする『上に立つ人』まさにそれだった。

話をしたのは数刻、それでも京理さんの本質は分かった気がする。とにかく優しい、それを根底に武と知を身につけているように見える。いえ、見えるのではなくそうなのだと思う。

私もそんな人でありたい。

でも、私は乱世なんかじゃ役に立たない。

それで長安の皆さんを守ることができないなら京理さんに託したい。周りからは押しつけがましい、余所者をと批判があるかもしれないしその逆もあるかもしれない。

でも、一度直接会うような事があるなら、その優しさに触れるような機会があるならきつとみんな分かってくれる。

「月! !」

いろいろと今後の事も含め考えてたら詠ちゃんが物凄い形相で走ってきた。

「詠ちゃん、どうしたの?」

「どっちから行ったら良いか分からないけど落ち着いて聞いて。」

「う、うん。」

そうして、私にとっては聞きたくない事を聞く。

「私を・・・討つ?」

私を討つ為だけに南西と東から大軍が来ている。

そんな、専横? 暴政? 本人たちの意思もあって皇子を良かれと思つて長安に匿ってあげたのも全部悪いことだったの? やっぱり、私じや力不足だったのかな? な・・・んで。

「大丈夫! 私達が絶対に月に手を出せないわ!」

詠ちゃんが励ましてくれる。

でも、詠ちゃんも私のところなんかじゃなくて最良い士官先がきつ
といっぱいある。

「詠ちゃん、私じゃやっぱりダメだったのかな？」

頬にはいつからか涙が伝っていた。

「月は良い子よ、ボクが言うんだから間違いないわ！」

「私どうしたらいいのかな？もし、私一人でこれが収まるなら・・・」

「馬鹿な事言わないで！」

「!？」

「・・・お願いだから、そんなこと言わないで。私達は月が大好き
だし長安の人みんなそうよ。だから、こんな義の無い奴らに負け
ちゃダメよ。」

詠ちゃんも泣いている。

「それに、あいつが来るからきっと大丈夫よ。」

あいつ・・・京理さん。

そうだ、今京理さんのようになりたいと思っていたばかりなのに・・・
・詠ちゃんを悲しませてしまった。

「詠ちゃん・・・。私また京理さんと詠ちゃんと霞さんと恋さんとねねちゃんと莉羅さんと・・・みんなといっぱいお話したい。」

涙を拭いて誓う。絶対にまたみんなと楽しく過ごす、絶対に。

だが、それが叶う事は無かった。

サムサノナツハオロオロアルキ（後書き）

今回のサブタイトルは宮沢賢治の雨ニモマケズの1文。

自分が乱世に何も出来ない事を嘆いていたと解釈してもらえれば・

・

月とのシーンを今からでも割り込み投稿したい気分ですね。要望があったら、若しくは作者が満足できなかったらするかも

誰が何と言おうとこの小説のメインヒロインは月と華琳

とりあえず作者まじ屑、異論は認めない。

日輪と月輪（前書き）

お盆シーズンはやっぱり忙しくなりますね。まさか三日も投稿出来なかったとは

皆さんはいかがお過ごしでしょうか？

てか、お気に入り3000キター！！！！後ついでに30000pvと後ちよつとで25万アクセス！

一時はどうなるかと思いましたが良かったです。これも偏に皆様方のお陰です。

日輪と月輪

現在 ~ 黄巾党討伐跡地 ~

京理 side

「その後、さっきも話した通り私達は負けた。霞を倒した相手、分かっているのは背が高い大女だって事だけ。顔は良く見えなかった。月も、そいつに・・・。」

詠は涙を交えながらも話し続けた。

おかしい話が多すぎる。特に月を討つと同時に軍を引き詠達に亡骸も引き渡すという行為。

命が目的ならほとんどは晒し首等にされるのは三国時代でも普通のはずだ。

既に詠が長安の傍の小川の流れる森に埋葬したそうだ。

他にも気になる所はいっぱいある。

が、今はそれよりも長安にまずは戻るべきだ。

詠の話ならここにいた諸侯にもそろそろ書状が届いているはずだ。

そして、参加しないはずがない。

月とも知り合いである馬騰に協力を願いたいところだがあの軍議の様子じゃそれは無理・・・だろうな。

馬騰は漢の忠臣であり正義感も強かったが反乱を繰り返していた野心の塊のような人物でもあった。

であるとする例え月と知り合いでも風評を選ぶだろう。董卓軍である俺達に月の事を董卓と言っていた事からもその繋がり深いものではないという事がわかる。

そもそも月が死んだ今、反董卓連合は1番の目的を失った事になる。では、反董卓連合はこのまま解散の可能性があるのでないか？一瞬考えたがどう考えてもあり得ない。

第一に1度起こしてしまった以上そこに行くまでに兵糧等の金が掛かっている。ということはもちろん成果が無ければマイナスになっってしまうのだから動くのは当然。

第二に月を討伐するのではなく本当の正義感を持って長安を救おうと考えている者もいるだろうから。

第三、正直これが1番大きいだろう。風評が欲しい者にとって月が既に死んでいてもいなくてもこの連合に参加し天下に国賊董卓を討つという義を示したというのは大きな意味を持つから。

だから、まずそのまま進軍してくるだろう。

それと史実とは違って長安での戦いになる。わざわざ虎牢関等を通る必要もないせいで更に状況は厳しい。

「稟と風は華琳の元へ行っているぞ。今推薦状も書いてくるから。

才有る者を華琳は重用してくれるからな、二人なら心配ないだろう。」

一通り考え、稟と風に告げる。

「なっ!?!?!分かりました、京理様もお気をつけて。」

稟は最初拒絶されたのかと勘違いしたのだろう、ショックを表していたが俺の意図を読み取り素直に従った。

「お兄さん、私にとって日輪は一つではなかったのかもしれませんがねー。」

「・・・ああ、それでいい。」

「それとも、曹操様を日輪とすると、月ちゃんは月輪・・・ということでしょうか。」

あまり感情を出さない子だったがこれから敵になる可能性もあると分かっているのだろう。実に詩的な事を言ってくる。

「二人ともありがとう。」

そう言って、俺が書いた書状を手には華琳の元へ向かう二人を見送る。

「さてと、劉備達。分かってるから出ておいで。」

「「「!?!?!?」」」

気まずそうに物陰から出てくる一行。

関羽達とはともかく劉備や諸葛亮達まで来てたのだ、いくら気が動転していても流石に気づく。

だが劉備達に詠の話聞かせる、それこそが狙い。

「で?何か言う事は?」

「ご、ごめんなさい。」

「申し訳ございません。」

劉備と関羽がしょんぼりしながら謝る。

「まあ、いいよ。それで今の話を聞いてどう思った?」

「え!?!?え、え」と

「聞こえないはずはなかっただろう？」

「は、はい。・・・しゅ、朱里ちゃ」

シュー!!

「・・・へ？」

自分に何が起こったのか劉備は分からないでいるようだ。

「「「「!!!!?」」」」

莉羅が、劉備を横薙ぎに斬った。そのままその場に崩れ落ちる。そして、そんな様子を静観している自分がいた。

「「「と、桃香様!!」」」

諸葛亮やホウ統達は脇目も振らず一目散に劉備の元へ寄る。気を失ってはいるが出血はあまり無い。おそらく出血によるショックではない無いのだろう。

諸葛亮達は念のため医者も呼んでいた事だしとりあえず命に大事は無さそうだ・・・。

「貴様あー!!!!」

見ると関羽が莉羅に斬りかかろうとしていた。

ガキィ!!

「ぐっ、なぜ邪魔をするのですか！？京理様！！」

俺は関羽と莉羅の間に入っていた。

「・・・なぜ？お前がそれを聞くのか？劉備と義姉妹であるお前が！！！！」

「！？」

「分からないでいるようだな。しかし、莉羅の方が早くて良かったな。・・・俺なら殺していた。」

日輪と月輪（後書き）

若干端折っています。なのに話が進まぬえー！これから過酷な辻褄合わせという名の労働が待っていると思うと涙が出ますね。
文章おかしかったら報告お願いします！。

※ご指摘があったので訂正、追記致しました。ついでにあとから読み返しておかしかった部分も訂正しました。

京理に覇を見る（前書き）

ども、らんちゅです。

夢はでっかく中堅SSを目指しています。

京理に覇を見る

北郷 side

「大丈夫か！？桃香！」

京理と桃香が話している最中、いきなり京理の傍に立っていた女が桃香を斬った。

なぜ？意味が分からない。半国の器としてかなり温和な性格で知られる京理が物凄い形相で怒っている。

気に触るような事を言ったのだろうか？

いや、そんな事は今はどうでもいい。問題は斬られたという事実。

「なんだ「待ってください！」！？」

怒りに身を任せ殴り掛かろうとした所を朱里と雛里に止められる。

「二人とも離せ！」

「まずは私達の話聞いてください！」

珍しく、いや初めてかもしれない。雛里が大声を上げて俺を制止する。

「・・・分かった。雛里達はなんで京理達が怒っているのか分かってるのか？」

「おそろく。」

あいつの行動は朱里達クラスで無ければ理解できないのだろうか？
鈴々も本能的に飛び掛かろうとしていたが愛紗を相手にしていた京理に片手で押さえつけられていた。

本当に何者なんだ？ 呂布以外にここまでの武を有している者が存在しているなんて。

・・・今冷静になって考えてみたが、俺が京理の間合いに入った瞬間には臆切りにされていた事だろう。

だが、京理はそんなことしない気がする。何故だか分からないが、そんな気がする。

「どういう事か教えてくれ。」

「はい、理由は一つのみです。」

「一つ・・・。」

「それは、京理様の質問に対して桃香様は私を頼ってしまったという事です。」

「そ、そんなことで？」

「そんな事じゃありません！！」

「!？」

朱里が俺の言葉に怒りを表した。

「はわ！？ 申し訳ありません。」

「最初、私達を別の天幕に置いて董卓軍のみで集まって話をしてい

ました。この時点で私達は京理様の策に嵌まっていました。」

雛里が話を続ける。

「へ？」

「あの時、目の前であんなやり取りを行われたら気になるというのは人間の性。

そして京理様の予想通り私達はこっそり話を盗み聞いていました。

その話で今回の反董卓連合に明らかに義が無い事は分かりますね？」

「あ、ああ。」

関羽 side

「劉備玄德という一人の人物は義侠心に厚い優しい人間だ、違うか？」

「は、はい。私達は皆そんな桃香様を慕って集まったのです。」

「関羽、人には頼っていい時とダメな時がある。それはその人間の本质を見られる時。

あの時、迷わず義は董卓軍にある！若しくは、それでも反董卓連合に義がある！という言葉が聞ければ

俺に仕えるという先の話もあったし個人的にはこちらに着いてもらいたかったがどちらに着く事になっても文句は無かった！

・・・だが、劉備は軍師である諸葛亮を頼った。この意味がわかる

か？

劉備は、董卓軍と反董卓連合を義ではなく利で見たということ。
そりゃ、無いだろう……。」

「!!!!」

人目も気にせず泣いている。やはりこの人の本質の根底には優しさがある。

桃香様を義侠に生きる者と見ていた分、そのしょつくという物も大きかったのだろう。

最初はわが主で姉でもある桃香様が斬られたという事にしか頭が行かなかった。

羊コという女も、そんな京理様の気持ちを理解して主が手を染めてしまう前に自分が行った。

なんという主従関係、出来れば私もいつかあんな関係になってみたい。

京理 side

「莉羅、迷惑掛けるね。もしかしたら俺は劉備を殺してしまうところだった。」

この話を聞いて皆納得、とまでは行かないがとりあえず分かっただけであつた。

莉羅がやった事とはいえ俺もそのつもりだったから詠や星達にもかなり怒られたが、まあしょうがない。

「いえ、京理様の為ならどんな事であろうと為して見せますよ。」

「これからも、よろしく頼むね。」

「はい。」

にっこりと笑うその頬はほんのりと朱に染まっていた。

長安に向かう途中、劉備は傷も治らないうちに俺の所へ来た。

「ごめんなさい。天下に覇を唱えて、みんな楽しく暮らす事が出来る世界を作ろうって思ってたのに・・・それなのに」

「申し訳ない。」

「へ!？」

「俺は月の事で頭がいっぱいいっぱいになってたのかもしれない。もし、莉羅がやって無かったら俺がやっていた。」

「それは、私が悪かった事ですし。」

「それでも、」

「もう、いいんですよ。って、それより!」

「ん？」

「私は中山靖王劉勝の末裔、劉備玄德。天下に覇を唱えるためにこの乱世に身を投じました。」

「だけど、私は幸運だったのかもしれないです。その過程で京理様とお会いする事が出来たのだから。」

宮 京理様、私達は貴方に生涯お仕えする事を誓います。これは私達劉備軍全員の意。」

「おい、劉備？だから俺は」

「京理様、私の真名は桃香です、受け取ってください。」

「・・・ふう、分かったよ。桃香、改めて名乗ろう。俺の名は宮京理、真名も字も無い。好きに呼んでくれて構わない。これからよろしくな。」

他の者共真名交換を行い、こうして劉備軍は正式に董卓軍というよりは俺の麾下に加わることになった。

京理に覇を見る（後書き）

またも若干端折り

さて、劉備の改造も終わりましたね。後は敵に董卓がいない反董卓連合という不思議な状況を終えればようやくやく・・・。

鳳雛の悩み（前書き）

カイバー

鳳雛の悩み

ホウ統 side

「なあ、その水鏡塾にいた徐庶って子もやっぱり女の子なの？」

「はい。って、へ？元直ちゃんを知ってるんですか！？」

「ああ、噂でね。しかし今のところ男が俺と一刀だけとはねえ。やっぱり。」

苦笑しているのは私達の新しい主、宮 京理様。

先の約束でご主人様と朱里ちゃんと私、京理様の4人で馬車の中で話しています。

馬車に乗る時、他の方達の視線が怖かったけど京理様と話が出来ると思うと怖い以上にうれしいと思っちゃう。

まだ、会って間もないけどこの大陸にこれ程全てに秀でた才能を持つてる人っているのかな？

愛紗さんと鈴々ちゃんを同時に相手して勝ってしまう武力、黄巾討伐の軍議において名だたる諸侯を前にしながら見せつけたあの知力と胆力、そしてそれ以上に人の在り方を分かっている大徳の持ち主。

「でも、京理様は本当にすごいです。」

素直にそう思った。

「ん？何が？」

「全てでしゅよ！・・・はう、噛んじやいました。」

朱里ちゃんも京理様に魅せられて陶醉しちゃってるのか、最初の警戒っぷりが見る影も無くなっちゃってる。

「はは、器用貧乏なだけだよ。」

京理様が器用貧乏なら一流の人間なんて存在しないと思います・・・。それに本当の器用貧乏は・・・ごめんなさい、何でもありません。

「なあ、俺達を集めた理由はなんなんだ？」

一時は莉羅さんが桃香様を斬ったという事もあって一触即発な関係になりそうだった京理様とご主人様。

ご主人様は、それが桃香様が桃香様であるためにやったという事を知ると最初はそれでも納得できない、という面持ちで関係も少しギクシャクしていましたが京理様と話すようになってからはすぐに打ち解けました。

それと、私たち全員敬語を使わなくてもいいとの事でした。ですが、恐れ多くてほとんどの方が敬語を使ってるのが現状です、（＊。㇏。）。ノ。

「ああ、そうだったね。今回の、反董卓連合についてみんなの意見を聞こうと思ってるね。天の御使いである一刀はどう思う？」

「うーん、俺が知ってる歴史じゃ反董卓連合は洛陽で専横を敷いていた董卓を討伐するって形で虎牢関とかを抜けてくるんだけどこの時点で違うからあてにならないな。朱里達は何か思ったことある？」

「一刀が知ってる歴史とは違うってことだな。」

「あ、あの。そういうお話でしたら皆さん交えてお話しても良いのでは無かったのでしょうか？」

その通りだと思う。これからの行動を左右する話であれば人が多いに越したことは無いと思う。間者とかがいたりしない限りは。

「つまりそういう事、なのでしょうか？」

朱里ちゃんも同じことを思っているようだ。

でも、その中で私達を選んだ理由は？やっぱりまた別の意図があるのかな？

「みんな深く考えないでいいよ。ただ単に先にかの有名な伏龍と鳳雛、天の御使いと話をしたかったただだから。最初は違っただけだね。」

「桃香様の意見に対して軍師である私達がどう思っているのか？です。すね。」

「正解、さすがは鳳雛。あの時はどう考えても君主の自分勝手な判断に振り回されているとしか見えなかったからね。俺だって、同じ状況になったら嫌だよ。」

なんでだろう、この人に褒められると凄く嬉しい気分になる。もっとこの人の役に立ってもっともっと褒められたいなあ。

「雛里、大丈夫か？」

「あわわ！！は、はい、大丈夫れしゅ！」

あわわ、京理様が真名呼んでくれた。それも真名交換の後じゃ最初に！それだけで嬉しくなってる私っておかしいのかな？

いや、関係無い。桃香様の意思に従っただけじゃなくて私も愛紗さんみたいはこの人に付いていきたいと思った。

そして、京理様一の軍師になってみせる。朱里ちゃん、詠さん、ねねちゃん、莉羅さん、それに今は曹操軍にいる郭嘉さんに程立さん。らいばるはいっぱいいるけど負けないよ。恋でも……。

あ、でも京理様小さい胸でも大丈夫かな……？

鳳雛の悩み（後書き）

やってみましたホウ統side、そしてやらかしてしまいましたホウ統side

地の文も一応ぽく書いてみました。この武将sideやれや！っていうのがあったら言ってもらったらやる予定です。

顔文字？出来心です。許してください。

いつになったら程立さんはバージョンアップするのでしょうかー（実は月を照らすは太陽の時にやるつもりだったけど忘れてたというのは内緒

二者の思惑（前書き）

かなり遅れてしまいました（汗

二者の思惑

京理 side

今も一行は長安へ向かっている。

連合軍は黄巾党討伐の諸侯も集まってから動く、そして再度遠征の準備をする事を考慮する事を考えると長安に着いてからでも多少だが猶予はあるだろう。

そのため現在長安には軍師がおらず徐栄、郭シ等がいるだけだった。ほとんどの諸侯がこの連合に参加するということもあって詠が大丈夫と判断したようだ。

しかし、郭シは危ないんじゃないか？まあ、詠がここにいるから大丈夫だとは思うが。

「それで、集まってる諸侯は？」

「檄文の送り主である袁紹を筆頭に袁紹、袁術、孔融、鮑信、他にもいっぱい、それに「黄巾党討伐の諸侯達ですね。」・・・ええ、そうよ。」

「さて、どうするか・・・。」

華琳と孫策の動向が気になる。華琳はおそらく自分の覇道に近づく為なら必要とあらば俺でも殺る・・・だろうな。

孫策には、貸し一つがある。考えようによってはこっちの方が取り付く島がまだある。

「やはり、今の戦力で戦うのは厳しいかと。助力を仰げる者を探すのが先決と思われれます。」

「戦う場所もこちらにかなり不利になるわね。」

「おまけに虎牢関のような強固な関所も無い。」

皆口々に出ている言葉はマイナスの事ばかり、やはりこの状況じゃそうなるか。

「ですが、」

「ん？」

「その武を以って敵を打ち倒すのが将の役目、そしてこの不利な状況を覆し主君に貢献する事こそが軍師の役目。」

「・・・流石だな。」

やはり、女の子に代わっていようがその凄さは変わらない。

「詠、私達が長安に着いてからの猶予はどれ位ありますか？」

莉羅が聞く。

「黄巾党の諸侯の動きにもよるけど書状が届いたのはさっきのはずだから自分の領地に戻って集合場所に全員集まるとしたら1ヶ月位ね。」

「兵力の割合的には袁家の2人が大部分を担っているのか？」

「?ええ、そうよ。袁紹と袁術は頭が悪いけどさすが名門、とでも

言うのかしらね。人数も多いうえ精鋭揃いよ。」

「長安に住む民は？」

「先の襲撃があつたせいで皆怯えているわね。」

「そうか。とりあえず十分な水と砂を用意しないとな。」

「水と砂・・・ですか？」

「ああ、それと少々気が引けるけど皇子にも一役買ってもらおう。」

「「「！！！？??」」」

「はい慌てない、別に人質に使うとか勅命を出させるとかそういうのじゃ無いから安心して。」

「びっくりしたじゃない！」

「ごめんごめん。」

しかし、不幸中の幸い・・・かもな。皇子達のおかげで戦況を5分にする事が出来るかもしれない。

麗羽から先程書状が届いた。

国の為に董卓を討つというような文面だったけど、どうせ宦官を倒した自分ではなく、ただ面識があっただけの董卓が皇子達に好かれているのが許せなかったのですね。

でも、これには乗らせてもらうことにするわ。既に使者には返事をした。

「華琳様・・・？」

桂花が眉を八の字にしたような困った顔を浮かべて立っていた。側に

「そんな顔してどうしたの？桂花。かわいい顔が台無しよ。」

「本当に連合に参加されるのですか？」

普段はかわいい顔をして甘えてくるのに顔色が良くない。

「桂花も分かっているでしょう？それが近道だからよ。」

「京理様と敵対する事になっても、ですか？」

「・・・ええ、そうよ。」

書状が来る少し前に京理からの推薦状を持って郭嘉と程イクがやってきた。

会って少し話ただけだけどおそらく桂花に匹敵する。コネなんか無くてもどこでも仕官先はあったでしょうね。

私を監視しているとも取れなくも無いがそれは無いでしょうね。

董卓を倒すということは京理を倒す事に等しい。それは分かっている。

る、
それは
・
・
・
。

二者の思惑（後書き）

ぬ
ん。

ひとときの・・・(前書き)

連投！

最近、感想に下手に返事をしてしまうとネタばれになると気づいてしまいました。

ひとときの・・・

京理 side

ようやく長安に帰還。所々城壁等に外傷は見られるがやはり詠の言う通り目的を果たした所で軍をすぐ引いたのか、とても数日前に戦場であった場所とは思えなかった。

しかし、恋や張遼、軍師にも詠やねねがいながら負けたのか、思い返してもやはり信じ難いことだ。

未だに張遼消息は分かっていない。

野戦で戦う以上彼女の力は絶対に必要、ましてその謎の集団と直接戦ったのだからそれについて聞きたい事もある。

だが、それ以上に彼女の安否が気になる。

思えば最近を考え事ばかりだな。どこかこの世界を現代にあるゲームや何かと思っ生きてきたのかもしれない。

「ほえり、ちょっと壊れてるけど大きい街だねえ。」

桃香がすぐ横で言う。他の者も口々に言う。

「傷は大丈夫？」

「え、うん。軽い切り傷だったし大丈夫だよ！」

「桃香にも莉羅にも悪い事をした。申し訳ない。」

素直に頭を下げる。移動中は安静させる為に馬車の中で横にさせていたので数日振りに会う。

多少心配してはいたが、元氣そうな顔を見て何よりだ。

「え、ううん。そんな事無いよ。私は今まで口先だけでそれをなかなか行動に示せないでいた。

きつと心の中じゃ『私は頑張ってる、だから』って考えで、周りに褒められたとかそういう見返りを求めてたのかも。

それは正義でも何でもなく、単なる自己満足の偽善だった。

今だから思うのかな？ そんな自分を変えられて良かったって思う。だから、それを教えてくれた京理様と莉羅さんには感謝こそすれど恨むような事とかは無いよ。」

「桃香……。」

違う、俺の頭の中にはそんな改心をさせるような考えがあった訳じゃなかった。

ただ、俺は正史の劉備と比較していたんだ。桃香としてではなく、劉備として見ていた。

一丁前にあんな事を言ってたがやっぱり俺はまだまだ子供なのかもしれない。

「主、いつまでそこにおられるのかな？」

「星か、なんで怒ってるの？」

そこにはちよっぴり？ 不機嫌そうな星が

「さあ？ 別に主と最近話してないとかメンマを語らせてくれなかったとかそういう訳じゃありませんぞ？」

なるほど、そういうことね……。

「ふう、明日は星とメンマを食べたい気分だなあ。」

「!! ふふ、しょうがないですな。我がままな主の要望に答えるのも部下の役目ですからな。」

星さんや星さんや、言ってる事と表情が真逆ですぞ。

「そっか、じゃあ明日は他の人と「主いゝ!!!」分かったから、泣かないでください。」

で、それも嘘泣きだろう・・・。

それはそうとそろそろあの書状は孫策に届く頃かな？

孫策 side

「反董卓連合・・・ね、袁術ちゃんが出る以上私達もやっぱり出ないといけないのよね。」

「そうなるだろうな。」

まあ、黄巾党の討伐もあって小蓮や亞莎達に任せていた徴兵も上手くいったようだし袁術ちゃんを叩きたいのは叩きたいんだけど

「今はまだ反乱を起こすには早いわよ。」

「冥琳、私まだ何も言ってないわよー。ぶーぶー。」

「顔に出てるわ。」

やっぱり、冥琳に嘘は一生無理そうね。

「失礼します。孫策様、書状が届いております。」

そういつて、一人の兵が部屋に入ってきた。

誰かしら？ひょっとして袁術ちゃんの催促じゃないでしょうねー。
そう言いながらそれを受け取り差出人を見る。

宮 京理、へえ・・・

「つて、宮 京理!？」

「何!？その手紙は宮 京理からだったのか!？」

早速書状の内容を二人で見る。

そして、

「また突拍子もない事を考えるな、あいつは。」

「ええ、そうね。でも、面白くなってきたわね。とりあえず、早速この書状を見せに行きましょうか。」

「まさか、この話受けるというのか？」

「当たり前じゃない。双方に利しかもたらさないような話なんだから。でも京理、これで貸しがなくなった訳じゃないわよ?」

「ええ、そうね。成る程確かに理に適っている。だが、これを受け

れば連合の敵になるという事だぞ？」

「冥琳、それでも貴方は京理と手を組んだ方がいいと分かっているはずよ？」

「ふふ、軍師とはそういうものだ。」

そこには悪人面をしながら笑う二人の美女がいた。

ひとときの・・・(後書き)

あれ？人をおちよくってばかりの星、逆の立場にしてみると案外
イイ！（個人的に

書状の内容がバレバレ過ぎて笑ってしまうレベル。

日常、夢の跡（前書き）

バッハの旋律を夜に聴いたせいです。

日常、夢の跡

京理 side

長安に着いてから十日程経過した頃

「京理様、孫策様から書状が届きました。」

「ありがとうございます莉羅。」

書状を手に取り中を読む。

「……。」

「どうされました？」

「孫策か周瑜か知らないけどやっぱり食わせ者だよ。」

「は？」

「いやなんでもない。莉羅、みんなをすぐに集めて。」

「はっ。」

莉羅が出ると今は主のいない玉座の間を見上げながら月の事を思い返す。

「月……。」

『くつきー?』

『そう、クッキー。凄く美味しくて甘いサクサクしたお菓子なんだからどね。』

『知りませんね。』

それはそうか、オランダ発祥の物だもんな。

『食べてみる?』

『是非!』

珍しく月が興奮している。やはり女の子が甘い物に目が無いのはいつの時代も変わらないのかもしれない。

というか、

『はいそこ、いるの分かってるから素直に出てきなさい。』

『?!?!?』

そういつてぞろぞろと俺の知らない武官文官まで来ていた。

『あー、あかん。この人数じゃ流石にばれるわな。』

『……ん。』

『てか、政務はどうした政務は……?』

『『『逃げた。』』』』

総勢100人以上が調理場に來ていた（正確には溢れ返っている）
まあ、恋とか食う専門は見てる側も和むから良いけど

『しかし京理、月と干嘛や面白そうな事しとるなあ。』

ニヤケながら聞いてくる。

『へう／＼／＼』

月、前も言ったと思うけどその反応おかしいからね・・・？
それで茶化される身にもなって！お願い！

『ほほう、確かに何やら面白そうな事してますなあ』

酒呑メンマ將軍の登場。

『星、お前警邏じゃなく『サボりましたぞ。』・・・。』

いや、ぞ。じゃねーよ。さも当たり前かのように言うな。
というかこれちゃんと長安は機能してるか不安になるな・・・。

『ふふ。』

良く見る月の笑顔、俺もなんだかんだ言って君の笑顔を見ていたか
ったのかもしれない。

『月？。』

『なんだかこんな日がずっと続くといいですね。』

『そうだな。』

個人的には断固却下したいがな。

いや、でもこれが月達の有るべき姿なのかもしれない。

それが一つの国としての完成形を見たのか、またはそう思い込んでいたのかは分からない。

『よし、今からクッキー作るからみんなちょっと待ってな。』

高火力が出るか分かんが遅くても40分ほどで出来るはずだ。

クッキーが完成した頃には昼から酒も入り宴のようだった。

途中詠達も来て怒ろうとしてたが主犯に月がいると諦めてそのまま合流。

幼馴染という点を考えても華琳と春蘭、秋蘭のような関係に近いのかもしれない。

『こんな風景がいつまでも大陸中で続くと良いですね。

京理さん————』

「何物思いにふけた顔してるのよ。」

「・・・いや、こないだの事を思い出しているな。」

「?もう、みんな来てるわよ。」

「そうか。今行く。」

詠の言葉で現実に戻された。

そのまま夢の中に居られたらどれだけ良かっただろうか。いや、所詮それは夢、妄想でしかない。

月の言葉に返事をした。今となってはそれがとても申し訳なくなってくる。

俺の中にある二つの自責の念、一つは月を守れなかった事、もう一つは・・・。

夢の跡には何も残らない。

董袁の誓い（前書き）

義の旗の元へ、集え勇者達よ！

董袁の誓い

京理 side

詠の後に付いて玉座の間を出て行く。いつも軍議を行う場所に皆は集まっていた。

「やっほー。」

「久しぶり、でもないか。ともかくよろしく頼む、宮京理。」

「ああ、久しぶり。こちらこそよろしく頼むよ。」

そこには孫策と周瑜、それに

「わっはっはー！皆の者、名門である袁家のわらわが来たからには安心するが良い！」

「わー、後から来た新参者で根拠も無いくせに凄い自信。美羽様素敵です。」

「そうじゃろ？そうじゃろ？もっと褒めてたもー！」

「「「・・・。」」」

袁術とおそらく張勳。俺も会うのは初めてだ。

手紙が届いてからこんな短期間で来るという事はおそらく使者と同時に出発したんだろうな。

みんな、驚きながら無言って、かなり凄いスキルを持ってるね。

驚くのは当たり前それもそのはず、孫策はともかく袁術は反董卓連合でも袁紹と並んで中核を担う存在だからだ。

ここまで幼い&chotto?あふおな子だとは思ってなかったが流石に名門袁家、その兵力にはやはり特筆すべきものがある。今俺たちに最も欲しい精兵を袁術は持っている。

選んだ理由としては袁術が袁紹を快く思っていなかった事と蜂蜜と玉璽をチラつかせれば必ず乗ってくると確信出来たから。

玉璽の方は両皇子が持っていた事は既に聞いていた。

しかし、今考えると月が匿う様な行為をしていなかったら俺達は袁術の協力を得られないまま圧倒的兵力差でやられていたかもしれない。

いや、そんな行為をしなればそもそも反董卓連合は結成されなかったのかもしれない。いや、今は考えるのは止めよう。

反董卓連合から引き抜くという事は結果相手の弱体化にもつながる。この相乗効果があるからいつの戦乱の時代も裏切り、引き抜きという行為は行われる。

今回の戦はお互いに義を掲げてのもの。

俺達が勝てば月の正当性を証明する事が出来、負ければ正史通り未来永劫悪逆非道な者として語られることになる。

そう、これは勝った者が正義。

「じゃあ、とりあえずよろしくね。袁術ちゃん、張勳さん。お互いに挨拶しようか。」

「うむ、わらわは名門袁家の出である袁術じゃ。」

「私は張勳です。美羽様のお供しております。皆さんよろしくお願ひしますね〜♪」

「私は袁術ちゃんの所で客将をやっている孫策よ、よろしくね。」

「私はその軍師をやっている周瑜だ、よろしく頼む。」

そうして中には頭に？を浮かべながらお互い自己紹介をしている者もいたがとりあえず無事に終わってそのまま宴に。

こうして、ここに董卓連合の結成が完成。

袁紹達反董卓連合の奴らの顔を見てやりたいものだ。

しかし、傍から見るとこれ周りを巻き込んだ姉妹喧嘩にも見えるな。どうでもいいけど俺のポケットから蜂蜜は出てこないからね。張勳さんも！こら、そこ違、アッー！

周瑜 side

宴が終わり、今私は京理の部屋にいる。聞きたい内容があったのだ。

「で、あの手紙はどういうことだ？」

「ん？ 莉羅に書かせたから字は間違っていないはずだけど。」

「なぜ私達も呼んだのか、ということだ。」

袁術の兵力目当てだけなら私達は必要なかったはずだ。

「周瑜はどう考えた？」

試してきた。やはりこの男は人と言葉の駆け引きをするのが好きなようだな。

「差し詰め、黄巾党討伐の際に袁術と繋がりがあった者が雪蓮しかなかった事、それに私達と袁術、その財力を利用して離間、いや反間の計でもやるつもりだったか？」

「!?!?・・・流石は天才軍師、恐れ入るよ。手紙をもらった時点で気づいていたのか？」

反間の計、離間の計と間違われる事が多いが少し違う。間者を利用して敵内部の関係を崩し、仲違いをさせるのが離間の計に対し、反間の計は間者に偽の情報を握らせたり、買収したりしてこちらの意図通りに相手を動かす策。

流れはとしては

反間の計で向こうの動きを制限する（一つの事象に考えを行かすようにする）。

←
離間の計でそれを助長、仲違いを起こさせる。

←
弱体化した所をこちらがまとめて叩く

簡単に言えばこんな感じだろう。

袁術が董卓側に付いたとするとその客将である雪蓮が行動を同じくするのは自然な流れ。

そこにも意図があると誰が気づくだろうか。

曹操や馬騰が気付く可能性があるだろうがおそらく連合軍の頭は発

起人であるあの袁紹。

他の者の意見を素直に受け入れるとは思えない。

「お前の行動は一つ一つに意味があるからな。

まあ、これは当事者である私達でこそ気付きやすいかもしれないがいくら連合軍でも気付く者はそういないだろう。」

「そうだな。だが、曹操や馬騰達は気付くはず。だが、袁紹には聞き入れられない。そこを利用するのさ。」

「・・・なるほど。京理、お前は本当に軍師になれるんじゃないのか？」

「ふふ、過去の人物の受け売りだよ。

それに今の言葉だけで全て理解してしまう周瑜達を敵に回したくなかったって気持ちもあったんだがな。」

「嬉しい事を言ってくれるな。」

この後、他の軍師も招いて軍議に近い物を行ったが、いやはや、人生でもかなり有意義な時間だと思えたのはやはり軍師としての性なのだろうか。

董袁の誓い（後書き）

反間の計に関しては色々あるので今回は京理が使う一例としてお考
えください。

ちなみに離間は反間の一つとも言われています。

開戦前、違和感（前書き）

好きな恋姫キャラ？
バスガイドです。

開戦前、違和感

???

side

「なあゝんですってゝ!」

美羽さんが董卓側に付いたという報告が入った。

「姫ゝ、これやばいんじゃないの?」

「麗羽様、どうしましょうか? 孫策さん達もあちら側に付いた、ということですよ?」

「猪々子さん、斗詩さん。こちらにはそれでもまだこの名門袁家であるわたくしの尊い意思に賛同してくれた諸侯が沢山いますわ。おーほっほっほ。おーほっほっほっほ。」

「久しぶりね、その耳障りな笑い声、麗羽。」

華琳 side

目の前に居るのが今回の反董卓連合の発起人である袁紹。私とは私塾が一緒でもあった腐れ縁である。

「あら? 華琳さんじゃなくて?」

「まだ来ていない諸侯は？」

「あなたがびりっけつですわよ、びりっけつ。」

「そう、私達はどこに陣を？」

「びりっけつの華琳さんはあっちですわよ。」

おーっほっほっほと言いながら諸侯の陣が並ぶ最奥を指さす。

「そう。秋蘭、行くわよ。」

「・・・はっ。」

「そういえば、総大将は誰？」

「それは僭越ながらこの名門袁家であるこの「分かったわ。」え？
あ、あの？華琳さん？」

この連合に価値は無いということが。

しばらくして大天幕の中で軍議は行われた。

麗羽が長ったらしくやろうとしていたが自己紹介は簡単に済ませた。
馬騰の所は名代として马超が来ていた。

公孫サンも劉備が突然消えて弱体化は避けられなかったもののそれでもこの二人の騎馬の運用はこちらの武器だ。

「それで、これからの作戦を考えますわ。」

「こちらの戦力の方がまだ高いとはいえ相手は半国の器、宮京理を筆頭に名だたる将、軍師がいるわ。
単純な戦力差だけで物事を測るわけにはいかないわね。」

「それじゃあ、どうするんだ？」

公孫サンが言ってくる。

待ってましたと言わんばかりの気持ちを抑えつけて袁術と孫策に就いての話を始める。

この策を考えたのは稟と風、それに桂花。

この二人は先の黄巾党討伐後に京理の推薦状を持って現れた。

この反董卓連合を見据えての行動か、それとも単に私に才有る者を紹介したかったのかは分からない。

ただ分かる事は、全ての事象に意味があるということ。

京理、最初の約束はいつ果されるのかしらね？

あなたは私のもの。そして我が覇道を阻む者はすべて力でねじ伏せる。

一刀 side

「もうやめたげて！春灯にそんな大人数は乗れないから！」

「主、私を置いていかれるつもりですか？まさか、私をじらす事で

ぬr「ダメレ!」

「でも、最近京理さんって莉羅さんや軍師の人達とべったりだよね!。」

「いや、莉羅は俺の右腕的存在だし軍師もこれからの事を考えてだね。」

「じゃあ私は左腕ね♪」

そういつて雪蓮が腕に抱きつく。

「雪蓮、煽る様なことするんじゃないよ……。冥琳や蓮華に言い付けるぞ。」

「うっ……。」

「じゃあ、わらわはちn「言わせねーよ!?! いや、ちょっと手遅れ感はあるけども!」」

「お嬢様がそれにするなら私もちn「美羽に教えたのおまえだろ!」?」

京理、すごく……。羨ましいです。

あえていつの間に真名を受け取ったのかとか野暮なことは聞かないよ。

でも、俺の存在価値って……。何?

きゅ

「へ？」

恋がいつの間にか手を握っていた。

「恋、もしかして俺の事慰めてくれ『ぐきゅるー』……。」

「……おなか減った。」

ああ、分かったたよ。こんなオチになるんじゃないかなって、分か
ってたよ？

でも、それでも一抹の希望に縋りたくなる俺の心境を誰か理解して
欲しい。

「そっか、じゃあ飯食べに行くか。」

「ん。」

「ねねも行きますぞ！」

「ああ。」

3人で復興が終わった街に繰り出そうとした。

「あ、恋達すまん。一刀貸してくれ。今度俺が奢るから。」

「ん。」

「仕方が無いのです。」

「へ？」

気付いた時には既に春灯に跨っていた京理に服を掴まれそのまま後ろに乗ることも叶わず首を持たれた猫のような態勢で居た。

「せめて後ろに乗せさせてくれよ！」

「そんな余裕がない！」

しかし、何故俺の事をそんなに必要としていたんだ？

もしや、そっちの気がある・・・とか？

いや、例え京理が両刀使いでも許される気がする。

もし京理が本当にBLなr

パッ

「は？って、ぎゃあああああああああ」

地面に擦り下ろされました。

慣性の法則を使うとは・・・って、違う！

「離すなよ！」

「心の声が駄々漏れなんだよ！」

「へ？」

ぽっ

「ぽっ、じゃないでしょ！？もっと違う反応があるよね！？」

って、どういうことだ？

こんな漫才は抜きにして今あいつはBLって言葉に反応した。

そして、三国志には存在しない人物。俺が知る正史とはかなり歴史がずれている事。

・・・前から感じていた違和感。丁度良い、京理には聞きたい事がある。

お前が、俺と同じ天の御使いなのかということ。

開戦前、違和感（後書き）

書きたいネタは沢山あるのに文に出来ない。
それが今の状況。

京理の過去、贖罪（前書き）

another heavenを聞きながら見ましょう。
言ってみるだけ言ってみる。

京理の過去、贖罪

一刀 side

長安を出てしばらくすると小川の流れる森に着いた。

俺はあの後結局馬には乗せてもらえず猫の態勢のままだったがそんな事はどうでもいい。

ここは、みんなで一度来た事がある。

「董卓に何か用事でもあったのか？」

「ん？今日は男二人で来ようかなあって気分だね。」

「随分と都合の良い気分だな。」

「で、もう気づいてるんだろ？」

「お前が俺と同じで天の御使いつてことか？」

「・・・俺はね、最初この世界に来た時、なんでこんな所にいるんだ？これからどうすればいい？食べ物？飲み物は？寝る場所は？色々考えたよ。」

でも、そんな事は意味が無い。俺はこの事を何も知らないんだから。

小さい頃から辺境に住んでいた俺は両親に言われ、子供の頃から当たり前のように血反吐を吐くような修練を行ってきた。俺には歴代の理心流の中でも才能が突出していたそうだ。

それも相まってか気付いた時にはこんな血を平気で見るような世界でも当たり前前に過ごせるようになってた。

それを両親や理心流の者は喜び、周りは避けていった。
だが、それでも俺は良いと思ったよ。この世界で華琳に会えたから。
いや、そう思えたのはこの世界に来て初めて出会ったのが華琳だったからなのかもしれない。

だが、そんな事はどうでもいい。俺は誰かに認められたかったんだ
ろう、向こうで周りから避けられ続けてきた俺にとって華琳の俺を
必要とする言葉は凄く嬉しかった。

あの時はクールな人を必死に装っていたけどな。はは。」

俺は何も言えないでいた。

普段から底抜けに優しくて敵になるかもしれないような者にも優しいこの宮京理という一人の人間の闇。

俺は、京理を何でもできるスーパーヒーローのような奴と勘違いしていた。

それは大きな間違いだった。京理を苦しめていたのはこと元の世界の価値観の相違。

そして、尚も話を続ける。

「俺はこの世界に慣れていき、そして月に出会った。

最初、俺は場合によっては月を殺すつもりだった。

だけど俺が出会った董卓は正史に残る悪逆非道とは程遠い存在だったよ。

董卓の真名、月、言い得て妙なのかもしれない。人の届く事の出来ない消え入りそうな儚き光。

長安の人も優しくかったし、みんなとはすぐに仲良くなれた。

月が率先して事を取り持ってくれたおかげなんだろう。

俺はその時点で詠から霊帝崩御の話を聞いていた。

では俺が今からすべき事は？そんな事を考えている時に黄巾党本隊

が見つかるという情報が入った。

それで俺は遠征を行って後はお前の知ってる通りその隙を突かれて月は死に、張遼は行方不明。

笑えるだろ？最初に華琳に仕えると言っていながら会ってみると俺は月にも惹かれていたんだ。

そして、その月を守る事も出来ず今はこうしてもういない月の事を思っ
て華琳のいる反董卓連合と戦おうとしているんだ。

そして、あの時――――

『こんな風景がいつまでも大陸中で続くと良いですね。

京理さん、これからもここにいて私達の事を支えてくれませんか？

そして、いずれは大陸の王になって欲しいです。』

月は俺を利用してとかそういう野心なんかじゃない、心の底から国を憂いていた。

でも、俺は迷ったよ。大陸の王になる事、それは華琳も倒すことになるのだから。

そして

『ごめん、俺は天下の上に立つんじゃない、それを支える者になりたい。』

俺は断った。

なのに、なのに俺はそれでもなおこの戦いを、関係無い人達を巻き込んでまでやろうとしてる！

結局は華琳と月の間で迷ってしまった俺のせい。

ここでこうやって話している事さえも自己満足！

こう言えばあの時の事を許されるとでも俺は思っているんだ！

・・・滑稽だろう、一刀？そして、こんな事をお前に話して楽になろうとしている自分に腹が立つんだ。

殺した相手以上に自分が憎いんだよ・・・。」

俺はどうすればいい・・・。

京理が抱えるそれは明らかに一人一人のレベルを超えている。

俺は無力だ、京理の苦しみを分かっているけどどうすればいいか分からない。

このままでは京理が壊れてしまう、それだけは絶対にさせない。

京理を失う事、それがこの世界においてどれほどの損失になるか分からない。

いや、利益損失云々の話に関係なく一人の友達として困っている友達を助けてあげたい。

みんなが京理の周りに集まる理由が分かった気がした。

誰よりも人の痛みを知り、誰よりも他人に優しさを与える事のできる存在。

境遇、この世界へ来た事、華琳との出会い、董卓の死、全ての事象が重なって起きた偶然という名の必然。

おそらく、その月という子も優しい子だったんだろうな。

少し不謹慎かもしれないが、この話を京理からしてくれて凄く嬉しいと思っている自分がいる。

「もう、嫌だよ。なんで、ぐっ、なんでなんだよ。

月を守ることも叶わず、今また華琳に誓った約束も破ろうとしているんだ。」

感極まったのか、俺の前で我慢もせずに泣き続ける京理の姿は子供の頃のそれと同じだった。

おそらく今日までずっと他の事を考えなければいけなかったからこの事を考えなくて済んだんだろう。
一度劉備との時も涙を見せていたが、それよりも更に深いものだった。

「Amazing grace how sweet the sound
That saved a wretch like me.
I once was lost but now am found,
Was blind but now I see.」

「それ・・・は。」

「まあ、有名だよな。意味は大学生なら分かるだろう？」

中学の時に歌ったAmazing graceという歌だ。
こっちの世界に来てまさか歌う事になるとは思わなかったが、今の京理には丁度良い歌だった。

その後も京理は気が済むまで沢山泣いた。

俺がこちらに來た理由、それは京理だったのかもしれないな。

空は既に暗くなり、見上げるとそこには月が見守るように光っていた。

京理の過去、贖罪（後書き）

小説に選択肢があってもいいと思ったのは自分だけじゃないはず！

というかこの小説、ジャンルは何になるんでしょうか

反計（前書き）

ども、らんちゅです。

この小説、人気が無いのかすごく人気が無いのか分からなくなって
きました

反計

京理 side

「はあはあ。」

「俺の勝ちだね。」

「まだまだ、勝てそうにありませんね。」

「主は一体どうやってそのような力を手に入れてきたのですかな？」

あの日から夜が明けて翌日、不思議と心は軽い。

一度溜まっていた感情を吐き出したからだろうか？分からない。

今日も愛紗達と、ほぼ日課になりかけている修練を行っていた。

分かった事が莉羅が周りと比べても思った以上に強い事。

お世辞にも武においてはあまり強くなかった莉羅だが今では星や愛紗と戦ってもたまに勝つ事が有る位だ。

「京理お兄ちゃん、今度は鈴々とやるのだ！」

「いや、もう時間だよ。」

場所は変わって玉座の間

「へ！？馬騰さんの名代として馬超さんが？」

一刀が間拔けな声を出す。

「作戦は本当に大丈夫なのか？」

既に将達にも作戦は事前に話している。月に長く従ってきた華雄、特に負けられない気持ちが強いのだろう。

「大丈夫です、曹操さんが気付くはずですから。そしてそれを逆手に取る。」

「その今回の作戦で重要になる間者は？」

「ここに。」

そういつて、莉羅が一人の女を連れてきた。
この世界の有名な武将全員に言える事だが、綺麗だな。ロシア人に近い顔立ちをしている。

「名は？」

「杜預と申します。」

「!!!!」

「京理様、どうされましたか？」

なんで既に華琳の元に杜預がいるかなんてのはこの際もうどうでもいい。

だが、杜預という人物は間者で使っていいようなレベルの人物では

ない。それは華琳も分かっているはず。
という事は、これは俺たちに対しての・・・警告？
つまり

「・・・華琳は俺達の策に気付いている。」

先手を仕掛けられた。俺たちは逆に策の一つを封じられた。

「「「「「！！！！？？？？」」」」」

「どういう事なのじゃ？」

「さあ、それは私にも分かりませんが。」

「ど、どういう事だそれは！？」

冥琳が物凄い形相で聞いてくる

「俺も分からない。だが、気付いているというのは事実だ。」

「それをなんで京理が分かるのだ？」

・・・流石に名だたる軍師様達を欺ける自信は残念ながら俺には無
さそうだ。

「俺が、一刀と同じ天の御使いであるから・・・だ。」

「な！？それはどういう？」

「杜預、お前は華琳に何を言われているんだ？お前をここに送り込

んだ理由はなんだ？」

驚く皆に意を介さずに杜預という女に話しかける。

「我が主、華琳様より京理様に書状があります。」

そういつて受け取り中を見る。

京理、元氣かしら？

この手紙を見ている、という事は私の意図に気付いた・・・ということね。

貴方が私の元に来ない事は薄々感づいていたわ。

でもね、それで私が諦めると思う？

袁術を連合側から引き抜き、こちらの弱体化を同時に狙うのは戦術として定石ではあるわ。

でも、そこに袁術の客将である孫策を絡ませたの反間の計を狙ったのは見事としか言えないわね。

そしてそれを気付かれるのも計算の内だったのでしょう？

それを利用して、私を発信源に反董卓連合全体にその情報を。

そうして自分達で決めたと思い込んでいる選択肢はその実、京理達が用意した脚本。

甘かったわね、そんな回りくどい事をせずに真っ向から挑んできなさい！

私はそんな貴方を力でねじ伏せ私の前に跪かせてみせる。

甘かった。心のどこかで、冥琳達もOKを出して試行錯誤したこの策なら大丈夫だと思っていた。
だが、それは甘すぎた。

華琳はあの曹孟徳、超世の傑とまで言われる存在。

「ああ、いいさ。・・・小細工は無しだ。」

「は？」

「杜預、お前は華琳の元へ帰れ。」

「「「「な!?!」」」」

「それは京理の独断で決める事ではないぞ？」

「莉羅、頼む。」

「はっ。」

「後賢明な判断ですね。」

そういつて杜預は莉羅と共に去っていく。
あの冷静さ、胆力。やはり本物だったか……。

「どういう事が説明してもらえませんか？」

皆疑心的目でこちらを向いていた。

やられた。あんな内容ではあったがこれは……離間の計、か。

俺がいずれ華琳の元に付こうとしていたのは皆知っていた。

なら、この戦いで裏切らない保証があるのか？軍師はまず最初にそれを見極めようとするはず。

華琳はそれを予測して開戦直前のこのタイミングに杜預を派遣したのか……。

俺に杜預を捕虜にする選択肢はなかった。

今このまま杜預を置いたら俺は味方から疑われ続けながら戦う事になるからだ。

だが、どちらにしてもこれは華琳の利になる。

正直に話す……か。

反計（後書き）

次、いよいよ開戦。
戦闘描写は苦手です。

開戦、乱世天翔（前書き）

どんどんこの小説独り歩きをしています。

開戦、乱世天翔

京理 side

眼前に広がるのは20万近くの大軍。

「いよいよ、ですね。」

「ああ。」

いよいよこの時が来た。

華琳、お前の言う通り小細工無しの本勝負で行ってやるよ。そして勝って見せる。

それがどんな結末を生むかは分からない、だが俺にも負けられない理由があるし長安の人達の命も背負っている。

「安心してください、京理様。以前にも言いましたが兵力差を覆し戦局を有利に展開させるのが私達の役目。」

反董卓連合には兵はあってもそれを動かす頭は少ないのですから。」

そうだ、冷静に考えても兵力で負けていてもこちらはそれを補って余りある程の人材に溢れている。

それにあの天下の諸葛孔明、朱里が言っているのだ。説得力がある。だが、

「戦は生き物だ、油断はしないようにね。」

「油断、ね。京理の方が気を付けた方が良いんじゃないかしら？それより貴方は裏切らない保証があるのかしら？」

皮肉を込めるどころかストレートで孫権が言ってくる。やはり昨日の事が皆の心境にも影響を与えているようだ。

まあ、それが華琳の狙いなんだろう。

俺達が考えた反間の計を逆手にとって離間の計をやってくるなんてな、大した神算鬼謀だよ。

天の御使いである事をみんなに伏せていたのはその方が後に他の諸侯に対してアドバンテージになると思ったからだ。

後に、というのはもちろん華琳に仕えた時。

つまり反董卓連合に華琳がいると知っていながらその事を打ち明けなかったというのはみんなに対しての裏切り行為、今更気付いたよ。今の状況は身から出た錆、というやつなのかもしれない。

「江東の小霸王の妹は随分と小さい器をお持ちのようだな？」
星？

「何!？」

「主が天の御使いだったこと、確かに驚きはしたがそれがどうした？」

「!?!? な、何を言ってるの貴方は? それがどれだけ大事か分かるでしょう!?!?」

「悪逆非道な人間に半国の器という通り名が付くとお思いか? 一人の少女の為に仕えるべき主に対してなぜ反乱紛いの事をしようとしているのか? 貴殿は主の本質をまるで分かっていない!」

「っ!」

珍しく、あの星が怒っている。俺が見る限りじゃ初めてかもしれない。

「孫権、別に俺の事を信用しなくていい。だが、他の者だけは信じろ。」

「そうしないと勝てないよ。」

「い、言われないでも分かっているわ！」

「そうか、それならいいよ。そろそろ、兵の出陣といこうか。」

長安の門を見る。

月、長安は絶対俺が守るからな。

そして、すぐ後ろにずらりと並ぶ兵の方を向く。

「
・
・
・
行くぞ。」

「うおおおおおあー！！！！！！！！」

雪蓮
S i d e

「なっ!？」

5文字にも満たない言葉で軍に関係無く異常なほど兵の士気が高くなっていく。

勇者だの、猛者だの。そんな飾り言葉等は使わない。京理を兵全員

が理解していないとこんな事が起きるはずが無い。
起こるとしたらそれは

「霸王の器……。」

京理の姿に亡き母の姿を見た。

見た目も性格も違うけどどこことなく近い物が感じられる。

私が最初に何かあると感じたのは呂布にすら勝る武や軍師に匹敵する知では無く、この事だったのかもしれないわね。

だが、母と違うのはこの男が目指すのが王や人の上に立つ事では無いという事。

優しさと痛みを知る京理であるが故なのかしらね、王としての器がある事に本人は気付いてない。

蓮華も同じ事を感じたんでしょね。さっきの言葉も明らかに嫉妬から出ている言葉だった。

王としての器を見せながら下に付こうとする京理の考えが理解できない、ってところかしらね。

私が袁術の元で客将をやっているからその境遇を重ねてしまっているのかもしれない。

「あの男、何か堅殿と似ておられるな。」

「祭もそう思う？」

「これ程の覇気、堅殿がいなくなった今二度と感じる事の出来ない感覚だと思っておったがあの小僧、一体……。天の御使いだっただけでは片付けられませぬぞ。」

「蓮華もあれ位になると良いけどね。」

愛紗 side

京理様の一声で兵が猛り狂う程の雄叫びをあげていた。

自分や他の者も気付かないうちに周りに負けじと声を出していた。もう、京理様を何をどう形容すればいいか分からなくなってくる。

將軍？王？皇帝？どれも違う。

では、昨日話に出ていた天の御使い？それもまた違う。

言うなれば天そのもの。こんな事を考えていながらそれを過大評価とは思えない私はどこかおかしいのだろうか？

兵を見れば分かる、皆京理様の役に立ちたいという気持ちが全軍に溢れ返っている。

「桃香様、京理様はやはり凄いお方です。」

京理が天の御使いだった？それでこの人が今までやってきた事の価値が下がるわけじゃ無い。

最初は全員戸惑ったし私も困惑した。

だが、全ては曹操殿の為にやってきた事。

そう大事に思われている曹操殿を羨ましく思ってしまった。

そして、そんな人と戦う事になっても董卓殿の潔白を証明しようとするその姿を見て誰が悪口等を言えようか。

そんな京理様を主に据える事が出来た事が私の人生の最大の幸せなのかもしれない。

「うん、京理様は本当に凄い人だね。私の勘のおかげなんだからね！」

えっ へんと胸を張る桃香様。

「ええ、そうですね。」

これから戦だというのに周りの兵も皆明るい。

袁紹 side

「さあ、我が名門袁家が誇る精強な皆さん行きますわよ！」

このわたくしが総大将だというのに軍議はずっとびりつけつの華琳さんに仕切られっぱなしでした。

名門であるこのわたくしが華琳さんより上という事を諸侯の皆さん方に見せつけてやりますわ。

「さあ、斗詩さん、猪々子さん！ やっておしまいなさい！ 名門袁家の力をあのへんちくりんの宮京理とかいう奴と美羽さんに分からせてあげるのですよ！」

「いや、へんちくりんって。姫会ったこと無いでしょ・・・それに界限じゃ有名ですよ」

「それに美羽さんも同じ袁家じゃないですか・・・。」

「そんな事はどうでもいいですわ！ とりあえずやっつけてしまいなさい！」

「そんな簡単に行くわけ無いでしょ？何の為に連合組んでるんですか。」

「袁家の力を見せつけるためですわ。」

「即答!？」

「大丈夫かなあ。」

華琳さん、見ておっしやい。貴方より絶対に戦功をあげてみせますわ!

華琳 side

杜預が帰還してきた。

「どうだった？」

「全てにおいて卓越した才を持った覇王の器をもつ者、と感じました。」

流石だ。私は京理と初めて会った時から王としての器を持っていると思っていたが杜預や他の者達までもがそう思うのならそういう事なのでしょうね。

ふふ、これから始まる戦が楽しみだわ。

連合の者達には孫策と袁術の話はしてあるから余程馬鹿で無い限りは大丈夫でしょう。

「稟、風。貴方達は私のもの。感情に流されて判断を間違えないように。」

「はっ。」

「分かりました。」

さて、向こうも騒いでいる事だし兵の士気をあげに行きましようか。天幕を出て綺麗に整列している兵達の前に立つ。

「兵よ、曹義の天下はこれより始まる！敵を殺し尽くせ！そして私の前に敵将の御首級を差し出せ！

天が我らに敵するならばその天すら喰らってみせよ！

我が覇道、誰にも阻む事は許さず！」

「うおおおおおおおー！！！」

ああ、そういえば伝え忘れていたわ。

京理、私は貴方が大嫌いなもの。

開戦、乱世天翔（後書き）

この小説のヒロインは月と華琳、異論は（r
y

V S反董卓連合〱巻〱（前書き）

ちかれたー

V S 反董卓連合（巻）

京理 side

脳漿が飛び散っている。

血が吹き出ている。

目玉が飛び出している。

腕もげている。

それでも戦おうとしている者がいる。

それをさせているのが俺。

戦での迷いは死を意味する。分かっているけどそんなことを考えてしまふ。

俺は正しかったのかと、自分の私欲で兵を『使っている』んじゃないかと。

「莉羅、俺はこの外史の未来においてどんな者として名を残すことになるんだろうな。」

「分かりません。それにそんな事は私にとってどうでもいい事です。私が敬愛してやまないのは貴方と言う一人の人間であって、後世の者達の視点での意見ではありません。」

「そっか、そうだな。」

兵を死なせている事を割り切れた訳ではないが今やるべき事は分かった。

「春灯。」

愛馬の名を呼ぶと、嘶きながらやってきた。その姿はどこか気品すら感じられる。

「行こうか。」

「「「「はっ！」「」「」」

京理隊の兵約1000と共に出る。莉羅と星がその副長。

一騎当千の将が副長を務める隊だがその実、隊員の実力は並みの一般兵程度である。

「宮京理！その頸もらいうける！！！」

周りの敵兵が気付いて遠くから群がって来た。

が、

「ぎゃあああああ！！！」

その後に聞こえるは敵の断末魔のみ。

・・・隊員達は並みの一般兵程度と言ったがそれは個々で戦う場合。この隊は伍等の集団で戦う時こそ真価を発揮する。

だからこそ、俺たちは遊軍という位置なのだ。

張遼の代わりとまでは行かないが優秀な将を置く事でその差をカバーするくらいは出来るだろう。

京理隊の者は他の所の兵に比べて武は無いが精神力が桁外れに高い。隊員の多くが月の親衛隊だった者だ……。つまり死兵。

そして、その恐ろしさを俺は知っている。

こちらの連合は中軍にいる詠の号令によってそれぞれ最低限の助力、協力のみ行う事になっている。

そして、その前方には中央、左、右にそれぞれ袁術軍、孫策軍、劉備軍が配置している。

付け焼刃程度でもちよつとした連携なら出来るのは待ちであったこちらの数少ない有利な点かもしれない。

陣は軍師にまかせつきりでいざ開戦となったら俺には何がどうなっているか分からないがな。

「かゆうまさん、そのまま前線を維持してくださいねー。」

「華雄だ！」

「弓兵の皆さんは援護射撃の準備をしてくださいー。」

「うははー、七乃もつとやるのじゃあー！」

相手はどこかしらんが七乃は美羽に関わる事になってくるとかなり強い。

それに華雄を七乃に任せたのも正解だった。猪のあいつはあれ位緩い方が丁度いい。

孫権とは違う意味で気負いすぎているからな。

ここは安心して良さそうだ。

お次は

「ぎゃああ!」

「や、やめてくれー!」

「降参するから命だけは!」

「あはははは!逃げないの。・・・順番に殺してあげるから、ね!」

「・・・。」

何も見て無いし聞こえない。

残るは劉備達だが・・・。

「っ!?! 莉羅、星行くぞ!」

「「はっ!」」

かなり押されてる、まずいな。

「そんな!次は弓兵が1番前?それにあの武器はいっ「ヒュン!」・
・へ?」

何かが朱里の頬をかすって後ろに居た兵が頭から血を噴き出し倒れた。

「なっ!?!」

「全員、撤退しろ!」

「あわ!?!京理様!?!それに星さんに莉羅さんも!」

「きよ、京理!?!お前どうしてここに!?!」

「そんな事はどうでもいい。しかし、あれは・・・。」

「お前が仕えたい人物様は何でも有りなのか?どうやってあんなもんを・・・。」

そう、あれはこの時代に無いはずの物。

「なんで、なんで銃が有るんだ・・・?」

それも流石に火打ち式とはいえ実用性の高いレベルまで完成されているようだ。

後退しながらも兵が打ち抜かれていく。

「く、このまま前線を差し込まれたらそのまま他の軍の裏まで回られる!」

京理隊、行くぞ!」

「おおー!!!」

「な?無茶です!それに京理様は総大将なんですよ!?!」

「どの前線も欠けないようにするのが第一だよ。」

こんな問答で時間を掛けてる間に対策を考えろ！
幸いあの銃はまだ量産できていないせいか1度撃ったら弾を込める
時間に隙がある。

それを利用するんだ！・・・天下の伏龍と鳳雛なら出来るだろう？」

「「ぎよ、御意！」」

周りの折り合いを見て前線を維持しながら銃の対策を直ぐに考える、
我ながら無茶に近いと分かっている。
だが。それでもやって貰うしかない。

稟 side

やはり、貴方は遊軍でしたか。

劉備の前線を若干ではあるが崩すことに成功しました。

誰も見た事のない兵器をいきなり使う事で意表を突く事が出来た。

その時点でこちらの策は成功。

『銃』は貴方を誘い出すためだけの物ですから。

『稟と風は華琳の元へ――――』

あの時、私は後悔していた。

こんな事になるなら、貴方と戦う事になるなら無理にでも付いてい
くべきだったと。

京理様は私を思って華琳様に会わせて下さったのかもしれませんが
私にとっては良くない方にしか考えられませんでした。

京理様の優しさはあの時は苦痛でしか無かった。

ですが、

『私がこの反董卓連合に参加するのは宮京理を手に入れる為よ。その為にもまずはこの戦、勝たなければならない。』

私に力を貸しなさい、稟。』

反董卓連合に参加する理由を聞いた時の華琳様の返答。

その時、私の考えはまとまった。

京理様、私は貴方ともっと一緒に居たい。また一緒にお喋りして、政務をして、昼寝してる風を起こして、もっともっと色んな事をしたい。
だから、

「私の智謀の全てを以て貴方を全力で倒す。」

V S 反董卓連合（巻）（後書き）

戦闘シーン、ここまで手強いとは思わなんだ。

年内までにお気に入りに500件いきますように

V S 反董卓連合 弐 (前書き)

更新が遅かった？

シュタインズゲートのアニメが悪い！

V S 反董卓連合（式）

京理 s i d e

さてどうするか。

自信満々に朱里達を後退させたのはいいが銃相手にどう時間稼げばいいんだ？

「これじゃ意味がなかったな、はは。」

「主、それでも無さそうだが？」

「へ？」

見ると敵兵達が二手に分かれてその間から見た事のある傷だらけの少女が。

片方の隊は朱里達を追っていった。

正直ホッとしている、流石にあの兵力差じゃ銃云々の前に勝てないからね。

「お久しぶりです、京理様」

「ああ、久しぶりだな。」

「まさか、こんな形で再会するなんて。」

「俺も残念だが戦場で会った以上・・・」

「敵だな（ですな）。」

直後、回し蹴りを顔面掛けて放ってきた。

「くそ！話し合う気は？」

「ありません！」

俺は尻にまず負ける事は無い。

だが、この違和感はなんだ？おかしい・・・。

この違和感は・・・なんだ？

「考え事ですか？」

「!?!?くっ！」

目の前まで来ていた気弾を避けると既に尻は距離を詰めていた。

「はああああああ！」

蹴りを織り交ぜながらのジャブのような連続攻撃、それを剣を出さずに両の手でいなす。

尻とこうやっている間は銃兵も撃ってくる事は無いだろうが、二手に分かれてきた以上朱里達にも討たないとも限らない。軍を分断させる事が出来ただけでも良しとしたところだが前にも言った通り相手の兵力の方が上である以上一軍の壊滅は全軍の壊滅に等しい。では、俺が今すべきことは？

劉備達の一時撤退をフォローしながら後退する事

勝つ方法が思い浮かばない以上それしかない。

幸い他の2軍は若干ではあるが押している。相手も連携が取れない以上、劉備軍だけで華琳は止めなければならぬ。

そして、長期戦になれば遠征で疲れが出る。

長安に直接攻め込まれる事が無ければ長引けば長引くほどこちらが有利になっていく訳だ。

当然華琳もそれに気付いているから最初から余力を隠さず全力で来る。

その証拠に銃をここぞという時に使わず最初から使ってきている。

！？おかしいと思ったのは・・・これか。全力で早期決着を目指しているというのに多面展開を広げる奴はいない。

そう、伏兵が居ない限りはな。つまり既に二軍ではなく三軍に分けてあるという事か。

それならばいくら銃を有しているとはいえ数の少ない軍で劉備を追う理由にも納得がいくし主戦力である秋蘭が見当たらないのも分かる。

つまり、

「風、お前の目的は時間稼ぎか。」

「!?!」

嘘が付けない子だな。

武器を使った舞のような攻守を繰り返しながら話すと風は在り来たりな驚き方をした。

「既に狙われているのか挟撃を狙っているのかは分からないけど、とどのつまりこの隊を倒す事が出来ればそのどちらも防げる。」

「そんな事が可能だと思いますか？」

相手は精兵約7000人、こちらの2倍以上いる。
確かに不利に見えるかもしれないが、

「こうすればいい。」

そう言って、自分が出し得る限界のスピードをもって風の背後に回りそのまま羽交い絞めにする

「な！なあ！？離して下さい！・・・うう。」

「「楽進様！貴様、楽進様を離せ！！！」」

「やーよ。」

悪く言えば人質をとる。更に悪く言えば変態。良く言えば？・・・。
だが、確かに変態に見えるかもしれないがこれは実に有効だ。
こちらの元に風がいる以上少なくともこの軍は攻撃できなくなる。
風が時間稼ぎをしようとしている事も分かっているがそもそもこの
軍が動けない以上挟撃は不可能になる。
そして、その間に朱里達が銃の対策を立ててくれる事を信じるか。
風は最初こそ暴れていたものの直ぐにおとなしくなる。

「少し、話をしようか。」

「へ？あ、はい。」

本当はダメなんだろうが素が出てしまっていた。・・・かわいい。
その後、他愛のない話を沢山した。

あくまで後ろから風に覆いかぶさって抱きついている状態のまま
だが。

その後、莉羅と星に袋叩きにあったのは余談である。

V S反董卓連合〱式〱（後書き）

京理逝ってしまえ！

V S反董卓連合〱参〱（前書き）

難しくない話を難しく見せてる

そんな気がします

V S 反董卓連合へ参る

秋蘭 side

「むう、風が人質に取られたか。」

兵から報告が入る。

「流石京理様やなあ。誘いこめたんは良いんやけどあの強さと頭の良さは異常やろ。」

「感心してる場合じゃないぞ、真桜。」

「秋蘭様、どうでしょうか？」

流琉が聞いてくる。この少女は最近仲間になって、季衣と共に華琳様の親衛隊を務めている。

「仕方ない。作戦は諦めて風を救出に向かうぞ。」

「「はっ！」」

流石に作戦通りとは行かなかったか。敵になると相当に厄介だな、京理め。

京理 side

どどどどどっ!!!

楽進とイチャイチャ、もといお話をしていると想像通り脇から騎兵主体の伏兵が出てきた。

「久しぶりだな、京理。」

「秋蘭、伏兵の割には随分と派手な登場じゃないか？」

「公衆の面前で部下が痴態を晒されているんだ、助けに行くのが『義』だろう。」

「・・・そりゃそうか。」

まるで俺達には義が無いと言ってるみたいだな。

「秋蘭様、申し訳ございません・・・。」

「気にするな、」

「で、用件は？」

「今言った通り、風を離してもらおうか。」

「条件がある。」

「だろうな。」

「俺達を見逃してくれないか？」

「それだけか？」

「ああ。それだけだ。出来ればゆっくりお話でもしてたいんだが？」

「ふふ、お断りさせてもらおう。」

「さいですか。」

凧はあまり知ってる事は少なかったが、秋蘭ならと思ったが流石に無理か……。

劉備達への攻撃も止めてもらいたい所だが逆にそれを利用されかねない、か。

まあ、朱里達なら大丈夫だろう。

「じゃあ、はい。」

そういつて星を促して凧を開放する。

「……随分と簡単に解放したな？」

「ふふ、嘘つきは霸王にはなれないんだぜ？」

麗羽の所から持ってきた物見櫓から戦場を見降ろす。
色々褒めてやったら簡単に渡してくれたわ。

「華琳様。」

桂花より報告を受ける。

京理が遊軍として出現。劉備軍と我が軍の間に入り風が人質に。
伏兵で待機していた秋蘭も加わり戦線が膠着したが風を開放する代
わりに戦闘を停止するという事で落ち着いたようだ。
後は周りを見る限り押されている2軍が見える。

「はぁ、押しているのは我が軍だけという事ね。」

孫策軍にはどうせ勝てないでしょうからただ来ているだけの奴らを
当て馬にした。

結果も予想通りになりそうね。

けれど、袁紹が遅れをとっているのはまずい。

あそこには馬超と公孫サンもいるからそうそう負ける事は無いと思
っていたけれど・・・張勳。

優秀だとは思っていたけどまさかここまでとはね。正直計算外だわ。
優秀な軍師がいて精強な兵がいても、それを率いて実行する事が出
来る将がいなのが欠点であったのを華雄が加わる事でカバーされ
ている。

猪突猛進とは聞いていたけど良く言えば突破力が有るという事。
それにどうやってかは分からないけど上手く使いこなしているよう
ね。

「華琳様、確かに袁紹が負けているのは予想外かもしれませんが所
詮いくら兵達が優秀だろうとそれを率いる主が袁紹ではその実力を

十分に発揮する事など不可能です。」

「ふふ、そうね。それに、」

おそらく我が軍で、いや大陸で最も優れた軍略家の一人である稟の
神算鬼謀を全て見抜く事は不可能でしょうね。

そして行うは京理を封じ込めるための策。

そう、優秀すぎる者だからこそ嵌まってしまう罠。

最初に聞いた時は驚いたけれどね。

そもそも、この戦いの全てを考えたのが稟なのだから。

V S反董卓連合（参）（後書き）

何かに気付いてしまった方、そこは何も言わないのが大人の対応（
ry

V S 反董卓連合（四）（前書き）

5万ユニット達成！

V S 反董卓連合（四）

京理 side

初日の戦は日が沈む事で終わった。

結果は上々、と言ったところか。

だが、

「いや、劉備達は苦戦したみたいだけど全体的に見たら上々ね。」

「わらわがおるのじゃから当たり前じゃ。」

・・・キナ臭い。

「わ、何もしてないのに自信満々な顔。美羽様かっこいいです。」

「そうじゃろ？そうじゃろ？もっと褒めてたもー！」

何かある。そうなんだろう、華琳？

「確かに全体的には上手く戦場を支配出来ていたからこの調子でお願いするわね。」

ボクは絶対に負けるわけにはいかないんだから。月の本当の姿証明するためにも。」

「うん、そうですね。私達も負けてばかりは悔しいですし。」

そうでなければ、

見渡しは良い方と言えるこの平地で伏兵を用意したのはなぜ？

そして、それをいくら風が人質になったからと言って直ぐにばらしたのはなぜ？

これ以降、伏兵は今まで以上に警戒されて使えなくなる事を考慮しても風の方が大切だった？

風を解放する際に秋蘭が話を長引かせたりせずにあっさり条件を呑んだのはなぜ？

最後に、主力である『春蘭達』が見当たらないのはなぜ？

なぜ？何故？ナゼ？n a z e？

・・・何も考えるなつてのは無理な話なんじゃないか？華琳。

「京理様。」

「ん？」

考え事をしていると朱里と雛里が目の前に来ていた。

相変わらず小さいなあ。そりゃ、直ぐに背が伸びる訳じゃないけど。

「京理様、お話が有ります。」

「なんだ？」

「あの銃という兵器の対策ですが私達で考えました。」

流石天才軍師

「聞かせて。」

「確認なんです。銃は火薬という火で発火する物を使用している、間違いないでしょうか？」

「ああ、間違いないよ。もしかして、水をぶっかけるとか？」

もしそうなら生活水等も余裕を以て考えなければならないが。しかし、見る所は見ているのは軍師の性なんだろうか。既にある程度だが銃の構造を理解している。

「いえ、水ではなく『火を掛ける』のです。」

「!?!?・・・成る程ね。」

つまり、銃兵を何とかするのではなくその元、火薬を燃やして爆発させてしまえば良い。

そうすれば同時に敵にダメージを与える事が出来る。

この時代、本来火薬は存在するはずのない物。

では、火薬の扱いを心得ている者はいるのか？当然答えは否である。ということはまとめてか分配させてか分からないが銃兵の近くに用意されている可能性が非常に高い。

こちらは火矢をもって相手の一部隊を壊滅させる事が出来る。なるほど、利に適っている。

火薬という存在を最初から知っていたら発想できる者もいるかもしれない。

だが、彼女達は火薬が火で発火するという性質を持っている事すら知らなかったのだ。

俺から聞いたとはいえ無から1を考えるのがどれほど凄い事か。

発明王として有名なエジソン。

彼はいくつもの発見、発明をしてきたが当然発明という以上それは今までに無く、新規に想像し創造するという事。

その時、その時点では当たり前だと思われる事象がそれによってその根底を覆される。

それは凄く価値が有る事。それは彼の人生が証明している。

今回の場合、普通の人間であれば盾を使うという受け身の考えをするか最初に目の付く銃自体を何とかしようとする。

だが、彼女達は銃ではなく火薬に目を付けた。別視点からの考え、それこそが発明に必要とされる物。

1%云々という話も聞くがそれはこれと同意なのだろう。

今ならば当たり前、と考えられる事でもこの時代では考えられない物なのだ。

多少、誇大評価であるかもしれないが朱里と雛里の考え方はそれ程凄いものだと思っっている。

そもそも諸葛亮とその嫁、黄月英は発明夫婦として知られている。エジソンを引き合いに出したのもあながち間違いではないのかもしれないな。

「京理様？」

「ああ、ごめんね。また考え事をしていたよ。」

「もしかして、曹操軍の動きですか？」

「雛里達も気付いてたのか？」

「はい、後退しながらやりとりを見ていましたが多少引っ掛かる所がって朱里ちゃんとも話していたんです。」

「袁紹さんであれば何も無いと言えるんですがあの曹操さんが、という事になると話は別です。」

「つまり？」

「「まだ何か策が有る。」」

V S反董卓連合（四）（後書き）

自分自身で策のハードルを上げてる気がするのは気のせいですね。

V S反董卓連合（伍）（前書き）

夏休みも終わりに近づくと忙しくなりますねー。

更新遅くなってごめんなさい。

V S 反董卓連合（伍）

一刀 side

「すげえ。」

曹操軍の兵が燃え盛っている。

結局朱里と雛里が考えた策が採用された。

血肉が焼ける音、臭い、とても気分が良くなる物ではない。

「ご主人様、大丈夫？」

「と、桃香は平気なのか？」

「平気では無いよ。人が死ぬ姿も出来ればもう見たくないしそんなよ。」

でも、私は会った事無いけど董卓さんは悪者じゃないってことはみんな分かっている事でしょ？

そんな冤罪の少女の無実を証明する、それは義だと思う。少なくとも私にとっては。

だから、反董卓連合ってものが組織されたのは許せない。

京理さんや詠ちゃん達からしたら董卓さんの事何も知らない癖にっと思うかもしれないけどそれでも私はみんなの力になりたいよ。

何も出来ないけどね。」

テヘッと自虐的に笑いながらも桃香の目には強い意思を秘めた優しさが窺える。

こないだまではロマンチスト気質で優しさの塊のような人物だった。純粹であるがゆえに人に流されやすく傍から見ると少し危なっかし

い感じもした。

「変わったな。」

「そお？だとしたら・・・」

京理のおかげ、だろうな。

宮 京理は一騎当千。宮 京理は神算鬼謀深謀遠慮。宮 京理は上に立つべき存在。

そんな事を言ってる奴をぶん殴ってやりたい。

京理だって、そんな聖人君子である前に一人の人間だ。

最近のみんなは依存しているように見える。

最初はいいつの周りばかり人が集まるのが羨ましく思った。

だけど、みんな自分本位。京理に頼れば何でも出来ると勘違いしている。

あの夜その場に居たからこんな気持ちになるんだろうか。

京理がそういった所を表に出さないのにそれを知っている俺と同じ考えを強要するのは無理強いなのかもしれない。

だけど、それでも、分かっても言いたくなる。

人は自分の弱さを曝け出すには勇気がいる。それは人の上に立つ人物であればある程。

だから、今でも少しあの時俺だけに話してくれて素直にうれしいと思えた。

それが単なるきまぐれか男だったからか天の御使いだったからかは分からない。

「それでも俺は嬉しかった。」

「へ?」

「あ、いや、何でも無い。」

「変なご主人様ー。」

京理 side

「どうやら今日も出だしはこっちが優位だな。」

桃香達の軍が銃兵を退けた事もあって昨日以上に優勢だ。

「曹操に関してはこのままでは終わらないと思いますが。」

「どうやらあちらは長期戦を想定しているようですな。流石袁家、と言いますか。」

潤沢な資金と言うのはあって困る物ではありませんかぬな。」

「確かに。というか連合全軍を養えるだけの兵糧って、一体どれだけ用意してるんだか・・・。」

「それ程までにこの戦を勝ちに来ているのでしょうか。女の嫉妬は怖

い物ですぞ？」

「怖いね。」

「嫉妬と言えば、誰かさんが夜這いに来なくて寂しがつている女がいるとか。」

不憫な女ですなあ。」

「ヘエ、ソウダネ。」

「京理様、馬鹿をやってないでそろそろ参りましょう。」

「ああ、そうだったな。星、莉羅。」

「「はっ！」」

「とりあえずこの戦、曹操軍には早々に退席してもらおう。」

「「・・・」」。

ああ、悲しいよ・・・ボク。

V S反董卓連合（伍）（後書き）

ヤラカシタ

反董卓連合編、まだまだ続いてしまっていますが今後の為に必要不可欠なのでご勘弁を

V S 反董卓連合（陸）（前書き）

あ、このサブタイの数字なんですが中国のだと環境依存の字になるので日本の物にしています。

V S 反董卓連合（陸）

雪蓮 side

「あー、暇ねー。」

「はあ、昨日私の言う事を無視して祭殿と存分に暴れただろう。」

今日は作戦まで私達は待機、ようするにお留守番らしい。

目の前で戦闘が繰り広げられてるのにそれに参加できないっていうのはつらいわね。

「大将が先陣を切って敵を血祭りに上げる、それが母様だった。私にはその江東の虎の血が流れているのよ？」

「そういえば策殿も冥琳も幼い頃から良く戦場に縄で縛り上げられて連れて行かれていた事があったの。」

「あれは地獄だったわね、普通親が年端もいらないか弱い少女にこんな事する？」

「でも、良い人だった。」

「そうね。その母様が目指した世界を目指す為に私達は一刻も早く袁術の客将と言う立場から抜け出さないといけない。」

「まあ、その目的もあって今回董卓側に付いた訳だけどその選択をできたあの時の自分を褒めてあげたいわね。」

「宮 京理。奴が天の御使いなのは分かったが、それが理由になるのかどうか。」

現に北郷一刀は能力で言えば並み以下だ。」

そう、簡単に言えば京理は欠点が無い。全てが優れている。

だからと言って器用貧乏でも無い。全てがそれを本職とする者の中でも上位に位置する。

「ん？京理が動き始めたようじゃな。」

ここからでも見て分かるように真っ直ぐ中央軍、袁術の方へ向かっていくのが分かる

「え？てことは・・・。」

「そういうことだ。」

「じゃあ、行くわよ！」

「「はっ！」」

「雪蓮。」

馬に跨る途中に冥琳が声を掛けてきた。

「何？」

「こちら側に付いたのは勘か？」

そんな事を聞いてくる。

・・・でも、なんででしょうね。
多分だけど、

「いいえ、違うわよ。強いて言うなら鳥が空を飛ぶ、魚が海を泳ぐ、
人が地を歩く、それと同じって事かな。」

「どういうことじゃ？」

「さーねー。」

董卓軍に付くというよりはあの男に付いて行ってみたいと思った。
これが本音。

同時に、こないだまでは江東の地を取り返すだけで良いって思ってた
んだけどそれじゃ満足できないみたい。

貴方のせいよ？京理。

「さて、」

七乃 side

「くしゅん。うう、何か寒気がするのじゃ。」

「大丈夫ですか？美羽様。誰かが噂してるんですかねー。」

「そうなのかえ？。そんな事より京理に会いたいのう、七乃。」

「はいはい、戦いが終われば直ぐ会えますから。」

「本当かの？」

「はい、早ければ早いほど。」

「ふむ、皆の者！麗羽姉様などやつつけてしまふのじゃー！」

「「「おおー！」」」

・・・最近私のお嬢様が随分と京理さんに懐いている気がします。そりゃ確かに滅多にいなそうな良い人だとは思いますが、美羽様の事となると話は別ですよ？

あ、でも私が美羽様のお母さんになって京理さんがお父さんになってももらえれば万事解決？

「のう、七乃？」

なんてね。

「はい、なんですか美羽様？」

「京理達の軍がこっちに向かってきておるようじゃが？」

どうやら京理さんが動き出したようですね。

「美羽様、時間です。華雄さんを一時呼び戻しましょう。」

「うむ、分かったのじゃ！」

「それと、号令をお願いしますねお嬢様。」

京理さんがこちらに向かってしていると知った時の美羽様の顔、これはさっきの事まじめに考えましようかねー。
私も嫌いじゃないですし。

雛理 side

「今回の作戦成功してよかったです。」

こちらの兵を減らさずに銃兵を上手く倒す事が出来ました

「そうだな。」

「でも、良くそんなこと考えついたな。」

「京理さんに」

京理さんが動いた。

私達の後方の位置から真っ直ぐ袁術軍に向かっていて。
ということは

「朱里ちゃん。」

「うん、雛理ちゃん。」

「桃香様、時間です。」

「!! うん、分かった。」

「・・・号令を、お願いします!」

京理 side

「星、莉羅それに月の親衛隊だったみんな。お前達はこの戦いが終わったなら何をしたい?」

「私は主とメンマがあればそれでいいですが?」

「俺はメンマと同格なのね・・・。」

「最高の褒め言葉ですぞ?」

「私も京理様がいればそれでいいです。」

「俺達は、何があっても京理様に付いてきますよ。最初で最後だった董卓様の夢を貴方なら叶えてくれるはずです。」

それに、董卓様もそれを望んでらっしゃるはずだから・・・。

俺達は、死ぬまで董卓様の親衛隊であり続けます。そして貴方を守

り続ける。」

親衛隊の心の声。分かるか？洛陽からは離れていて確かに田舎だったよ。

ただどな、これ程慕われていた主が他にあるのか？

王と民のあるべき姿、その完成型がそこにはあった。

そして、そんな奴らに董卓と同位と扱われて物凄く嬉しい。

そんな少女をあるうことか国賊扱い。

そんなことまでして得ようとする風評に意味はあるのか？

そして出来た国に価値はあるのか？

「おっと・・・時間だ。」

3方向から声が聞こえる。

「孫呉の兵達よ！我が軍一つになり敵を打ち破れ！」

「みんなわらわの為に戦うのじゃー！」

「平和で皆が笑顔を見せられる世界に、この大陸に私達の義を！」

「」「全軍、突撃ー！！！！！」

それなら、俺が平和な国を作る。

V S反董卓連合〜陸〜（後書き）

この小説にしてはちょっと長めです

やっぱ明るいお話の方が人気ありますね。

他の方の小説が人気あるのを見て少し羨ましいと思ってしまう

V S反董卓連合〱漆〱（前書き）

面白くなってきましたねー

V S 反董卓連合（漆）

京理 side

「……。」

「あ、あの京理さんもお茶しませんか？」

昼を過ぎた辺りだろうか、朱里達がアフタヌーンティーに誘ってきたが、

「ああ、ちょっと今はごめんね。」

そう言って朱里達の誘いを断る。

「……そうですか。」

シヨボンとする小動物達の後ろ姿を見ると心が痛んだがどうしてもそんな気分にならない。

反董卓連合との戦いから一ヶ月。俺達は蜀に居た。
長安には居る事が出来なくなったからだ。

そう、

正史と変わらず俺達董卓軍は負けた。

く遡る事一ヶ月く

二日目にして全軍を投入して勝負を決める。これは相手が遠征している以上特別得策ではないように見える。
だが、袁紹の財力を考えると話は別だ。

「どうやら相手は混乱しているようすな。」

「それはそうでしょう、こんな早い段階で全軍投入は兵法から考えると普通考えられませんから。」

「迅速に終わらせてくれ。それがこの作戦の鍵でもある。」

相手の両サイドは袁紹、公孫サン、馬超、曹操、中央がその他鮑信達の軍だ。

中央軍が弱いとは言わない。だが、色が多すぎた。

両サイドに比べて多くの軍が混在しているせいで統率を取りづらい。故に兵は強くてもそれを活かしかる軍の運用が出来ない。

そして、ここで受けであったこちらの利点、付け焼刃ではあるが他軍との連携という物が活かせる。

まして、劉備軍を除けば他は精鋭揃いだ。

多軍を相手取りながら様々な対応を必要としている訳じゃない。

あくまで一軍のみを狙うのだから連携にさほど苦勞する事は無いという事だ。

この作戦を行うに当たって迅速に終わらせなければいけない理由は両サイドが早めに動いてこちらを包囲する可能性があるからだ。

では、俺らがすべきことは？

それは

『早い段階での中央突破、そしてそこからの反董卓連合の二分化。』

華琳 s i d e

「ではないです。」

今この時にも董卓軍全軍が迫っている中稟が言う。

「どういことですかそれは？」

聞かされていなかった風が聞く。

「偽撃転殺の計です。」

「偽撃転殺の計？」

「はい、脆い場所を分かっているながらあえて別の場所を攻撃してそちらに主力を集中させてその隙にその脆い場所を叩くという策です。脆い場所、今回の反董卓連合に当てはめるとそれは中央軍。

京理様や伏龍や鳳雛、周瑜なら初日でこれに気付くでしょう。

兵力差で負けている、それにこちらの兵糧不足での撤退も考えられない以上相手がする事は？もちろん短期決戦。

ならもちろん脆い場所である中央軍を叩くべき。

ですが、彼らは絶対にしない。

それはそもそも中央軍に弱点を置き、あえて我が軍と袁紹達を両脇に配置してきたというのを警戒しての事です。

銃兵の初日の功績と今日の失態、それも短期決戦を誘い、足並みを崩したこちらに全軍が来るよう仕向ける為だけの物でした。

偽撃転殺の計に対してこれらを虚誘掩殺の計と言います。

銃兵の対策に火矢を用いるとは思いませんでしたがここで銃兵達が冗談でなく本気で混乱してくれた事がまた良かった。

そして最初に書いて頂いたのあの手紙、あれも京理様の策と心情を逆に利用したこちらの反間の計。

弱い中央軍、銃兵の失態、手紙での行動の制限、この3つの事象は京理様達の目的の一つに収束させるには充分の材料、というわけです。

そして、

この後は全て『華琳様の筋書き通り』に。」

・・・これを本当の天才と言うのでしょね。

私はこれから私が用意した策の為の下準備をするように言っただけ。まさか、ここまで相手を手玉に取れるほどの策をこんなに短時間で考えてくるなんてね。

この時点でああなたの負けは決まったわ、京理。

V S 反董卓連合（漆）（後書き）

まだ終わってませんが稟の策、どうでしたか？これは是非とも感想が欲しい所です。

V S反董卓連合（捌）（前書き）

見たい小説の更新が少なくなる↓なろうを見る機会が減る↓執筆頻度も落ちる

なんという悪循環

謎を残した状態ではありますが第一章はそろそろ終わりそうです。それとここからもう少しお話が難しくなりますのでご注意を。

9／18 13..45 訂正致しました

V S 反董卓連合（捌）

京理 side

剣道やフェンシング等の武道と人を殺す事に特化したはそれは全くの別物である。

いや、そもそも武技と言う定義自体がおかしいのかもしれない。

武技はルールが大前提のものだから。

今人を殺す事に特化したそれ、としたがそれは何も剣で斬る、槍で突く、弓で射るだけではない。

毒殺、絞殺、銃殺、撲殺、果ては社会的抹殺等他にもある。

それがどうした？

そう言われたら返す言葉は浮かばないし何故こんな事をふと思ったのかも分からない。

ただ、あるとしたら

「死ねやあー！」

「・・・っ！」

シュンシュ！

ザン！

この世界と俺が元居た世界の違い、価値観の違いから出てくる物なのかもしれない。

それは俺が天の御使いであるから？

・・・違う、最何か別な。

ずっとずっと感じていたこの違和感はなんなんだろうな。

っと、今は考え事してる場合じゃなかったな。

雪蓮、冥琳。お前達が一番つらい場所になるから気をつけてくれ。

「ふふ、ここからでは聞こえませぬぞ？」

どうやら思ってしまった事が言葉に出ていたらしい。

「じゃあ、その人。」

そう言って側に居た一人の兵に声を掛ける

「はっ！なんでしょうか？」

「孫策達に頑張れって伝えて貰える？」

「は？あ、はい！了解いたしました！」

俺達がしている事。月の弔い合戦

もつと言えばその月の主張を証明するための戦い。

『平和な世界を作る為に争いを起こす。』

その考えを是とする者もいれば否とする者もいる。

ではその争いは必ずしも必要だったのか。

正しかった、そう言って明日を担う未来の子供たちにも胸を張って

誇れる事なのか。
それは分らない。

「そんな話は未来の学者に任せなさい。」

ある少女がいつか放った言葉。

俺達は自分達がしている事を信じてそれを貫き生きている。
それこそが大事なのであって他の観点、ましてや未来の意見等私達にはまるで意味が無いという。

最初は凄く納得したが、何故だろう？

最近はそのがひどく傲慢で！我儘で！稚拙な考え方で・・・！

・・・そう思ってしまう。

平和の為に犠牲は付きもの。

ではその犠牲を無くす為に努力する事、それにもまた犠牲は付いて回るのだろうか？

社会主義、資本主義等、平和な世の中を作る為に考えられた政策。
だが、これもまた不完全。今から1800年以上後の現在ですら完成と言えるレベルには至っていない。

それは歴史が証明していて今を生きる俺達はその生き証人である。

どの主義にも言える欠点。

それは人間は一人一人意思がある事。自己主張があるのだ。

フルーツトマトは野菜？それとも果物？

答えはまだ出ていない。母親と小学生のお話に出てくるような事で

すら世論として統一した意識を持っていないのだ。

では大人でもそういったようなものはあるか？

その答えは、ある、だ。

では、誰かがそれらを決めてしまえばいいのでは？

裁判では近い事も行われているし良さそうに思われる。

だが、それも上手く行くはずはない。

裁判を始め、終わらせるにはかなりの日数と金が掛かる。

そして世界にどれだけの数のジレンマがあるか。

もし実行したとしてそれはいつ終わるのか？

その頃に革新的な考え方が出てくるかもしれない。

たらればの話を書けばそこまでなのだが、どうしてもifの考えを
してしまう。

何故そんな考えが浮かんでしまうのか。

そう、俺もまたその二人の少女の考えと自分の意思とに挟まれているのから。

一人は自分の信じた覇道を突き進み天下を掴み取らんとする者。

一人は苦しんでいる者を助ける、それが大陸の平和につながると信じ皆でそれを行おうとする者。

一人は他を認めていながら否定し、だが自分にもその解が分からな

いでいる者。

俺にはどれが答えであるかは分から無いし答えがそもそもあるのかも分からない。

「ふう。」

考え事している場合じゃないと言っておきながらまた考え事をしてしまう。

悪い癖、だな。

V S 反董卓連合（捌）（後書き）

最期の文、意味としては二人の主張を認めながら二つの似ているように違う意見に挟まれる事によって、二つともどこか違うのではないか？と考えるが「自分は正しい解を知っている」と言える訳でもない曖昧な状態って事と考えるともらえればokです。

どんどん京理が黒くなっていきますねー

V S 反董卓連合〜玖〜 (前書き)

色々な文章構成に挑戦中

V S 反董卓連合（玖）

京理 side

「華琳達は中央軍の後ろに隠れるように動いてきたか。」

「身代わりのように中央軍を盾にした、ということでしょうか？」

莉羅が聞いてくる。

「分からない。雛里はこのまま行っても問題ないと思うか？」

「相手はあの曹孟徳。この短時間の間にも対策を考えてくるかもしれない。」

「ふむ。」

「ですが、相手がこちらを上回る策を考えようとそれを軍全体に伝達しそれを的確に行動しなければなりません。」

それに追撃戦において利があるのは追う方。これを見逃す手はありません。

そのままの勢いで袁紹軍はともかく中央軍まで呑みこむことも可能でしょう。」

「ということは、狙うは」

「「曹操軍の迅速鎮圧及び中央軍への横撃」」

「詠はそれで大丈夫だと思うか？」

「今はそれが最良の策でしょうね。」

「よし、莉羅、他の二軍に伝達を頼む。」

「はっ！」

「雛里はこの軍の指揮を頼む。詠は全軍を見通して俺達の情報塔に。朱里は隣り合う軍同士との連携に尽力を注いでくれ。」

「「はい！（分かったわ。）」「」

「星、恋、愛紗、鈴々。」

いつの間にか気配が増えている事に気付きそのまま前を向きながら名前を呼ぶ。

「はっ。」

「・・・ん。」

「ここに。」

「なんなのだし？」

「これからドンパチの時間の始まりだ。」

華琳 side

「兵糧は最低限の分だけで良い！後は捨ておけ！」

「はっ！」

私が指揮しなければならないほどの人手不足、か。
だが、これも

「計画どおりですね。」

「稟……。ええ、その通りね。」

ワアアアアアア！

「！何か！？」

「はっ！どうやら中央軍をほぼ無視して撤退中の我が軍に追撃を掛けている模様です。」

「前線の武将は誰！？」

「半国の器、宮 京理に呂布、趙雲、関羽、張飛です！」

まずい！もう少し、もう少しだというのに！

「どうりで。あそこに見える我が軍の兵が絵を描いたような吹っ飛び方をしてる訳ですね。」

見れば稟の言う通りだった。

それに1番ここから離れている孫策軍がここまで来てしまえばそれはこちらの負けを意味するに等しい。

・・・だからこそ、あの4人だけで先に突撃を仕掛けているのね。では今すべきことは

「それでも撤退よ。全軍にそう伝えなさい。」

「はっ！」

「桂花、貴方は此処に残って私を引き続き指揮をとりなさい。」

「はっ。ですが、華琳様は？」

「私は、久しぶりに懐かしい顔に会いに行ってくるわ。稟、付いてきなさい。」

「なっ！？なりません！華琳様は我らの主柱。

もし、こんな所でもしもの事があつたら残された我らはどうなるのですか！？

それに・・・！」

「大丈夫よ、桂花。別に死に行く訳じゃないわ。」

「ですが・・・。」

「桂花、これは命令よ？」

「・・・はっ。」

一応、桂花を連れてくことも可能だけど稟は軍略に長け桂花は政略に。

である以上、前線に赴く訳だから稟を選ぶのは当然。

なのだけれど、やっぱりどこかで京理に会いたいと言う想いがあるのかしらね。

ふふ、恋をしている乙女というのはまた一段と可愛くなるものね。

懐かしいといってもまだ数カ月しか離れていないのだけれどね。

孫策 side

「頑張れ、ね。そんな事を伝える為だけに伝令を寄越すなんて京理ってもしかして馬鹿？」

「かもしれんな。奴の考え時に計り知れんからな。」

半国の器、宮 京理。

最初見たときは単に顔がかっこいいだけの優男かとも思ったけどここまで力を見せつけられるとはねー。

呂布や関羽、張飛に普通に勝っちゃうし冥琳並みに頭がいいし人としても出来ている。

しかも、武においてはこの世界に来てまだ理心流とやらを使った事が無いらしいし。

ここまで興味が絶えない人間は珍しいわね。

それに蓮華も決戦前にあれだけ言っておきながら、「京理、怒ってないかしら?」「何であんなこと言っちゃったんだろう私。」とずっと言っていたらしい。

全く、可愛い妹ね。

一刀が言ってたつんでれってやつね。

正直、今回京理が董卓軍にいなければ乗る気もなかった。
って!!

「そうだ冥琳!」

「なんだ?」

「京理って私達に借りがあるじゃない?」

「そうだな。それがどうした?まだ必要な時ではないだろう。

袁術から独立する時にでも力を貸してもらえばいい。」

「最初はそう思ったんだけどね!」

良い事が浮かんだわ。

「私達と子を為してもらいましょう!」

「・・・・・・・・・・は？」

京理 side

「くしゅん。」

「どうされましたかな？主。」

「京理様、戦場でクシャミ等、油断は命取りになりますよ。」

「・・・大丈夫？」

「にやははー！」

「誰かが噂してるのかもしれないな。」

「主はもてますからなあー。」

周りの兵を切り捨てながら星が皮肉を込めた視線を向ける。

俺何か悪いことしました？

しかも、良く分かんないけどあんま良い噂じゃ無さそうなんだけど・
・・。

てか愛紗、クシヤミはもはや不可抗力に近いだろ。

V S 反董卓連合（玖）（後書き）

最近キャラ最肩が激しくなってる？

キノセイデス。

V S反董卓連合く拾く（前書き）

お気に入り絶賛減少中

設定がダメなのか文がダメなのか、分かりませぬ。

とりあえず明日からキャンプ行くので少し更新が遅れますがご了承ください。

V S 反董卓連合（拾）

京理 side

孫策軍は、もう少しだな。

奴らには最初から檄の必要も無かったかな？ 敵が引き腰になってるのがここからでも良く分かる。

在り来たりの言い方をする、まるで軍全体が一つの生き物のように、といった所だろうか。

「しかし、雪蓮殿はあそこまで強かったのですね。」

中央軍を掠めながらこちらやってくる桃色の死神を見ながら愛紗が言う。

その暴れっぷりは桃色どころか何か赤黒い色を想像させる。

うん、考えるまでも無い。明らかに返り血の色。

俺も出来れば雪蓮とはこれからも戦いたくない。

だが、

「昨日から見えていたが、兵も思った以上に高い能力を持っているな。袁術から独立を狙っているというのもあながち夢物語では無かった訳だ。」

「笑いごとではありません、京理様。今は仲間に与していても……。」

「愛紗よ、そうカッカすると綺麗な顔に皺が出来てしまうぞ。」

「星！」

っと、それはさておきだ。流石に勢いが無くなってきたな。
4将にもそれぞれ疲れが見える。

このままでは元のじり貧の状態に戻ってしまう可能性が高い。
かといって中央軍の裏に回った曹操軍を追いかけてここまで来ているのだ。今から長安まで「はい、戻れ」と言って戻れる訳じゃない。
とすると、ここは一点突破を狙って陣が崩れた所を各個撃破するのが効率的か？

いや、それよりも今なら中央軍を雪蓮の軍と前後挟撃が出来る位置にある。

だがそれだと当初の朱里達と考えた作戦が・・・。

「星、恋、愛紗、鈴々、それに隊の者達よ、ここが正念場だ！一層奮起せよ！」

「「「おおおおおおー！！！！」」」

「莉羅。」

「ここに。」

もう既に呼ばずしてもいつも傍に居る存在だ。

現代で言う執事、メイド、側近、従者、そんな言葉が的確だろうか。

「詠、朱里、雛里を呼んでくれ。それと伝達の準備を。」

「御意。」

あまり時間が無い。出来れば朱里達には後方に居続けてもらいたかったが急を要する。

後は華琳達の出方にもよるが弱まってはいるがこの勢いは大事だ。この機を逃す手は無い、が。

これからどうすべきかは詠達と相談して決めるか。

臨機応変と行きたいが俺の判断だけで連合全体の命運を決めるような真似をする訳にはいかない。

「戦場で考え事かしら？」

戦いの中でありながら透き通るような声。
久しぶり・・・だろうか。

「・・・華琳。」

「久しぶりね、少しお話ししようか。」

周りで俺と華琳の兵達が殺しあっている事には意も介さずそんな事

を言ってくる。

その姿はまさに覇王。他人に感化されない強い信念を持っているように見える。

「御免被る。」

が、今はそんな事はどうでもいい。

華琳が出てきたという事は今までの過程のどこかで異常事態が発生したという事。

俺と話す為なら最初から別の方法がいくらでも考えられるし主を囚にするのも作戦としては非現実的で馬鹿げている。

つまりは、時間稼ぎ？

そういった意味では囚とも取れるがそれが最初から作戦の内なのかそうでないかで意味が大きく異なる。

「あら？釣れないわね。」

「華琳の魂胆は分からないが時間稼ぎなんだろう？」

そうでなければ最前線にトップが立つという多大なリスクを負ってまでここに来る事はある得ない。

戦争とは主一番、これは揺ぎ無い事実。

そこを逆手に取ったフェイクとも取れるがだとしてもあまりにもリスキーだ。

「さあ、それはどうかしら？」

しょうがないとはいえ今こういうやりとりをしている事すらも華琳の手の内のような感覚に陥りそうになる。

「俺が董卓軍に今も居ることについては何も言わないのか？」

周りも察していつしか俺と華琳の周りにはだれも居ない不思議な空間が出来ていた。

もしやこれを見越しての狙撃か？

いや、不確定要素の多すぎる案を華琳が飲むとは思えない。

が、それも本当の目的の確率を上げる要素と考えると？あながち無いとも言切れない。

暗殺というのは風評的にはあまり良くないが戦場で流れ弾に当たった、こういう場合は世間はどうか考えるか。

それは当たった方がダメだったと捉えられるのが普通。

くそ、今のままじゃ情報が足りない。

「それが、貴方の選択なのでしょう？」

「そうだ。ただ、華琳の考えに賛同してないからこちらに付いたわけじゃない。」

「では何故？」

「月、董卓が今の時代に必要なものを持っていた気がしたから。」

「それを守ると？」

「ああ。」

「その董卓が亡き今、何故抵抗を続ける？それが董卓の意思だから？」

「・・・違う。」

「では何故？」

間髪入れずに聞いてくる。

「良く分からないけどそうしなきゃいけない気がしてな。俺の為に華琳の為に。」

「意味の分からない事を言うわね。」

確かにその通りだ。この戦場の臭いや雰囲気によられて感覚がおかしくなってしまったのか。

「で、用件は？」

「だからさっき言ったでしょう？」

「話が進まないね。」

「あら？私はそれでも構わないわよ？」

時間稼ぎだからか？

「貴方と一緒に居られる時間が長くなるという事だもの。」

・・・華琳はどこか変わった気がする。そんな事を臆面もなく言うような子だったろうか。

それが本心ではないからか？分からない。

「今は一応俺達は敵同士なんだけど？」

「でもいずれ貴方は私の元に来るのでしょうか？」

まさか、半国の器ともあろうお方が約束を無碍にするのかしら？」

「そんな通り名のようなものはどうでもいい。

今話しているのは宮 京理と華琳、それ以外の何物でもない。」

「ふふ、そうだったわね。

・・・あら？可愛い子達ね。紹介してもらえるかしら？」

そこには莉羅に連れられてきた詠達が立っていた。

「あ、あのお邪魔しましたか？」

戦場の最中でありながらそんな言葉を聞けるこの空間はやはり異質。正直朱里達も良く来てくれたと思う。これが罠である可能性だってあるんだから。

俺がそこまで信頼に足る人物になったということか？だったらこれ程嬉しい事は無い。

「俺から呼んだんだ、そんな訳ないだろう。」

「それで、そいつは誰なの？」

そうか、詠は知らなかったな。

「曹操よ。よろしく。」

「！？何でこんな所に！？」

「それで、貴方の名前は？」

「連合軍の奴らに名乗る名なんて無いわ！それよりも京理、なんであんたがこんな奴と話をしてるのよ！」

朱里と雛理はまるで昼ドラのドロドロ展開を見ているような面持ちではわあわ言っている。

「落ち着け詠。」

「落ち着ける訳ないでしょ！」

その時だった。必死に詠を宥めようとする俺の顔を見て一瞬ひっそりと笑う華琳の顔が見えたのは。

・・・なるほどね。これも策、か。俺達の疑心暗鬼を誘うための。だからあのタイミングで出てきてさも実のありそうな話をする。

それを見た者はどう思うか？分からない筈が無い。

俺と華琳が繋がっているのでは？　こう考えるのが普通。

ただでさえ頭の良い彼女達なら、逆にこんな戦場のど真ん中で目立つような行為は普通しない、こんな事は当たり前のように分かっている。

だが、今は普通じゃない。その戦場のど真ん中にありながら戦闘が繰り返されていらない異質な空間にある。

であれば頭が短絡的になり一つの事象に目が行きすぎて本質に気付かない事も考えられる。

味方と敵のトップ同士が相対している中戦闘が起きないということ
は十分それに該当するに値する事実。

効果がある薬と思いこむ事で何かしらの改善が見られるプラシーボ

効果に近い物があるかもしれない。

華琳がそれを狙ってやっているのだとしたら・・・

それは相手を読む事が出来るような物。それは何を意味するか？

この時代においても情報は戦の結果を左右する重要な鍵。

相手を読む事が出来るような人間が情報を手に入れたならばそれは予知に近い物にも成り得る。

オカルトにも近い話になって来たがこれは冗談では済まないレベル。心理学を齧った俺だから分かるのかもしれないが普通の人間、特にこの時代の者なら絶対に気付けない。

やっぱり、霸王の名は伊達じゃないね。

現実には俺と詠達との間に亀裂が生じ始めている可能性があるのは事実。

そして戦況が今にも変わろうとしているこのタイミングでこれが起こったのも事実。

華琳・・・。

「これが、お前のやり方？」

「使える物は何でも使う、それが私よ。それが敵であろうと味方であろうとね。」

V S 反董卓連合（拾）（後書き）

華琳がチープな悪役キャラになったしまった感があります。
作者ですか？普通に経営学専攻です（あ
心理学は趣味に毛が生えたレベルです。

感想お待ちしております。

どちらかというとMなので、酷評万歳です

V S 反董卓連合（拾巻）（前書き）

50話キター！

お久しぶりです。

久しぶりで若干違和感ある気がしますすがご勘弁を

V S反董卓連合（拾巻）

京理 side

「落ち着いたか？」

あの後、4将に前線を任せ俺達は雪蓮が来るまでの間だけだが一時後退した。

「ええ・・・。」

「驚くのも無理も無いし俺が言っても信憑性に欠けるかもしれないが、おそらく俺と詠達の間に亀裂乃至はその可能性に成り得る一石を投じた、という事だろう。」

「確かに、あの空間にあってちょっと感覚がおかしくなっていたのかも。」

軍師失格なのかもしれないわね。」

「いや、それでいい。確かに将は軍師を信じ軍師はそれを疑え。

戦場で実際に戦う訳じゃないけど良くも悪くも戦つてのは戦の規模が大きくなればなるほど軍師に左右されるからね。

自分より頭がよく良い策を用いる軍師を将が信じるのは当たり前。

軍師は天候、兵糧、兵の精神状態、疲れ、忠義度、性格等様々な要因から最上と言える策を考えなおかつ相手の動きにも対応し次善の策もまた考えなければならぬ、時には兵を数で見てもそれを四則演算のように考える事も必要。

であれば今回のように勢力が入り混じった軍なら尚更軍師は味方の将が裏切るかもしれない、という事を念頭に置く必要がある。

例えそれが取り越し苦労に終わっても、ね。

もしかしたらそれを軍師としての器が小さい、信頼関係に無いからでは？と考える者もいるだろう。

だが、これもまたたればの話。万が一そのような事態が起きた場合責められるのはたして裏切った者だけなのか。

何故これを予測できなかったのか、軍師はどんな事にも対応して勝利の為に献策を行うのは当たり前ではないのか？

こういった意見が出ないと言えるだろうか？この乱世の時代であるからこそ他人に責任を擦り付け合う行為は現実問題起きている。

軍師からするとこういった類から自分を保護するって擁護的考えも必要でそれ以上にその裏切られた時に『他のみんなをどう生かすか』って事を考えなきゃいけなくなる以上やはりそういった事も頭に入れておくのもある種大切だと俺は思う。

そしてそういう自分とは違う観点を持った軍師が一人居るだけでその主様は安心できたりするものだよ。」

「「・・・。」」

今も周りが戦い続け喧騒が響く中、3人共ポカンとしている。

「どうした？」

「色んな見方があるのね。」

「本職であるお前らに諭すなんて失礼だったな。」

「いえ、参考になりました。」

「それも天の国での定説なのでしょうか？」

「いや、完全に俺の自論。何が正しいなんて俺には分からない。

人は正しいと思った事に対してそれを為すために色々な努力をする。それが周りから蔑まれるような物であっても称賛される物であってもそれがその人にとっての正しい事だから。

だから義っていう言葉は好きじゃないんだ。

事象の一面しか見ずにそれを悪と断定してしまう。

分かりやすい例でいえば黄巾の乱。あれは傍から見ると農民の、国に対しての反逆行為だった。

だがその多くは唯3人の少女の元に居たかったというだけの理由で集まっていた。

その中でも極少数だが集団を悪用して悪さを行うような奴もいる、と反論してくる者もいるだろう。

だがな、そんな奴らがいなかったらそもそも乱世なんて存在しないんだよ。

別に人を殺すような人物を庇う気はさらさらない。

雛里、自分の正義を振りかざして人を殺している俺はそいつらと違うと言えるのか？」

「!?!? え、えつとあのその・・・。」

名指しで質問された魔法少女があたふたしている。いや、正確にはあわあわしている。

「意地悪な言い方をしたね。

つまり

同じ結果をもたらしながらその過程で善し悪しを判断しているのが俺には矛盾に見えるって事だよ。」

雛里 side

そんな事一度も考えた事が無かったです。

「じゃあ、京理様は何が正しいか分からずに戦いに身を投じているということですか？」

「さっき言っただろう。人は正しいと思った事に対して努力をするんだよ。」

俺は皆を守り月の事を証明する事が正しいと思っている。どんな形であれな。」

この人は董卓さんと曹操さんに似ている気がします。

水と油のような相容れぬ、考え方が同時に存在しているような。

絶対に皆を守るという優しさが根底にある考えを持ちながら戦での結果を求めようとしている。

京理様はこの自分の行動の矛盾に気づいているの、かな？

いや、絶対に気づいている。だからこそ今もこうして苦しそうな顔を見せているのだと思う。

・・・では私がすべきことは

「・・・いつまで、しがらみにとらわれているのですか？」

「「!？」」

「どういう意味だ？」

若干だが殺気が感じられる。

武人でない私がここまで感じるのだからその濃さは計り知れない。
怖い。怖い。怖い。

京理様に出会って以来こんな感情を抱くのは初めてです。

「お二人が京理様にとって特別な存在であったのは分かります。」

だけど、このままでは今ここに居る宮 京理という一人の人間はどこか遠くに行ってしまう気がした。

「.....」

「ですが、今ここに居るのは私達です！」

「っ！」

京理様が改心なさるなら私は死んでもいい。

例え実際にそうなったとしてもそう思えるような主が見つかって私は幸せでした。

「今ここに居るのは私達であって董卓さんでも曹操さんでもありま

せん！

いつまで死んだ人間や敵対する人間にこだわるのですか！？」

「言いたい事は、それだけ？」

死も覚悟した

が、その時間こえたのは

「あれ？夫婦喧嘩かしら？」

「やれやれ。すまない京理、遅くなった。」

ある意味今一番京理様と・・・

V S反董卓連合く拾巻く（後書き）

50話目という事で浮かれてましたが実際戦闘中にこんな会話できる訳なす

ごめんなさい。

V S反董卓連合く拾貳く曇天の空に光（前書き）

京理無双&a m p.;やりたかった所に入ってきました。
※武将名訂正しました

V S反董卓連合く拾貳く曇天の空に光

京理 side

「こんな時に痴話喧嘩？ 全く、見せつけてくれるわね。」

「雪蓮、早かったな。」

雪蓮の言葉に後ろの小動物達がつんつんはわあわわしているが今は捨ておく。

「私がいるのだ、当たり前だろう。」

「今後冥琳以外に雪蓮の手綱を引ける奴が出てくるといいけど。」

「・・・いないだろうな。」

「ちよつとそれどういう意味よ？」

「まあ、そんな事は置いといて」

置くな！ という言葉もあえてスルーし

「助かった。」

一言だけ告げる。

二人は鳩に豆鉄砲を食らったような顔をしながらも何も言わずに微笑んできた。

てつきり茶化されるかと思ったがこの場においてはその笑顔は凄く

心地の良い物だった。
ふう、それと

「雛里、あとで話があるから。」

「へ？」

「さて、とりあえず問題はこれからどうするかだ。

長安の城を向こうに中央軍の後ろに俺達が位置する以上長安に今更
戻るといふ選択肢は無いに等しい。

相変わらずあの4人が勢いを保ったまま進軍してくれてるおかげで
曹操軍への追撃は容易い。」

「他の二軍はどうするのだ？」

「冥琳、分かっているんだろ？」

「お前の考える事は大体な。だが、本人の口から聞きたいのだよ。」

冥琳め、時間が無いってのに。

「優れた将の居ない軍など烏合の衆も同然。中央軍には優れた将は
鮑信位で兵の質、量的にもこちらが勝っている。

問題は公孫サンや馬超、袁家の二枚看板の居る袁紹軍だがこれは先
程の位置からまだ移動していないようだ。

つまり、俺達から見て正面が曹操軍、その奥に袁紹軍、そして左に
中央軍というのが現在の位置付けだ。

曹操は中央軍との挟撃を狙う訳でもなく袁紹軍の方へと後退してい
る。

であれば曹操軍と袁紹軍を同時に相手取る危険性が無い。

ここで最弱である中央軍を先に叩く選択をすると曹操軍の横撃という嬉しい贈り物が待っている。

2面作戦も考えたがこの時点で時間が予定よりかかってしまっている以上それは厳しい。

ならばやはり当初の作戦通りこのまま進むべきだ。

そして、曹操軍を撃破後そのまま虎牢関へ向かう。」

「「!？」」

「虎牢関ってあの虎牢関？関所の？」

軍師連中が驚いているのをよそに雪蓮が不思議そうに聞いてくる。

「そうだ。他の人異論はある？」

「京理、お前は一体何手先まで読んでいるのだ？」

どうやら雪蓮はちんぷんかんぷんらしいが軍師連中は流石だ、この有用性に気付いている。

冥琳 side

なんて奴だ。あいつはそれすらも見越していたというのか？
正しく本当の化け物。

「ねーねー、どういう事なの？虎牢関が凄い頑丈な関所だったのは

知ってるけど。」

雪蓮はやはりと言ったところか、分からないようだ。

「兵力差で負けていたこちらが万が一長安で籠城を行うとなるとどうなる？」

住民に負担が掛かり兵糧にも問題が出てくるだろう？」

「なるほどね」

「雪蓮、相手の軍の主力である袁紹や曹操はどこから来た？」

「どこって冀州とか豫州とかでしょ？」

「そうだな、じゃあその軍が元の場所に戻るにはどこを通る？」

「！！！！」

「虎牢関に蓋をする事で曹操達の自分の領地との連絡や供給を遮断し、なおかつ首都である洛陽とも情報がいかないようにする。」

相手が兵糧を常に充実した状態でいられたのは元からあったのではなくそこを通して得ていたに過ぎない。

そして相手が兵糧が無くなり諦めて虎牢関を抜けずに自国に戻った時、それは我々の勝利を意味する。

後はその時に弱体化した連合軍を追撃するなり長安に戻るなりすることも可能だという訳よ。

それにまさか風評目的で董卓の暴政から救い来た連中が長安の民に手を出す事は出来ないだろう。まあ、もしそんな事したらこちらに大義名分が出来るだけよ。

つまりこれは短期決戦という名の長期戦。」

言い得て妙だがこれしか言いようが無い。

「それだけじゃない。ここで今俺達が持っている切り札が生きるのさ。」

「切り札?・・・まさか!」

「そう、

両皇子だ。

二人を洛陽に戻せば民はどう見る?

俺達は真の義を掲げた漢の忠臣という証拠にもなり俺や詠達の目的でもあった世論になりつつあった『董卓は悪』という心象をすら払拭できる。」

「す、すごい!やっぱり京理様は凄いよ雛里ちゃん!」

「そうだね、朱里ちゃん!」

「・・・あんたの脳みそ見てみたいわ。」

朱里や雛里、詠達が感嘆の声を上げている。

「それに冥琳。」

「!?!? な、なんだ?」

急に名指しで言われ吃驚してしまった。大軍師ともあろうものが情けない。

「こちら側だと揚州もあるからお前らの古参の者達も居るだろう? だからいざという時の兵糧確保等も困らない。」

更にその古参の件だが元々こちらが兵力差で負けていた事や今後相手が更に増える事も考えてそれを話した結果、美羽が快諾してくれた。

まあ、その可能性があったからこそ俺は美羽と孫策の二人をこちら側に迎えようと思った訳だが。」

・・・袁術め。私達が何度同じ事を言っても聞かなかったというのに京理の一言で快諾とはな。

しかし、この男に勝てる人間は存在するのだろうか?

武において

知において

心において

それなのにどこか人間以上に人間臭くある所がまたこの男の魅力でもある。

完全な人間等存在しない。

自分の専門分野で負けたというのにそれが悔しくはあるものなのか嬉しくも思う。

不思議な感情ではあるが京理がやはり凄い男と再確認出来たのだから。

雪蓮が先程言っていた子を為すという話、満更でもない、か。

我々孫呉の悲願は誰かに付く事で出来なくなる訳ではない。

「冥琳。」

「ん？どうした？」

「これで借りはチャラな！」

子供っぽい仕草を見せる京理。

「まだ後一つ残っているぞ？さっきの分が。」

「・・・・・・・・鬼ーーーーー！！！」

京理よ、惚れたとしてもそれとこれとは話は別だぞ？

V S反董卓連合く拾弑く曇天の空に光（後書き）

感想くだちい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4177u/>

夢の跡

2011年10月7日02時59分発行